
ララサララ物語 ～女王と歌と常闇と～

夏乃市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ララサララ物語　　く女王と歌と常闇とく

【Nコード】

N0970F

【作者名】

夏乃市

【あらすじ】

魔法産業が盛んな小さな国へアプ・ファル・サル王国で、突如十五歳の第一王女ララサララが即位した——王位を巡る陰謀と、王国百二十年の歴史に隠された秘密。旅の歌い手マーリーと、ララサララの運命は——

プロローグ

漆黒の闇だった。

上も下も、右も左も、前も後ろも、冷たい大理石に閉ざされている。

まるで棺のようだ、薄れかけた意識の片隅で、彼女は思った。どれほどの時間が経ったのだろうか。時間の感覚は完全に麻痺してしまった。空腹も渴きも限界を超えた。汗と排泄物による臭気も、気にならなくなった。

光がまったく届かないのに、換気孔だけはどこかに設けてあるらしい。そこを伝って、空気と共に、微かな音が伝わってくる。しかし、それに耳を澄ますことも、いつの間になくなった。

案外発狂しないものだ、と彼女は思った。気が触れてしまえば、こうして、ただ死を待ち続けることもなくなるだろうに。しかし、いつか自分の遺体が誰かに発見されたとき、発狂して死んだと、そう思われることは耐えられない。それは、彼女の最後の矜持だ。一国の王女として、それだけは貫き通さねばならない。

声にならない笑いがもれた。こんな所に隠れていて、王女の矜持が聞いて呆れる。まだ笑える自分に驚きつつ、彼女は残された力で笑い続ける。王女だと胸を張りたいのなら、賊を前にしてなお、毅然とするべきだった。いや、あれは逆臣の兵だったのだろうか？

あれほど帝王学を説き、君主論を説いていた師は、侵入者の手に抜き身の刃を見るや、彼女をこの棺のような場所に押し込めたのだ。

白髪白髭の師の顔が浮かぶ。わかっている。自分が護身刀をかざしたとしても、凶刃に抗うことなどできはしなかった。師は、彼女の身を守ってくれたのだ。そして、おそらく生きてはいまい。

王族とは、毅然とした生き方こそを問われるのか？
それとも、その血を残し続けてこそ王族なのか？

声なき笑いは続いていった。師の授業中、こんなにまじめに考えたことなどなかった。再び師に教えを請う機会があるなら訊いてみたい。そして、父王ふおうや母様ははさまや、兄上にも訊いてみたいと思う。王国の将来についても、もっともつと話し合ってみよう。

頬を涙が伝った。この石の棺に隠れてから、始めて流れる涙だった。

父王にも母様にも、兄上にも、そして師にも、おそらくもう会うことはあるまい。八代続いた王家は、父王の代で潰えてしまったのだ。

漆黒の闇が、全身を優しく包んでくれている。このまま、自分も闇の一部となろう。王宮の中にひっそりと造られた、大理石の虚を満たす、ねばりつく闇となるのだ。

消えゆく意識の片隅で彼女は願った。

このまま、永遠に闇でありますようにと――

マリー 1

〈東の海〉に面した、アップ・ファル・サル王国の港町、アップ・タリル。

少し前に大きな貿易船が入港し、港は大いに活況を呈していた。

そんな岸壁の一角、積み上げられた木箱や麻袋の脇に、なにやら人集りができていた。人々の輪の中心にいるのは、翡翠色の瞳を持ち、腰までの金髪が美しい三十代半ばと思しき女性と、同じ髪の色をした十四〜五歳の少年。ふたりの面立ちは良く似ており親子と知れた。簡素だが清潔な異国風の衣装に身を包んだ親子は、笑顔で集まった人々に向き合っていた。

母親が一步前に進みでると、大きく息を吸った。

そして、歌い始めた。

——母なる海はいと深く 父なる山は遙かなり
愛しき風は清らかに 頼もしき日の輝ける
誇りは我ら胸に満ち 名は世界に響き行く
ああ、麗しの麗しの アップ・ファル・サル

異邦いほうの美しき母が歌ったのは、アップ・ファル・サル王国を讃える歌。この国に住まうもので、この〈麗しの王国〉を知らぬ者などいない。

どこまでも透き通った彼女の歌声は、初夏の港に響き渡り、伝説の妖怪〈海歌姫〉うみうたひめよろしく人々の心をとらえた。〈海歌姫〉は、その妙なる歌声で船乗り達を虜にし、海へ引きずり込むという。

徐々に港の喧騒けんそうが清々しい静寂に取って代わり、歌声が三番までを歌いきった頃には、声の届く範囲の人々が皆、耳を澄まして聴き入っていた。

「い清聴せいちょう、ありがとうございます」

鈴を転がすような美しい声で金髪の母が礼を言い、長いスカートの裾を広げて膝を軽く曲げた。誰もが余韻をかみしめるだけの時間を経て、地鳴りのような拍手が巻き起こる。旅の歌い手らしい親子は、港町アプ・タリルの人々の心を、一曲で虜にしたのだった。

母親と入れ替わりに前に出た少年が、万雷の拍手を手で制すると、高らかに言った。

「皆様にこれからお目にかけますのは、はるか南西アニシャ連邦が一国、テテン王国王宮で起こった悲しき物語です。お代は観てのお歸りに」

そして、傍らの荷物から数枚の仮面と弦楽器を取り出すと、仮面の一枚をつけ、楽器を足下に置いた。

それに合わせて、今度は母親がついと前に出る。

「時は春。テテン王国の勇猛なる第一王子アグシャータは、恋に落ちました」

「ああ、愛しのメメーラよ！」

髭面の仮面をつけた少年の声は、青年の男の声に変わった。

「へうそつき面」だ、と誰かが言った。それは、魔力で仮面をつけた者の声を変える、へうそつき面」と称される魔法具だった。仮面の額には小さな青い石がはめ込まれ、それが微かに光を帯びている。やはり同じような石で飾られた弦楽器が、ポロロン、と勝手に音を紡ぎ始める。これも魔法具で、〈風の弦〉と呼ばれているものだった。

親子は〈風の弦〉の旋律に乗り、いくつもの仮面を使い分け、複数の人物を演じ分けてゆく。仮面を入れ替え、同じ人物を母と子が状況によって入れ替わって演じたりもする。そして、折々に挿まれる美しい歌声――

観衆はうつとりと物語に引き込まれ、いつしかアグシャータとメメーラの悲恋の物語は、最高潮を迎えていた。

「アグシャータ！ 私の誇り高き獅子！ 再びの命が許されるなら、今度こそ！」

吊り目の女性の仮面をつけた母が言う。

「メメーラ！ その思いは我も同じぞ！」

髭面の仮面をつけた少年が言う。

そして、物語は幕を下ろした。

親子は仮面を外して立ち上がると、深く一礼をした。ふたりが顔を上げたときには、この日二度目の拍手の嵐が巻き起こっていた。

マーリー 2

「空いてる席にかけて、ゆっくりしてよ」

恰幅の良い女主人が言った。場所は「一番亭」という宿屋兼食堂だ。

「ありがとうございます」

金髪の母親が礼を言い、息子を促して席に着いた。昼時には早いのか、店内に客の姿は疎らだった。

一刻ほど前（約三十分）、岸壁で歌い終えた親子は、集まった人々に宿の場所をたずねた。少年の手元の帽子は、観衆が入れた祝儀が溢れていた。それを目ざとく見つけた何人かが案内を申し出たが、脇から出てきたこの女主人が、ふたりを強引にここまで引っ張ってきたのだった。

「あんた達、あんな連中に案内させたら、いくらぼったくられるかわかんないよ。その点、うちは値段は良心的だし、料理も美味しい。真心一番の「一番亭」ってね」

女主人は、がはは、と豪快に笑うと、大きな手を前に差し出した。「あたしはマーサだ」

金髪の母親は椅子から軽やかに立ち上がり、マーサの手を握り返した。

「私はルーリーです。こっちが、息子のマーリー」

少年も立ち上がって、マーサに向かって一礼した。

「お世話になります」

「堅苦しい挨拶はやめとくれ。ここは、荒くれ者ばかりの港町だからね」

マーサは、「何か食べるかい」と言って、厨房に足を向けた。

「じゃあ、お店の看板料理を」とマーリー。

店の入り口に掲げられた「一番亭」の看板に下に、捕り立ての魚を使った料理の名前が大きく書いてあったのを、マーリーは目聡く

見つけていた。マーサは振り返ると破顔した。

「まったく、食えない坊やだね。その歳でもう女を煽てる術を心得ている。そう言われちゃ、腕によりをかけないわけにはいかないじゃないか」

マーリーがはにかんだように鼻の頭をかき、マーサは鼻歌で〈麗しの王国〉を歌いながら厨房の奥に引っ込んだ。ルーリーはその様子を、嬉しそうな顔で眺めていた。

マーリー 3

夜になると、〈一番亭〉は酒と食事を求める人々でごった返した。「あんた達、あんまり邪魔するんじゃないよ！」マーサの声が店に響き渡る。

はーい、と声をあわせて返事をしたのは、マーサのふたりの娘、八歳のアンナと六歳のハンナだ。ふたりは店の常連客の人気者で、いつもマーサの手伝いをしつつ、卓の間を走り回っている。そんなふたりが、今日はルーリーとマーリーが座った卓に居座っていた。「やっぱりふたりとも女の子だな。年頃の男の子が気になるか？」常連客のひとりが、麦酒むぎしゅの杯を傾けながら赤ら顔で言う。

「あら親方、それは焼き餅？」

アンナのこましゃくれた口調は、店中の笑いを誘った。アンナが不満そうに頬を膨らませる。

一方妹のハンナは、ルーリーの脇に張り付いて、彼女の手元を熱心に見つめていた。

「はい、出来上がりよ」

そう言ったルーリーの手の中には、紙で折った鳥の姿があった。わあ！ とハンナが歓声をあげ、両手で大事にそれを受け取る。

「巧うまいもんだなあ」

さつき親方と呼ばれた五十絡みの厳つい男が、ルーリーに声をかけた。

「ベスーニヤ帝国の北方の町に伝わる、子供達の冬の遊びです。雪に閉じ込められた冬場は、ああして紙で色々なものをつくるんですよ」

「あんた達、そこの出かい？」

「いいえ。ベスーニヤの方に教わったんです」

ルーリーが屈託なく笑った。笑うと少女のようだ。その笑顔につられるようにして、親方は親子の卓に腰を下ろした。そして、「マ

ーサ、このふたりに俺の奢りで飲み物を！」と叫んだ。

「俺は、ここら一帯の人足をまとめているラドってもんだ。親方と呼ばれてる」

日に焼けた顔で、ラド親方は、にかつと笑った。ルーリーは愛想良く名乗り、マーリーは幾分慥然とした表情で会釈した。

「ほら親方、坊やに警戒されてるよ。綺麗なお母さんを持つと大変だね」

マーサが、ふたり分の飲み物を持って卓にやってくる。そして、ハンナの手の中の折り紙を見ると、「あらまあ良かったね」と言った。

マーリーの態度を窺めるルーリーを、ラド親方は遮った。

「坊主。マーリーと言ったか。心配はいらねえ、俺には恋女房がいるからな」

「何が恋女房だよ、尻に敷かれてるくせに」

マーサが笑いながら言い、親子もつられて笑った。

マーリー 4

夕食時が一段落すると、ルーリーはマーサと共に厨房に入っていた。マーサに異国の料理を教えて欲しいと請われたのだった。

夜が更けてきたこともあり、アンナとハンナは寝室に引き上げていった。

マーリーが座る卓には、いつの間にかラド親方の知り合いが集まっていた。

「坊主、ちゃんと飲んでるか？」

三十絡みの禿頭とくとうきよく巨軀きよの男が言う。彼の前には、空になった麦酒の杯が並んでいる。

「お酒ってそんなに美味しいの？」とマーリーは発泡果汁を飲みながら訊いた。

「人生は酒と女のためにある」

鼻の高い痩せた男が赤ら顔かさおで嘔おういた。そして、「麦酒もう一杯」と厨房に向かって叫んだ。

「あんた達、明日も仕事だろう。いい加減にしときな」顔も出さずにマーサが答える。

「マーサの言うとおりだな」とラド親方が言い、鼻高男はなたかおとこは首をすくめた。

「坊主達は明日はどうするんだ？　しばらくこの町にいられるのか？」禿頭男とくとうおとこが訊く。

マーリーは首を振った。

「王都おうとに向かう予定なんだ」

「王都ファル・バラオか」鼻高男が呟いた。

アップ・ファル・サル王国の王都ファル・バラオは、ここ港町アップ・タリルから歩いて七日ほどの距離に位置している。アップ・ファル・サル王宮いただを戴く大きな町だ。

「何か用があるのかい？」禿頭男は、何かと聞きたがる質たちらしかった。

た。

マーリーが答えを考えている間に、ラド親方が禿頭男を窘めた。
「答えなくていいよ坊主。すまん。港は通りすぎる場所だ。詮索しないのがここの決まり事だ。こいつ、今日は酔っているみたいだな」

「別に隠すようなことは何もないよ。立ち寄った国では、必ず首都に寄ることになっているんだ。その国のことが一番よくわかるから」
「聞いたことがあるぞ」と叫んだのは鼻高男だ。「旅の歌い手は、他国の出来事を歌にするんだってな？」

「うん。どこに行っても、みんな他の国のことを知りたがるんだ。今日港でやったのはテテン王宮の恋物語だったけど、色々な歌があるよ。話だけを売る場合もあるんだ」

「なんか面白い話があるのか？」禿頭男が身を乗り出した。

「タダじゃねえって、今言ってたじゃないか」

ラド親方がそう言うのを聞いて、マーリーは「交換にしよう」と言った。「この国のことを教えてよ」

「よし、その話乗った。お互いの情報交換と行こうじゃないか」

禿頭男が嬉しそうに声を上げた。ラド親方と鼻高男も興味を示し、マーリーと彼らの交渉は成立した。

マリー 5

お互いどんな話が聞きたいかを話し合った結果、マリーは通ってきた国々の様子を、ラド親方達はアップ・ファル・サル王宮のことを話すことになった。

「大きな事件の話とかじゃなくていいの？」と訊くマリーに、ラド親方は笑って答えた。

「ここは港町だからな。そういう話は結構聞こえてくるもんだ。それよりも、坊主が肌で感じた他国の様子に興味がある」

ふーん、とマリーは頷くと、しばらく考えてから話し始めた。

「僕と母さんは、三ヶ月位前に、アニシャ連邦のテテン王国を東に向かつて出立したんだ」

アニシャ連邦は、大陸の南に広がる十の国が集まった連邦国家だ。大陸を南北に分断するアパニール山脈の南東に広がっている。テテン王国は、横に長いアニシャ連邦の中ほどに位置する、連邦十ヶ国では一番国土の小さい国だった。その東に、アニシャ東方三国と呼ばれる国々がある。テテン王国の東、〈中の海〉に面したシャル・バダ国。さらに東、〈中の海〉と〈東の海〉の交わる位置にあるガール皇国。二つの国の北に位置し、アパニール山脈の東端を戴き、〈東の海〉に面しているデル・マタル王国。このアニシャ東方三国は農業が盛んで、一大穀倉地帯となっていた。

「シャル・バダ国からガール皇国、デル・マタル王国と抜けたんだ。ちょうど種蒔きの時期で、〈種蒔き歌〉を歌うと喜ばれるから。それにあわせて北上する感じで」

〈種蒔き歌〉は、農作業のときに農民達が声を合わせて歌う歌だ。豊作祈願の意味が込められている。

「毎年、色々な国で〈種蒔き歌〉を歌うけど、今年通ったアニシャ東方三国では、あわせてちょっと違う歌が流行ってたんだ」

マリーは、手で小さく拍子を取りながら歌い始めた。

——大きく広げた手で 友と三人輪になろう
我ら三人集まれば 実りは小屋から溢れるほどに
大きく広い両腕で 家と土地を守り抜こう
一人では小さくて 挫けそうなきときもあるけれど
大きく手を広げて いつも三人輪になろう
孤高の心を大切に それでも三人輪になろう

「なんだい、その歌は」鼻高男が目を丸くした。

「アニシヤ東方三国の歌だって。連邦は十ヶ国あるのに、三国だけの歌があるなんて面白いよね」

「去年、アニシヤ東方三国は、随分と豊作だったんだよな」とラド親方。

「うん。でも、アニシヤ連邦会議が、非常事特別統制価格の設定と、連邦内での穀物分配の統制を行ったんだって。連邦は広いから、西の方は不作だったらいいんだ。だから、せっかく豊作だったのに、農民はあまり儲からなかったみたいだよ」

「そうか。それで、三国だけの歌ってわけか」

「あと、デル・マタル王国では、こんなのも流行ってた」

——西の花嫁持ってきた 歌と色香と麻袋

東の花婿差し出した 心と麦と米と金

ラド親方は大いに笑い、「随分と辛辣しんらつだな」と言った。

「春に、デル・マタル王国の第三王子様のところに、西のジャランダ王国のお姫様が嫁いできたらしいんだけど、食料支援のための政略結婚だったんじゃないかって」

「アニシヤ連邦内の姻戚外交は日常茶飯事だっていうじゃないか。そりゃあ、国民は随分と不満が溜いんせきがこまってるなあ」

ラド親方が嘆息し、他のふたりもわかったような顔で何やら頷い

た。

「さあ、今度はこの国のことを教えて」

男達三人は、誰が話をするかしばらく譲り合っていたが、結局ラド親方が話をするようになった。うほん、と咳払いを一つすると、ラド親方は話し始めた。

「三ヶ月ほど前のことだから、坊主達がテテン王国を出た頃のことだな。この国の王様が代替わりしたんだ」

「前の王様は亡くなられたの？」

「いや、そうじゃないんだが……」

ラド親方は、アップ・ファル・サル王宮の不思議な代替わり劇について話し始めた。

マリー 6

アプ・ファル・サル王国は、大陸の東端中ほどに位置する、〈東の海〉に面した小さな国だ。

アパニール山脈から連なるアパ・カタラ連峰の雪解け水は、タリル川に集まり、〈東の海〉へと注いでいる。その流れは扇状地^{せんじょうち}を形作り、そこで人々は農業を営み、やがて国となった。王都ファル・バラオを筆頭とする大小約六十の村や町を有する小さな国、それがアプ・ファル・サル王国だ。

平原の村々、山の麓の鉱山、そして港町。独自に発展してきたこれらの地域を一つにまとめ、王国の建国を初代国王ババカタラ・バラオが宣^{せん}したのが、今から遡ること百二十年ほど前のことだった。アプ・ファル・サルとは、〈山と海の間の地〉を意味し、元々この地域を呼ぶのに使われていた言葉だ。

地図を広げてみると、王国の北には、北の雄ベスーニヤ帝国が、アパ・カタラ連峰の反対側の裾まで迫り、南には、近年その勢力を拡大しつつあるアニシャ連邦が、アパニール山脈の東端から広がる広大な〈黒の森〉の南の端まで国土を広げていた。

アパ・カタラ連峰と〈黒の森〉が天然の要害^{ようがい}を成し、地勢^{ちせい}的に攻め難いとはいえ、この地がどちらかの国に組み入れられたとしても、何ら不思議はなかった。しかし、アプ・ファル・サル王国は建国以来一度も他国に侵攻を許すことなく、その歴史を刻んできた。

その最大の理由は王国の産業に求めることができる。

——魔法である。

魔法は、かつては精霊と契約した魔法使いしか行い得ない、非常に限定された技術であった。しかし、二百年ほど前の〈龍青玉^{りゅうせいぎよく}〉と呼ばれる石の発見以来、様相が変わった。

太古の魔竜の化石ともいわれる〈龍青玉〉は、石そのものが魔力を蓄えている。それまでは、魔力とは、術者が〈精霊との契約〉と

〈詠唱〉^{えいしやう}によって導き出すもので、その場で発揮される以外に、蓄えることはできないものだった。しかし、〈龍青玉〉は始めから魔力を蓄えており、手順を踏めばいつでもそれを利用することができた。それこそ、魔法使いでなくても使えたのである。

方向性と形を持たない、純粹な力と解される〈魔力〉。それを操り、ことをなすのが〈魔法〉だ。

それまでの魔法は、奔出する力が大き過ぎて操るのに困難を極めた。そのため、大規模な土木工事や戦闘、あげく王侯貴族の遠距離の移動等に主に使われてきたに過ぎなかった。そんな中で、龍青玉を加工し、魔力を自在に扱う方法を確立したのは、アップ・ファル・サル地方の魔法技術者達だったのである。

アップ・ファル・サルの鉱山では、龍青玉が産する。それ自体は珍しいことではない。しかし、それに高度な魔法細工を施し魔法具へと加工する技術は、他国の追隨を許さない。それが、この小さな王国の価値を飛躍的に高めていた。近年まで地理的にほとんど顧みられることのなかった小さな扇状地は、今や世界の魔法産業の中心だった。仮にその魔法技術を手に入れることができれば、軍事バランスから経済バランスまで、国際情勢を大きく動かすだけの価値をアップ・ファル・サル王国は秘めていた。

しかし、ベスーニャ帝国にしても、アニシャ連邦にしても、不思議とこの国に手出しをしてこなかった。理由は二つ考えられていた。アップ・ファル・サル王国を挟んで両大国がにらみ合った結果、お互い疎んでしまい均衡が取れている、というのが一つ。王国全体に巨大な魔法が仕掛けられているという伝説がまことしやかに囁かれ、^{ささや}しかもそれが信じられている、というのがもう一つだった。

それはどんな伝説か――

龍青玉の発見以来、魔法技術は規模を小さく小さくする方向に発達してきた。しかし、アップ・ファル・サル王国では、その威力を大きくする技術も開発されていて、それは、アップ・ファル・サルの王族バラオ王家の秘伝とされている。アップ・ファル・サル王宮には他

に類を見ない巨大な龍青玉があり、それが、王国を他国の侵攻から守っている。下手に攻め込むとその魔法が発動し、何者も生きて帰ることができない――

マリー 7

そんなアップ・ファル・サル王国に異変が起こったのは、三ヶ月ほど前のことだった。

第八代アップ・ファル・サル王パパスカ・バラオが、突然王位を退いたのである。

パパスカ王は四十三歳と若く、体調を崩しているとの話もなく、その突然の退位は国民を驚かせた。詩や歌を作ることを好み、また、その才能にも恵まれていたパパスカ王は、国民に慕われていた。

かてて加えて、王位を継承したのが十五歳の王女ララサラ・バラオだったことが、国民の驚愕と混乱に拍車をかけた。ララサラは第一王女ではあるが、王位継承権は第二位。継承権第一位は、二歳年上の兄、第一王子カカパラス・バラオが持っていたのである。このときカカパラス王子は、アニシャ連邦のデル・マタル王国に留学中であつた。

ララサラ王女の王位継承は、パパスカ王の勅命だと発表された。勅命といえども、それは例外中の例外で、国民に大きな不安を抱かせた。

ララ姫の愛称で国民に慕われているララサラは聡明な王女で、王としての資質に疑問を挟む者はいなかったが、それとこれとは話が別である。〈豪胆〉の通り名で評されることの多いカカパラスもまた、王たる器の王子であつた。ゆくゆくは彼が王位を継ぐことで、王国は永く安泰だろうと、そういう気運が高かつたのである。

国民の疑念と憶測が渦巻く中、戴冠式はつつがなく執り行われた。鉦山候サリユル、平原候マーテチス、港灣候アップセンの三諸侯^{しよこう}は、カカパラス王子のことはおくびにも出さず、新女王に忠誠を誓った。そして、女王が十五歳と若いことから、三諸侯揃って後見に立つと請け合つた。

王都ファル・バラオの精霊大聖堂にて、大司教から言祝ぎ^{こしほ}と精霊

の秘儀を受け、王冠への誓いをたてたらサララ・バラオは、晴れて第九代アップ・ファル・サル王となったのである。

「ララ姫はな……」ラド親方がしんみりとした口調で言う。「へ早春の息吹」と称される姫様だったんだ」

明るく、勝ち気で、父王に似て歌が上手い。どんな場に出ても、早春の清涼な風のごとく、人々を魅了する王女だったという。

「俺は姫様の歌を聴いたことがあってよ」鼻高男が自慢げに胸を反らした。「この町の精霊聖堂が改修された落成式に、姫様が駆けつけてくれたんだ。あのとき、聖堂に入れたのは抽選で選ばれた五十人だったんだが、俺は抽選を通ったんだよ」

「お前、その話ばかりだな」と禿頭男。

「坊主は初めて聞く話なんだからいいじゃねえか。とにかく、町中の連中が応募した抽選をくぐり抜けた俺は、聖堂の前から七列目の席で姫様の歌を拝聴したのよ。美しかった。いやあ、美しかったなあ」

うっとりとする鼻高男に苦笑しつつ、ラド親方は言った。

「俺達にしてみりゃ、王宮内でのゴタゴタは正直どうでも良いんだ。パパマスカ王の気まぐれでも、カカパラス王子を良く思っていない誰かの陰謀でも、そんなことはかまいはしない。日々仕事があって、こうして飯と酒にありつけることが何より大事だからな。でも……」

「でも？」

「王となったララ姫が、変わってしまったことが悲しいんだ。ララサララ・バラオ女王は、もう、へ早春の息吹へララ姫ではなくなっってしまった……」

戴冠式の最後、王としての初めての発言に際して、ララサララ・バラオは、たったひとこと、こう言ったという。

「余の望みは常闇である」と。

マーリー 9

〈一番亭〉の客室は小さく、ルーリーとマーリーが案内された部屋は、小さな藁の寝台が二つで一杯だった。それでも、荷物の少ないふたりには充分だったし、昨晚までの船旅と比べたら天国といった。マーリーは寝台の上に座り、窓から差し込む月明かりで〈うそつき面〉を磨いていた。船の上でも何度となく使用したため、潮風に汚れてしまっている。今手入れをしておかないと、龍青玉のはめ込まれた木製の面は、早々に痛んでしまうだろう。

隣の寝台から、ルーリーの規則正しい寝息が聞こえてくる。それを聞きながら黙々と作業をこなしているうちに、マーリーはいつしかララサララ女王のことを考えていた。

ララサララ・バラオ。自分と同じ十五歳で一国の王位に就いた女の子。

十五歳といえば、世間ではようやく一人前として認められる歳だ。働き手としても雇ってもらえることができる。しかしそれは、子供から大人という括りへ移され、それまで許されていたこと、見逃してもらえていたこと、庇われていたこと、そういう特権を失うことを意味している。

マーリーは考える。自分は少しは大人になれているのだろうか。物心ついた頃からルーリーとふたりで旅をしてきた。父親の顔は知らない。今、突然ルーリーがいなくなったら、自分は旅を続けることができるのだろうか。

自分と王女では立場があまりにも違う。王族として、王女として育てられたララサララには、いつ何時王位に就いても良いだけの心構えがあつたに違いないのだが――

マーリーは手を休めて、窓の外の日を見上げた。

王位についた十五歳の姫様が見事な威厳をみせた――という話だったのなら、マーリーは単に感嘆して終わっただろう。その逸話を

どんな歌にしたらいいか、楽しく考えたに違いない。しかし、常闇を望むと言ったララサラの話は、マーリーの心を激しく揺さぶった。常闇が何を指しているのか、それは未だに謎だという――

ララサラという十五歳の少女に、常闇を望むと言わしめたものは何だったのか。

へ早春の息吹〱と称され慕われた王女に、一体何があったのか。

マーリーは彼女に会ってみたいと思った。

ララサララ 1

アプ・ファル・サル王宮の〈奥の宮〉。女王ララサララ・バラオの居室は、その最奥に位置していた。

「姫様、お目覚めでいらっしゃいますか？」

部屋の入り口に立てられた豪華な屏風しょうしゃの前で、女王付き女官の ril が声を上げた。

微かな衣擦れの音が聞こえ、やがて、「ああ」という気怠い声が返ってくる。

「おはようございます。姫様」

ril は、つまずかないように慎重に室内に足を踏み入れた。部屋の中には灯り一つなく、窓は完璧に目張りされていて、朝だというのに自らの手も見えないほど真っ暗だ。「望みは常闇である」と言ったララサララの言葉を、部屋の明るさのことと解した官の仕事だった。

「いつまで姫と呼ぶ気だ」

たいして咎とがめる風でもなくそう言われて、しかし ril は答えず、手探りで窓を探し当てると、その一つを開け放った。

「……！」

強烈な夏の朝日が室内に飛び込み、一瞬にして闇を追い払う。豪華な寝台の上に座ったララサララは、光の奔流に両手で目を覆い、声にならない声を上げた。寝乱れた腰まである褐色の髪が、光をうけてきらきらと輝く。その姿は、髪に埋もれているという表現が相応しい有様だった。

「姫様、今日も良いお天気ですよ」

三つある窓をすべて開け放つと、ril は窓際で微笑んだ。ほつれ毛一本なく綺麗に束ねられた黒髪が、朝日に艶つやめく。わずかにそばかすの浮いた人懐っこいその笑顔に、ララサララもふっと笑みが漏れた。ril は十八歳。もう六年もララサララ付きの女官をやっている。

る。

「まだ答えを聞いていないぞ」

せかせかとララサララに近づいたリルは、手際よくララサララの寝間着と下着を脱がし、新しい昼用の下着をつけさせた。そして、顔を拭い、軽く髪を梳ると、寝台脇の卓から呼び鈴を手を取った。

「よろしいですか？ 姫様」

少し悪戯っぽい表情で言うリルに、ララサララは苦虫をかみ潰したような顔をした。結局、「姫と呼ぶことをやめよ」とララサララが言わないことを、リルは知っているのだ。しかも、他人の目があるところでは決して姫とは呼ばない。

「……良い」

呼び鈴が振られ、着付け、髪結い、化粧それぞれの専門女官が入ってきた。

「それでは陛下、失礼いたします」入れ替わりにリルが辞する。

朝のひととき、姫に帰れるララサララの時間は、瞬く間に終わりを告げた。

ララサララ 2

「本日もご機嫌麗しゅう。陛下」

鉦山候ヴラン・サリユルの慇懃な挨拶を、ララサララは僅かな首肯のみで受けた。場所は王宮の朝議堂。一日置きに開かれる、定例の王宮朝議の席である。

大きな会議用卓には、上座のララサララに続いて三諸侯が座し、王宮六署六部の長達が席を連ねている。ちなみに、六署―司青署・司紅署・司紫署・司墨署・司翠署・司黄署―の各長は〈署卿〉、六部―吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部―の各長は〈尚書〉と呼ばれている。尚書については、六人の他に尚書令という役職があり、合計七人となっていた。

出席者が全員揃っていることを確認すると、鉦山候は議事を進行し始めた。順に、各署卿、尚書から議題が提出されていく。鉦山候と共に、平原候ジョシュ・マーテチスも、港湾候ゴース・アップセン二世も、中心となって議題を裁いていた。

「各州から先月の生産高について報告が上がっております」

王国の産業を統括する司翠署卿が、資料を片手に発言した。

「まず、サリユル州の龍青玉ですが、採掘量が二六〇貫かん（約九八〇キロ）。国内加工用にサリユル州内で八六貫、マーテチス州へ一六二貫。原石の輸出のためにアップセン州へ二二貫です。続いて、マーテチス州の魔法細工ですが、生産量は金額にして……」

「そこまでよい」

太り肉のあごを揺らして、平原候ジョシュ・マーテチスが、面倒臭そうに言った。

「は？」

「三諸侯がこの場にいるのだ。皆、自州のことなど承知している」

「しかし、陛下に……」

「我らは陛下の後見ぞ。我らが知っていれば、陛下がご存じなのと

同じこと。無駄な時間を使うな」

司翠署卿はしばし呆氣に取られたような顔をしていたが、氣を取り直して口を開いた。

「しかし閣下、この王宮朝議では、三州間の取引価格や、全体の生産量の釣り合い等を検討しなければなりません。それを考慮した上で、場合によっては勅令を……」

「それは我々が日頃氣にかけている」平原侯の語氣が荒くなった。

「それとも卿は、我々が好き勝手をやって、私腹を肥やしているとでもいうのかね？」

「いえ……そのようなことは」

結局、司翠署卿は引き下がらざるを得なかった。それでも、司翠署卿は骨のある方だといえる。彼は、ことある毎に筋を通そうとしているからだ。ララサラ女王が即位して三ヶ月。三諸侯が女王の後見と称して王宮朝議に顔を出すようになって以降、殆どの署卿や尚書は、三諸侯の顔色を伺うことに終始するようになっていた。

そもそも、王宮朝議とは、日々王宮の官吏かんりから提出される議題を王が裁く場である。王族と宰相さいしやう、六署六部の各長以外には参加資格はない。つまり、本来は三諸侯に参加資格はないのである。

アップ・ファル・サル王国は、大きく〈王領おうりやう〉と〈候領こうりやう〉とに分けられる。王が直接統治するのが〈王領〉で、諸侯が統治するのが〈候領〉だ。〈王領〉は王都ファル・バラオのみ。州と呼ばれる〈候領〉は三つあり、それぞれが治める侯家の家名を冠している。アパ・カタラ連峰の麓、龍青玉を産する鉾山を有するサリユル州。タリル川流域に広がり、かつては農業が栄え、今や魔法細工の工房が軒を連ねるマーテス州。そして、アップ・タリル等の港町と、沖合いの島々をまとめるアップセン州。この三つの候家の当主が、総じて三諸侯と呼ばれ習わされていた。

候領は法も税も基本的には独立している。しかし、大綱は王宮が定めており、それを外れていないか、常に目も光らせている。さらに、王には国内最上位の裁判権が与えられており、各州が大綱から

外れるようなことをすれば、是正の勅令が下される。これを決めるのが王宮朝議である。つまり〈王宮朝議〉とは、アップ・ファル・サル王国の〈王権そのもの〉である、といえた。そこに三諸侯が関与するようになっては、バラオ王家の権力は有名無実となってしまう。それまで黙って聞いていたララサラが口を開いた。

「余はその報告を聞いてみたい」

司翠署卿の顔がぱっと明るくなった。しかし、平原侯が勢いよく立ち上がると、ララサラを睨み付けた。

「まだお勉強中の陛下におかれましては、報告を聞かれましても判断にお困りになるでしょう。私が後刻ご説明いたします故、ここは先へ進めては如何かと存じます」

ララサラが答えを思索しているうちに、今度は鉦山侯が口を開いた。

「では、話もまとまったようですので、次へと進みます」

ララサラはため息をつくと、諦めた。司翠署卿は悔しそうに下を向いている。

アップ・ファル・サル王国は小さな国で、王族の下にはたいした官僚組織がない。家族経営的に王が裁き、建国以来百二十年間、上手く国を経営してきた。宰相が空位のことが多く、パパマスカ王のときもそうだった。それは今でも変わらず、だから、三諸侯が朝議を仕切っていることに異を唱えることができる者がいない。

——よく、今までバラオ王家の統治が続いたものだ、とララサラは思った。王国の歴史には政変の類はまるっきり出てこない。王家は国民に慕われ、王国は穏やかな歴史を百二十年もの間刻んできた。一方で、他国からの侵攻を受けることもなかった。豊富な龍青玉と高度な魔法技術が、他国の目に魅力的に映らないはずがないにもかかわらずである。

この点については二つの定説があった。一つには、北のベスーニヤ帝国と南のアニシャ連邦の二大国が両睨みをしているため力が均衡している、という説。もう一つは、アップ・ファル・サル王国が強

力な守護魔法に守られているという伝説を、周辺の国々が信じているから、という説である。

ララサララはどちらの説も怪しいと思っていた。アニシャ連邦の歴史はアップ・ファル・サル王国よりも浅い。かつて、周辺地域の力が関係が異なる時期も長かったはずだ。そして、伝説の守護魔法については、王族たるララサララがその存在を知らない――。きっと、奇跡的な百二十年が続いたに違いないのだ。

これだけ平和な国では、王の仕事は多くない。祭りや行事はともかく、政治的な仕事は王宮朝議に集約されていたのだ。それすら、議題が少ないために、宰相が空位でもやってこれた。しかしそのことは、ここに来て三諸侯による王宮朝議乗っ取りを容易にしまった。もっと早くに、こういう事態になっていてもおかしくはなかった――

相変わらず朝議が続いている。そこにララサララの出番はない。

それは、即位してから三ヶ月間変わらない。

ララサララは、ここ三ヶ月ですっかり習い性ならしょうになってしまった、自己の思考への沈降を始めた。

ララサララ 3

遡ること三ヶ月と少し。アプ・ファル・サル王国暦一二一年。弥生月十五日。

その日も、ララサララは普段と同じく、朝から師の授業を受けていた。

師が教室として使用している部屋は、まるで書庫のような有様だった。正式な王宮書庫は別の場所にあるのだが、師の部屋も、そこに負けず劣らず本が溢れていた。

「本日は君主論を進めましょう」白髪白髭の師が言った。

「詩歌の続きがやりたい」

「またですか？ 姫様。それは昨日もやりましたでしょう」

「昨晚、新しい詩を考えたのだ。父王陛下の誕生日も近いことだしな」

「しかし姫様、誕生祝いの詩集ならば、もう出来上がってきましよう。今、リルが町の職人の所へ受け取りに行っているではないですか」

「あれとは別の歌を祝いの席で披露したい」

師は小さくため息をついた。

「では、少しだけですよ。それが終わったら、君主論に入ります」

「もちろんだ」ララサララは嬉しそうに頷くと、昨晚寝所でしたためた紙の束を卓上に広げた。

そして、案の定と言うべきか、君主論に入れないまま昼食をとり、午後になってしまった。

「姫様……そろそろ次に進みましょう」

「ん……、そうだな」

さすがにララサララもまずいと思ったのか、君主論に入ることを不請不請承知した。師は、開いていた本〈詩歌の技術〉を卓上に置いた。

そのときだった。

ばんっ！ と大きな音がして、乱暴に部屋の扉が開かれた。

ララサララと師は、はっとして部屋の入り口を見た。入ってきたのは若い兵士だった。その服装は、王宮を警護する騎士団のものではなく、州軍のものだ。それがどこの州軍のものか判断するより先に、ララサララの視線は兵士の右手に吸い寄せられた。そこには、鈍く輝く抜き身の刀が握られていた。

「姫様！ こちらへ」

普段の様子からは想像できない素早さで、師がララサララの手を引いた。入り口から死角になる書架の陰へと滑り込む。そして師は、小さく呪文を呟くと、手近な柱に手をついた。部屋の四隅には大理石の大きな柱が立っている。師が手をついた柱の滑らかな表面に、青白い光が四角い扉を描いた。その扉がゆっくりと開き始める。師は、扉が開ききらないうちに、ララサララをそこへと押し込んだ。

「師……」

「お静かに、姫様」

その言葉が終わらないうちに、師は扉を閉めた。静寂と暗闇がララサララを包む。微かに聞こえる音は、しかし、部屋の中の音なのかどうかはつきりしない。どこかに開けられているらしい換気孔から伝わってくる音のようだった。

——そして、ララサララは五日間そこに隠れ続けることになった。助け出されたときのことを、ララサララは覚えていない。聞いた話では、見つけたのはリルだったらしい。気が付いたときには、自分の寝台に横たわっていた。

数日後、自分の即位を、ララサララは寝台の上で他人事のように聞いた。ララサララにそれを伝えたのは、勅令の公布に責任を持つ尚書令だった。尚書令と共に、なぜか三諸侯が顔を揃えていた。

「私が……王？」

「はい。パパマスカ王陛下におかれましては、過日、退位をご発表なさいました。加えて、次期王には殿下をご指名になりました」

尚書令グラス・ホルシュは、片膝をつき、頭を下げたまま言った。ララサラは無感動に彼女を見つめた。言葉は聞こえている――でも、その意味が染み渡ってこない。

「父王はなぜ？」

「私には推察いたしかねます。ですが、勅命ですので」

「父王は今、居室におられるのか？」

「すでに、王妃殿下とお付きの者を従って、マーテチス州の離宮へとお発ちになりました」

「マーテチス……？」

「私めが陛下にご提供いたしました」

そこまで黙っていた平原候ジョシュ・マーテチスが言った。

「……なぜだ？」

なぜ父王は退位なされた？　なぜ王宮を出て行かれた？　なぜマ

ーテチス州なのだ？　なぜ？　なぜ？　なぜ――

「よしんば父王が退位なされたとして、次は兄上であろう」

「勅命です」と尚書令。

「なぜだ！」

一瞬の沈黙の後、今度は港灣候ゴース・アプセン二世が口を開いた。

「カカパラス王子殿下におかれましては、留学先のデル・マタル王国にて、鷹狩りの最中にはぐれ、行方知れずとの連絡がありましてございます」

「行方知れず？」

「はい」

「探したのか？　我が国からも人を……」ララサラは身を乗り出した。

「デル・マタル王宮が国をあげて探しております。それよりも今は国内のことです。すでにパパマスカ王陛下は王宮にいらっしゃいません。王子殿下につきましては、まだ亡くなられたと決まったわけではありませんが、見通しが立ちません。何より、勅令はすでに、

国民の知るところとなっております」

これは何の夢だろう、とララサララは思った。これならば、大理石の虚の中で、闇に包まれたままの方が良かったのではないか――

「殿下。戴冠式の日程もすでに決まっております」

今度は鉱山候が言った。すべて用意はできているから言うことを聞けと、そう言っているのがひしひしと伝わってくる。

ララサララは――考えることをやめた。

「わかった」

尚書令と三諸侯は、深く一礼すると部屋を出て行った。

あの暗闇の中で、王国の将来について話し合ってみたいと思った父王も母様も兄上もない。皆、生きているのかどうか――、師も同じだ。自分ひとりでは、もうどうしようもない。三諸侯が好きにやりたいのならそれもいいだろう。

部屋の窓からは、春の光が柔らかく入ってくる。その暖かさを感じながら、しかしララサララは、いっそこれが常闇だったなら、とそればかり考えていた。

ララサララ 4

「陛下、以上で今朝の議題は終了です。何かございますか？」

鉦山候が、異様に長い口髭をしごきながら、お座なりに訊いた。他の出席者達はすでに席を立ちそうな勢いだ。

三ヶ月前に比べると、ララサララの気力は随分と持ち直していた。三諸侯の横暴に、刃向かうまではできなくても、わずかなりとも抵抗を示してみたいと思うようになっていた。

「前王陛下と前王妃殿下は息災か？」

「我が州の離宮にて、静かにお過ごしでございます」

平原候が有無を言わせぬ口調で言う。会わせよ、と今まで何度も迫ったが、「前王陛下がお望みではありません」とはねつけられ続けている。

「兄上の消息はまだ掴めぬのか？」

「未だに」と、いかにも武人らしいがっしりした体格の港湾候が首を振った。

ララサララは嘆息した。形式上、王が解散を宣しなければ朝議を終えることはできない。このまま押し黙っているのか、とララサララは思った。

「陛下。評判の旅の歌い手が王都に滞在しております。御前に召されてはいかがでしょう」

不覚にも、ララサララは鉦山候のその言葉に反応してしまった。

「母と子のふたり連れです。アニシャ連邦を通ってきたとの噂を聞きました。カカパラス殿下のことも、何かお噂を聞きつけているかも知れません」

その親子がそんなことを知っているなら、召してみろ等とは言わないだろう、とララサララは思った。何も知らないことをすでに確認済みか、そうでなければ、カカパラス王子の噂など流れていないことに自信があるのだ――

それでも、巷で評判だという旅の歌い手親子の話には興味を引かれた。

「それは是非会ってみたい。以上だ」

鉦山候と平原候が揃ってにやりと笑ったのを、ララサララは見逃さなかった。

ララサララ 5

「陛下、何をご覧になっいらっしゃいますの？」

中庭で本を広げていたララサララに声をかけたのはズーニー・サリユルだった。彼女は鉾山候ヴァン・サリユルの孫娘だ。ララサララの話し相手に、と鉾山候が王宮に連れてきていた。彼女は特に王宮内での役目もなく、日々遊んで過ごしている。歳はララサララより二つ上。目が痛くなるような、鮮やかな黄色の原色で染められたドレスを着ていた。

「君主論だ」

「まあ、さすがですわね」

実を言えば、本を開いていただけでちっとも読み進めていないのだが、あえてそれを言うつもりはない。ララサララは本を閉じて卓上に置くと、呼び鈴を振った。

「はい」

控えていたお付き女官のリルが現れた。リルは、ララサララとズーニーがいる四阿の手前まで来ると、片膝について頭を下げた。

「茶を頼む。いつものふたりもおっつけくるのだろうか？」後半はズーニーに向けられた言葉だった。

「あら、噂をすれば。メリカとヒースが来たようですわ」

ズーニーは中庭の入り口に向かって手を振った。リルは心得た様子でその場を辞した。

メリカ・アプセンは港湾候ゴース・アプセン二世の姪。ヒース・マーテチスは平原候ジョシュ・マーテチスの六女だった。ふたりとも歳はズーニーと同じらしい。メリカはいつも豪華な扇子を手にしている。ヒースは、首が折れるのではと心配になるほど、たくさんの首飾りを下げていた。

ララサララはというと、髪を高く結い上げ、蒲公英色たんぽぽいろの軽そうなドレスを身につけていた。

「お待たせいたしました」

リルが茶と菓子を持ってくると、三人娘達の小鳥がさえずるようなおしゃべりが始まった。話し相手と言うが、ララサララはこの三人の相手が苦手だった。話題といえば、服、宝飾品、髪型のこと。もしくは、舞踏会で踊った男の話や、誰と誰の仲が怪しいだのという噂話。別に政治の話をしたわけではないが、書物や詩や歌の話がしたいと、ララサララはそう思っていた。

「評判の旅の歌い手が王都にいるそうですわね」そう言ったのはメリカだった。「なんでも、母と息子のふたり連れだそうですよ。母親の歌う〈麗しの王国〉は絶品だとか」

珍しく、ララサララは身を乗り出した。

「そなた、聴いたのか？」

「いいえ、陛下。場末の酒場で歌っているとのことですから、そんな場所にはさすがに……」

「良いことを思いました。陛下。王宮にお召しになってはいかがでしょうか？」とズーニー。

「私も噂は聞きました。へうそつき面〈や風の弦〉を使って、劇もやるようですよ」とヒース。

ララサララは元来、歌を歌うのも聴くのも好きだった。しかし、即位して以降、自分で歌うことはなくなった。歌えと言われても――おそらく歌えないだろう。ララサララは、自分の中のそういうところ――歌う心とでもいうもの――が、完全に挫けてしまっていることを感じていた。

それでも、ララサララの歌好きを知っている王宮の面々は、ことある毎に宮廷楽団に歌を披露させる。しかし、ララサララはそれには飽いていた。

旅の歌い手。きっと、ララサララの知らない歌を知っているだろう。絶品だという〈麗しの王国〉はどんなものだろうか。

「その親子連れの居場所はわかるのか？」

「お召しとあらば、すぐにでも見つかるでしょう」ズーニーが言う。

「わかった。明日にでも、この場に召してみよう」

三人の娘達が黄色い声を上げた。

ララサラは、本当に久しぶりに、自分もわくわくしていることに気が付いた。

ララサララ 6

ララサララの湯浴みの世話はリルひとりの役目だった。

かつて小さい頃、ララサララとリルは一緒に湯船に浸かったこともあった。しかし今、スカートの裾を絡げ、袖をまくったリルは、湯殿の隅に控えていた。

十人は同時に入れようかという広い湯殿の周囲には、季節の花々が飾られている。窓はないものの、〈遠見鏡^{とおみかがみ}〉という大きな魔法具が据え付けられ、王宮の物見塔からの眺めを映し出していた。しかし、朝のひとときと、湯浴みのひとときは、ララサララとリルがふたりきりになれる貴重な時間だ。のんびりと〈遠見鏡〉を眺めている場合ではなかった。

「父王と母様のこと、何かわかったか？」

誰もいないとわかっていても、ララサララは声を潜めて訊いた。女王専用のこの湯殿には、侵入防止の強固な魔法が巡らせてある。その強力さは王宮内でも屈指だ。

「平原侯が言うところの離宮の場所は、なんとか特定しました。しかし、おふたりのご様子まではまだ」

「そうか……」

バラオ王家は、王領でもないマーテチス州に離宮など持っていない。それは、王家の人間であるララサララが一番良く知っているし、かつて、諸侯達もそんなことは認めてこなかった。王に忠誠は誓うが州は諸侯のもの、というのが彼らの立場だったのだ。しかし、平原侯ジョシュ・マーテチスは、平然と「私めが陛下にご提供いたしました^{のたまわ}」と宣った。

「あのブタ候めが……」

「姫様。お言葉が下品です」

リルは、隣国デル・マタル王国の没落貴族、ブリスター子爵家の四女だ。権力闘争に敗れ、治める土地を失い、閑職に追いやられた

リルの父は、娘達を各国の王侯貴族に女官として仕えさせることにした。長女は隣国ガガーラ皇国のガガーラ城へ、次女は北の大国ベスーニャ帝国の皇宮へ、三女はシャル・バダ国の王宮へ、そして四女のリルはアップ・ファル・サル王国の王宮へ。十歳で王宮にやって来たリルは、持ち前の人懐っこさで、すぐに周囲に溶け込んだ。女官長にも可愛がられ、年齢が近かったことも手伝ってララサララ付きとなる。素性の確かさと、没落とはいえ貴族として育てられた教養、それらがものをいったのは言うまでもない。

「兄上の方はどうだ」

「デル・マタルの父からはまだ何も」

「続けて頼む」

「はい」

リルの父親は、意味もなく娘達を各国に送り込んだわけではない。彼は、娘達に王宮を中心とした人脈と情報網を作らせ、黙々と情報収集をしているようだった。もちろん、彼女らが王侯貴族の目にとまることも、期待しているに違いなかった。

ララサララが押し黙り、湯殿に重い空気が流れた。どこから落ちた水滴が、陶器の床に当たって甲高い音を響かせる。〈遠見鏡〉には、灯火が煌めく王都ファル・バラオが映し出されている。

「姫様、歌を歌いましょう」

突然、リルが明るい声で言う、立ち上がった。

「なに？」

「母なる海はいと深く」

リルが歌い始めたのは、アップ・ファル・サル王国を讃える〈麗しの王国〉だ。湯殿に巡らせた魔法は中の音を外に漏らさない。それを良いことに、リルは声を限りに張り上げた。

一番を歌い終えたとき、ララサララがリルを止めた。

「もう良い。下手くそが」

「酷いです姫様。子供の頃は上手い上手いと誉められたのですよ」

「子供が歌えば、誰でも誉める」

リルがぷーっと頬を膨らませ、それを見たララサララは吹き出してしまった。「なんて顔をしておるのだ」

「じゃあ、姫様が歌ってください」

「……」

一瞬の沈黙。そして、ララサララは湯船から立ち上がった。

「上がる」

「はい」

リルは素早く浴布でララサララの体を拭きにかかった。

「明日は、旅の歌い手をお召しになるのでしょうか？」とリル。

「ああ。楽しみだ」

ララサララの弾んだ声は、小さく湯殿に響いて、そして消えた。

出逢い 1

港町アップ・タリルから七日の行程で王都ファル・バラオに入ったルーリーとマーリーは、〈一番亭〉のマーサから紹介された宿屋に逗留していた。宿屋の向かいには小さな舞台のある酒場があり、ふたりはその舞台に立たせてもらって日銭を稼ぎつつ、王都の様子を見て回った。

滞在が四日目に入った日、王宮からの使者が現れた。

「女王陛下が、おふたりの歌をご所望です」使者はそう言うのと、ふたりの予定など聞せず、すぐに準備をするように申し渡した。

目を白黒させながら、それでもルーリーとマーリーは荷物を抱え、と、使者に連れられてアップ・ファル・サル王宮に向かったのだった。

ルーリーとマーリーが王宮の中庭に連れてこられたのは、ちょうど午後のお茶の時間だった。

小さいが手入れの行き届いた中庭には、夏の花々が咲き乱れ、青々とした芝生が敷き詰められている。芝生の隅には小さな四阿あすまやがあり、数人の女性がお茶を楽しんでいた。

「あら、来たみたいよ」四阿の中のひとりが、ふたりに気が付いて声を上げた。

四阿には、必要以上に着飾った十七、八歳の娘が三人と、褐色の髪を高く結い上げ、若葉色のドレスを着た十四、五歳の娘がひとり、卓を囲んでいた。

（あれが、ララサラ女王……）

片膝をつき、深く頭こうべを垂れつつ、マーリーは、ひとりつまらなそうな顔をしている褐色の髪の娘をララサラと判じた。王冠はつけていなかったが、貴族の娘とおぼしき他の三人とは、身にまとう気

品がどことなく違う。

「あなた達、今評判の歌い手でしよう。女王陛下が、是非聴いてみたいとおっしゃるのよ」先ほど、真っ先に声を上げた、真っ赤なドレスを着た娘が言った。

「〈麗しの王国〉が絶品と聞いたわ」何やらごてごてした扇子を持った娘が言う。

「へうそつき面〉を使った芝居もやるのでしょうか？」首が折れそうなほどたくさんの首飾りをつけた娘が続いた。

「お初にお目通りいたします、陛下。私はルーリー。こちらは息子のマーリーです」

三人娘の言葉を聞き流し、ルーリーはララサララにむけて深々と頭を下げた。

自分達の発言が無視されたことに娘達が一瞬鼻白^{はなしろ}んだが、ララサララが機先を制した。

「ララサララ・バラオだ。良く来てくれた。立ってくれ」
ふたりは顔を上げると、ゆっくり立ち上がった。そして、ルーリーは大きく息を吸い、歌い始めた。

――母なる海はいと深く 父なる山は遙かなり
愛しき風は清らかに 頼もしき日の輝ける
誇りは我ら胸に満ち 名は世界に響き行く
ああ、麗しの麗しの アプ・ファル・サル

姉なる川はいと速く 兄なる原は跳ね回り
優しき雨に包まれて 静かなる月に導かる
言葉は我ら胸に満ち 人は世界を渡り行く
ああ、麗しの麗しの アプ・ファル・サル

精霊の紡ぐ言の葉と 太古の龍のちから石
祖母の残せし綾模様 祖父の残せし金細工

魔力は我ら胸に満ち 法は世界を支え行く
ああ、麗しの麗しの アプ・ファル・サル

「素晴らしいわ！」

歌の余韻を楽しむ暇もなく、三人娘が手を叩いた。

「でも、歌詞を間違えていてよ」と赤ドレス。

「《兄なる原は豊かなり》が正しくてよ」と扇子。

「女王陛下、いかがですか？」と首飾り。

しかし、ララサラは真っ青な顔でルーリーを見つめていた。唇が微かに震えている。そして、「どこで、この歌を覚えた？」と絞り出すように訊いた。

「旅の途中で。歌詞を間違えていたようですが」

しれっと言うルーリーの後ろで、マリーは首を傾げた。アプ・ファル・サル王国に来て以来、ルーリーは何度も〈麗しの王国〉を歌ってきた――歌詞を間違えずに歌ってきたのだ。

ばんさん
「晚餐に招待しよう」突然、ララサラがそう言った。

三人娘が呆気にとられている中、ララサラは立ち上がると四阿から足を踏み出した。ルーリーとマリーは慌てて片膝をつく。

「余は、今気分が優れぬ。晚餐の席でもう一度聴かせて欲しい。そなたの歌も聴いてみたいしな」

マリーは思わずララサラの顔を見上げた。

ララサラは、ふんわりと微笑むと踵を返した。それは、十五歳の少女にしては老成し過ぎた微笑みだった。

出逢い 2

案内された控えの間で、マーリーはルーリーに歌詞のことを質した。しかし、ルーリーは人差し指を立てて唇に当てただけで、何も答えはしなかった。その話題には触れるな、ということらしい。

歌の一節を意図的に間違えたことで、ララサラは顔色を変えた。ルーリーに何らかの思惑があったとは思えない。しかし、それは何なのか――いくら考えても、マーリーには見当もつかなかった。

「失礼いたします」

丁寧な声がして、黒髪の女官が部屋に入ってきた。手にした盆には立派な茶器が乗せられている。彼女は慣れた手つきでお茶の準備をすると、ふたりに向かって「どうぞ」と言った。

「申し遅れました。私は、女王陛下付き女官の ril・ブリストアと申します。本日は、おふたりのお世話を申しつかっております。何なりとお申しつけください」

「お世話になります」とルーリーは頭を下げた。「もしかして、ブリストア子爵閣下なの？」

「はい。父をご存じでしたか。それはそうとルーリー様、早速で申し訳ありませんが、晚餐の席について、事前にご説明したいことがございます。一緒にいただけますか？」

「わかりました。マーリー、少し待っていてね」ルーリーはそう言い置き、rilと共に部屋を出て行った。

マーリーはひとり、控えの間に残された。そこは小さな部屋だったが、大きく取った西向きの窓から、アパ・カタラ連峰の峰々を見渡すことができた。峰の向こうに沈み行く太陽が、空を朱に染め、なんとも言えない美しい眺めだ。

ルーリーとrilはどこまで行ったのか、部屋の外に人の気配が感じられず、辺りはとても静かだった。

「僕の歌を聴いてみたいって、そう言ったよな」マーリーは口に出

して呟いてみた。

港町アップ・タリルで、王都ファル・バラオへの道程で、いたるところでララサラ女王の噂を耳にした。それらを心中で勝手に膨らませていたマリーーだったが、実際に目通りがなかった瞬間、その鮮烈な印象は、彼の想像を一瞬で吹き消してしまった。

艶やかに輝く褐色の髪。少し目尻が上がった気の強そうな目と、龍青玉のような藍色の瞳。白い肌、桜色の頬。少し大きめの口は、歌を歌ったらさぞ声を通るだろう。マリーーより頭一つ小さい体軀からは、女王の気品が溢れているように感じた。ごてごてと下品に着飾った娘達に囲まれていたために、余計にそんな印象を持ったのかもしれない。

マリーーは窓際に立ち、今にも夕日が沈もうとしている峰に目をやった。

自然と、歌が口をついて出た。

——新緑に映える銅の髪くし
陽光を映す藍の瞳どう

早春の原を吹き抜ける
若き清すがしきその息吹

パチパチパチ——と手を叩く音が背後から聞こえて、マリーーは振り返った。

「それは、私のことか？」

「は……」

そこに立っていたのは、ララサラ女王その人だった。

マリーーは慌てて片膝をつこうとしたが、足がもつれて盛大に転んだ。

ぷっと吹き出すのが聞こえた。続いて、笑い出すのを懸命に堪えている様子が伺えた。しかし、ついには、あはははと大きな笑い声が部屋に響き渡った。

笑っているのはもちろんララサラ女王で、マーリーは呆然とその様子を見つめた。さっきの老成した微笑みではない、十五歳の少女の笑いだった。

ひとしきり笑いの発作に身を委ねたララサラは、ようやく落ち着くと、目尻の涙を拭きながらマーリーに向き直った。

「すまん。笑い事ではないな」

「いや、その……。気になさらないでください」

「こんなに笑ったのは久しぶりだ」

マーリーがまだ怪訝そうな顔をしているのを見て、ララサラは手をひらひらと振った。

「さっきのは表向きの言葉遣いだ。自分のことを普段から〈余〉^よなどと言っていていられるか。慣れろ、とリルには言われるけどな」そして再び、ララサラは楽しそうに笑った。

いつの間にか完全に日は落ち、部屋の中も暗くなりつつあった。

ララサラは自然な仕草で、部屋の隅にある燭台の上に〈灯石〉^{あかりいし}を灯して回る。〈灯石〉は火を使わずに灯りをとる道具で、アップ・ファル・サル王国最大の輸出品だ。龍青玉を使った魔法具で最も普及しているものでもある。龍青玉の放つ青白い光が、部屋を明るく照らし出した。

「通りかかったら歌が聞こえた」

ララサラは、手近な椅子にすくとんと腰を下ろすと、リルが置いていった茶器に手を伸ばした。手つかずの茶碗の中身を近くの壺に空ける。そして〈常湯瓶〉^{とこゆびん}を手にとると、慣れた手つきで新たに茶を入れた。〈常湯瓶〉の中には、決して冷めない湯が満たされている。

「飲むか？」

「そんな。女王陛下にお茶を入れてもらうなんて」

慌てて卓に駆け寄り自分で入れようとするマーリーを、ララサラは睨み付けた。

「王だって茶ぐらい入れる。何だと思っているんだ」

そして、およそ女王らしくない仕草で、ぐいっと茶を飲み干した。
「さて、まだ答えを貰っていないが」

それは、私のことか？——という、最初の問いのことだろう。マ
ーリーは顔を赤らめつつ答えた。

「はい……。今、作りました」

「そうか。まあまあだな。でも、私なら、《陽光を映す》は《陽光
きらめく》とする。それから、三節目は《春の香^かまいて野を駆ける
》の方が良い」

自分を讃える歌だというのに、ララサラは臆面もなく言い、「
歌ってみよ」と続けた。

マーリーは歌詞を何度か口の中で転がすと、背筋を伸ばしてララ
サララに向いた。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳

春の香まいて野を駆ける

若き清しきその息吹

うん、とララサラは頷き、満足そうに拍手をした。

「躍動感が違うであろう」

もちろんマーリーもそれを認めたので、ララサラはしてやった
りと眼を輝かせた。それから、詞の違いによる解釈や、旋律等につ
いて楽しそうに語り始めた。だから、「是非陛下も歌ってみてくだ
さい」というマーリーの提案は、ごく自然なものだった。

しかし、途端にララサラの表情が強張った。「晚餐の席で三番
まで作って披露しろ。約束だ」そう言い放つと、立ち上がって踵を
返した。

マーリーは、突然のララサラの豹変に慌てた。

マーリーの慌て振りを見たララサラは、くるっと振り向くと、
小さな手を差し出した。

「楽しかった。また、晩餐の席で会おう」

マーリーが片膝をついてその手を受けようとすると、ララサララが窘めた。

「違う。約束の握手だ」

「……」

マーリーはあわてて服で手の汗を拭い、ぎごちなくララサララの手を握った。

きゅっと握り返されたその手は、小さく、華奢で、少し冷たかった。

出逢い 3

王宮の中を歩きながら、ララサラは知らず頬が緩むのを自覚した。さっきのマーリーの慌てぶりといったら――

中庭でルーリーの歌う〈麗しの王国〉を聴いたときは、本当に驚いた。その瞬間まで忘れていたが、あの替え歌を作ったのはララサラだった。だから、聴いた瞬間、槌で頭を殴られたような衝撃を受けた。替え歌は、兄上から教わったとしか考えられない――。なんとか親子を王宮に止めるべく、晚餐に招待すると言ってしまった――

今となって考えれば、歌について話を聞きたい、とでも言えばよかったかもしれない。でもまあ、たいした問題ではないだろう。

そして、さらに驚いたことに、ララサラの話聞いたリルが、ルーリーはブリストア子爵からの伝令ではないか、と言い出した。兄上に会っているなら、デル・マタルの王侯貴族に近づいたことがあるわけで、ブリストア子爵と会っている可能性もあると。なにより、リルは、子爵に兄上のことを問い合わせていたのだ。そろそろ伝令が来ても良い頃合いだったのだ。晚餐までの時間を使って、リルはそれをルーリーに確認すると言っていた。

ララサラは、じっと報告を待っていることができず、ルーリーとマーリーが案内された辺りの廊下をふらふらしていた。そこで、マーリーの歌が聴こえてきたのだった。

久しぶりに詩と歌の話ができて楽しかった。それに、マーリーが作ってくれたララサラの歌はとても嬉しかった。だから、三番まで作れ、などと我が儘を言ってしまった。しかし、彼はきつと作ってくるだろう。今頃、必死になって詩を考えているはずのマーリーを想像して、ララサラは微笑んだ。

「ご機嫌がよろしいようで、陛下」

突然声をかけられて、ララサラは飛び上がった。目の前にいた

のは、精霊大聖堂の大司教サン・パウバナだった。

「大司教……」

ララサラは、浮かれていた気持ちが急速に萎んでいくのを感じた。

「今晚の晩餐会には、歌い手の余興があるとか」

「余興ではない。余の客だ」

「そうですか。それでも、歌は歌ってくださいるのでしょう？」

「……まあな」

「そうですか。楽しみですなあ」

鈍色の法衣をまとった背の低い大司教は、ララサラとほとんど同じ高さの視線で笑った。聖職者特有の微笑み。しかし、ララサラは背中に冷たいものが走るのを感じた。

精霊大聖堂は、王国各地にある精霊聖堂の大本山だ。精霊は魔力の源とされ、魔法産業が盛んなアップ・ファル・サル王国では、誰もが精霊を崇め奉る。それは、生活に直結した信仰だ。王でさえも、精霊大聖堂で精霊の秘儀を受けなければ正式な王とは認められない。つまりは、精霊大聖堂の大司教は、アップ・ファル・サル王国のもう一つの権力の頂だった。

かつては、精霊大聖堂と王宮とは切り離されていたらしいのだが、ある時期から、王国内の魔法産業を統括する司青署卿の職を大司教が兼任するようになった。サン・パウバナも例外ではなく、王国内の魔法産業のすべてを握っていた。

「そういえば、お付きの女官はいかがなされました？」

「リルか？ 客人の世話をしている」

「そうですか……。それでは陛下、晩餐の席にて」

大司教は、なにやらひとりで頷くと、ゆったりとした足取りでその場を離れた。

ララサラは、精霊の秘儀を授けるとき、大司教の言葉を思い出した。

（姫様。あなたはバラオ王家の人間だから王になるのではありません。精霊の秘儀を受けたから王になるのです）

結局、大司教も三諸侯達と同じということだ。ララサラが王家の人間だから敬っているわけではなく、扱いやすそうな小娘だから王と認めた。今のことだって、わざわざ、勝手なことをするなと釘を刺しに来たのか――

ルーリーが伝令ならば、兄上の消息は今日にもわかるかもしれない。しかし、本来ならば、父王がしっかりと王権を握っていてくれさえすれば良かったのだ。突然王位を退いた理由が未だにわからない。リルの調べでは、マーテチス州の離宮は存在しているという。しかし、父王と母様が三諸侯に弑^{しい}されたのではないかという疑念は、未だ消えることがない。

「陛下、こんな所にいらっしゃったのですか」

廊下に立ちつくすララサラに、女官が駆け寄ってきた。どうやら、ララサラを探していたようだ。

「なんだ？」

「晚餐の準備がごいます。御髪を整えて着替^{おぐし}えていただかなくては」

「……ああ、そうだな」

ララサラは、女官に付いてとぼとぼ歩き始めた。

出逢い 4

控えの間を出たリルは、ルーリーを小さな倉庫のような部屋へ導いた。部屋の中に積み上げられた大小様々な箱には埃が厚く積もっていて、普段人が立ち入らないことを示していた。

「良くお気付きになりましたね」とルーリーが切り出した。

「最初に気付かれたのは陛下です。〈麗しの王国〉の兄の節を《跳ね回り》と歌うのは、女王陛下が兄君を揶揄した替え歌だそうです。ご家族しかご存じないこととか。ですから、カカパラス王子殿下のこと、何か知っているのではないかと」

晚餐に招いたのは、それを確認する時間を得るためだという。

「では、私が子爵閣下の伝令だということも？」

「いえ。そこまではお気付きではありませんでした」

リルとしても確信はなかった。しかし、予感があり、ブリストアーの名を出したのだった。

「子爵閣下からのお手紙です」

ルーリーは首飾りを胸元から引き出すと、その下げ飾りの中から、小さく畳んだ紙を取り出した。リルは、手にした〈灯石〉の下で手紙を開いた。

「カカパラス王子はご存命。三諸侯の背後には三国あり。黒幕の魔術師に注意……」

「昨年の穀物の統制価格が引き金になって、アニシャ東方三国では、アニシャ連邦からの脱退の気運が抑えようのないところまで高まっています」静かな声でルーリーが言った。「これまでは、他の連邦七ヶ国との軍事力の差が、三国に二の足を踏ませる原因になっていたようですが……、もう時間の問題でしょう」

「そこまで……」

リルは手紙を見つめながら唇をかんだ。しかし、そのことと手紙の内容とに、どんな関連があるというのだろうか。

リルの心は祖国デル・マタル王国へと飛び、ルーリーの想いもまた、かの国出発前夜へと引き戻された。

今を遡ること二十日。場所はデル・マタル王国の首都マテン。ブリスター子爵邸の一室。時は夜だった。

「ブリスター子爵閣下。大変ご無沙汰しております」ルーリーは深々と膝を折った。

「おお、懐かしいな〈金翠きんすいの歌姫〉。相も変わらず美しい」ブリスター子爵が大仰に言った。すでに六十に手が届こうかという歳のはずだが、髪も黒々として精力に溢れている。しかし、彼の顔に刻まれた深い皺は、長年の権力闘争に敗れた没落貴族の悲哀を感じさせるに充分だった。

「たしか子供がいたはずだな。もう、大きくなっただろう」

「はい。男の子がひとり。今年で十五になりました」

そうかそうか、と子爵は目を細めた。

「姫様方も、皆様美しくなれましたでしょう」

「どうかな。どうしても鼻屑目ひじきめに見てしまうからな。それに、皆しばらく会っておらぬ」

子爵の娘達は、各国の王宮へと散っている。

「それはともかく、まず君に紹介したい人がいる」

先ほどから、子爵の後ろでルーリーを眺めていた青年が、すいっと前に進み出た。

「カカパラス・バラオです。どうぞ、お見知り置きを」

「まあ……」

褐色の短髪、活力に溢れた藍色の瞳、大きな体、素早い身のこなし。アップ・ファル・サル王国の〈豪胆王子〉の噂ならルーリーも聞いたことがある。

「お初にお目にかかります。王子殿下」

「妹に王位を取られてしまいましたから。王子といえるのかな。は

「ははは」

アップ・ファル・サル王国の国王代替わりの噂は、ルーリーも耳にしていた。しかし、笑う彼の声に、鬱屈^{うっくつ}はまるつきり感じられない。妹のララサラが王位に就いたことに、本当に拘^{こたわ}っていないように見うけられた。

一通りの挨拶が済むと、ブリスター子爵がまず歌を所望した。いくつかの候補が挙がったが、カカパラスが是非聴きたいということで、最初にアップ・ファル・サル王国の民謡〈麗しの王国〉を歌うことになった。各国を渡り歩く歌い手ルーリーは、当然その歌も知っていた。

子爵と王子が長椅子に腰掛け、ルーリーは部屋の中央に立った。

――母なる海はいと深く 父なる山は遙かなり

愛しき風は清らかに 頼もしき日の輝ける

誇りは我ら胸に満ち 名は世界に響き行く

ああ、麗しの麗しの アップ・ファル・サル

姉なる川はいと速く 兄なる原は豊かなり

優しき雨に包まれて 静かなる月に導かる

言葉は我ら胸に満ち 人は世界を渡り行く

ああ、麗しの麗しの アップ・ファル・サル

精霊の紡ぐ言の葉と 太古の龍のちから石

祖母の残せし綾模様 祖父の残せし金細工

魔力は我ら胸に満ち 法は世界を支え行く

ああ、麗しの麗しの アップ・ファル・サル

夜の子爵邸に歌声が響き渡る。ルーリーは三番までを朗々（ろうろう）と歌い上げた。

「噂以上だ。お見事！」カカパラスは立ち上がると、渾身の拍手で

ルーリーを讃えた。「我が国でも、こんなに見事な〈麗しの王国〉は聴いたことがない」

「ララサララ殿下は歌がお上手だと伺いましたが」

「足下にも及びませんね。なにしろ私を^{やめ}揶揄して、《兄なる原は跳ね回り》なんて替え歌を作って喜んでいるくらいですから」

カカパラスは笑い、ルーリーも子爵も笑った。

続いて子爵が注文した曲が歌われ、しばし、部屋は音楽堂と化したのだった。

出逢い 5

「〈金翠の歌姫〉、君に頼みがある」と子爵が言った。

歌が終わり、三人は卓を囲んで果実酒の杯を傾けていた。

「私の手紙を携えて^{たずさ}アプ・ファル・サル王国へ行つて貰いたい。王宮で末娘のリルが女王付き女官をやっている。彼女に届けて欲しいのだ」

「承知いたしました」

理由も問わずルーリーは請け負った。旅の歌い手であるルーリーは、この手の伝令役を頼まれることが多かった。

しかし、子爵は不足だと思ったのか、さらに言葉を重ねた。

「手紙を届けるだけなら君ほどの人に頼むことではない。しかし、今はあの国も、そしてこの国も政情不安定だ。手紙を届け、かの王国の情勢を見極めてほしい。場合によってはリルに力を貸してやって欲しいのだ」

そして子爵は、三諸侯が我が物顔で仕切るアプ・ファル・サル王宮の現状を、ルーリーに説明した。それはリルからもたらされた情報だということだった。

「リル様のお立場は……」

「数少ない女王派だ。歳が近いせいもあるのかな。王宮内で孤立無援だが、女官という低い身分が幸いしている」

子爵の言葉を引き継ぐ形でカカパラスも口を開く。

「私からもお願いしたい。できれば、ララサラの力にもなってあげて欲しい」

それは、ルーリーには意外な言葉だった。仲の良い兄妹と言ってしまうばそれまでだが、王位の問題には本当にこだわっていないのだろうか。どこの国でも王位争いは激烈を極める。大概、親族兄弟間の争いとなるものだ。

ルーリーの考えを見透かしたように、カカパラスが笑いながら続

けた。

「私は、アップ・ファル・サル王国の王位に未練はありません。それよりも、この国に興味がある」

「？」

「はははは。いずれこのデル・マタル王国を我がものにして見せようということですよ」

ルーリーは驚いて目を見張り、思わず辺りを見回した。誰かに聞かれてもしたら大変なことになる。〈豪胆王子〉カカパラスとはよく言ったものだ。

ブリストアー子爵は満足そうに目を細めた。

「殿下は本気だよ。そのためには、ララサラ女王の治世が安泰なのが望ましい。しかし、そう上手くいきそうになくてな」

そして子爵は、アニシャ東方三国の不穏な動きについて話し始めた。

出逢い 6

小さな芽はいくつもあったのだろう。しかし、決定打になったのは、昨年の穀物の非常事態特別統制価格の制定と、連邦内での分配統制だった。

天候に恵まれて豊作だったデル・マタル王国、ガガーラ皇国、シヤル・バダ国のアニシャ東方三国と、日照りに加えて昆虫の大発生にやられた西の七ヶ国。連邦の中で穀物を分け合うのは当然としても、アニシャ連邦会議の席上で、七ヶ国が提案した非常事態特別統制価格はあまりに低いものだった。

元々国土が広く、大穀倉地帯として豊かな実りに恵まれている三国だが、西方の国々の圧倒的な武力の前に、連邦に組み入れられた経緯がある。その力関係は今でも続き、統制価格についても、力で押し切られた形になってしまっていた。

三国が連邦に加盟してから四十年あまり。七ヶ国に攻め入れられた記憶を持つ国民が少なくなり、若い世代の間で、連邦からの脱退の気運がここ数年くすぶっていた。それを今回の件が決定的にしたわけである。

統制価格の煽り^{あお}をもらに受けた農民と地方官僚はもちろんのこと、王侯貴族達の間でも、アニシャ連邦脱退・新連邦設立の気運はいや増していった。しかし、脱退への方策となると具体性を欠いた。特に、軍事力の差をどうするかという点について、なかなか妙案が出なかった。

そんな中、アップ・ファル・サル王国も新連邦に参加させれば良い、との声が上がった。アップ・ファル・サル王国の魔法技術が手に入れば、軍事力の差が補え、アニシャ連邦西の七ヶ国と対等に渡り合うことができるのではないかと。最初に誰が言い出したのか、今となってはわからない。しかし、考えれば考えるほど、それは名案に思われた。

はたして、アニシャ東方三国の国王連名で、アップ・ファル・サル王に密使が送られた。

しかし、時のアップ・ファル・サル王パパスカ・バラオは、その申し出を拒んだ。

元々勢いだけで、感情的に先走っていたアニシャ東方三国の企ては暗礁に乗り上げた。アップ・ファル・サル王国の魔法技術抜きにして、七ヶ国に脱退を突きつけることは到底無理だと誰もが思った。

しかし、またしても誰かが言った。デル・マタル王国に留学中のカカパラス王子が使えないかと。

彼が留学中に、アップ・ファル・サル王国の第八代パパスカ王が退き、誰かが勝手に王を名乗ったりすれば、王位継承権第一位の王子には、王位を奪還する権利が発生するのではないか。そして、アニシャ東方三国がカカパラス王子を支持すれば、彼の後見として、堂々と軍を率いてアップ・ファル・サル王国に入国することができるとではないか。カカパラス王子が王位を奪還し、新連邦に賛同すればそれで良し。王子の後見という大義名分さえ立てば、入国後に攻め落としてしまってもかまわない。アニシャ連邦西の七ヶ国は、アップ・ファル・サル王国の平定に反対したりはしないだろう。七ヶ国への脱退交渉は、アップ・ファル・サル王国を手中にした後始めればよいと。

新たな密使が、今度はアップ・ファル・サルの三諸侯の元へ飛んだ。バラオ王家が独立を堅持しようとしても、諸侯が同じ態度を取るとは限らない。三国は、考えられる限りの餌をかざして彼らの取り込みにかかった。ことが成った暁には、三国での公爵の地位まで約束したとの噂もあった。国が小さく、諸侯が三家しかなく、爵位も存在しないアップ・ファル・サル王国の彼らにとって、それは魅力的だったに違いない。

三諸侯はアニシャ東方三国の謀に荷担することを約束した。

その後、共闘した三諸侯はパパスカ王を退位に追い込み、無理矢理ララサラを第九代の王位に就けた――

出逢い 7

「パパマスカ王の御身柄は、どうなったのですか？」とルーリーが訊いた。

「常識的に考えれば、父王は生きてはいないでしょう」とカカパラスが答えた。だから、ララサララに王位を譲るという勅令は、三諸侯がでっち上げたものだろう、とのことだった。

「三国側としては、王の退位までは予定通りだった。しかし、新王がララサララ殿下だとは誰も思っていなかったのだ」子爵は苦笑した。

「結局、アップ・ファル・サル王国に大手を振って攻め込むことができないのは、地勢的な理由と、守護魔法の伝説のためなのだ。その魔法がバラオ王家秘伝だという話は、この国の人間は意外と信じている。もちろん、王侯貴族も例外ではない。だから、パパマスカ王を玉座から追い落とすというのは、守護魔法を封じ込めるという意味も含んでいたのだよ。三諸侯へはさんざんそのことを言い含めたようだったが、結果はあの通りだ。継承権の順位の問題で、カカパラス王子を祭り上げて乗り込むお膳立てはできたわけだが、王子を上手く駒として使えなかったときのことを考えると、片手落ちと言わざるを得ない」

結局、アップ・ファル・サルの三諸侯としても、唯々諾々（いいだくだく）と三国の話に乗ったわけではないと言うことだろうか。彼らにしてみれば、ララサララを王とすることで、三国に対して守護魔法という切り札を守ることができる。さらには、若い女王を思いのままに操り、王国を我がものとすることもできる。

黙って話を聞いていたカカパラス王子が、さも可笑しそうに笑った。

「加えて、すでに私は企みを知り、デル・マタル王宮から逃げてきてしまっている。私がいなければアップ・ファル・サル王国へ乗り込

む理由が立たない」

以前から、リルを経由して交流のあったブリスター子爵とカカパラス王子は、留学以来さらに親交を深めていた。

だから、アニシャ東方三国の思惑は、子爵を通じてカカパラスの知るところとなった。没落貴族のブリスター子爵にしてみれば、デル・マタル王国の現王家に義理も未練もなく、精力溢れる豪胆な若者に肩入れしたくなるのも無理からぬことであった。

カカパラスをへ王位を奪われた悲劇の王子へに祭り上げ、アップ・ファル・サル王国へ乗り込もうというアニシャ東方三国の思惑は、王子が逃げてしまった時点で失敗したと言えるだろう。

「正確には三国の意向と言えるかどうかも怪しいのだがな」と子爵。「どういことですか？」

「あまりにもアップ・ファル・サル王宮が指向されすぎているのだよ。考えてもみたまえ。無理矢理王を退位させたのなら、新王を立てる理由があるかね？ 国王の不在に付け込んで、攻め込んでしまえば良い。当初の筋書きはたしかに外聞が良い。三国の王達がそれにこだわった、との見方もできるが、しかし、国を攻めるということは綺麗事だけでは済まされない。王子殿下を人質としてパパマスカ王を脅すという手もあった」

子爵の言葉に、カカパラスが肩をすくめた。

「中途半端なのだよ。外聞良くアップ・ファル・サル王宮へと入る理由を探している……、と感じるのは私だけだろうか。国家が三つ集まって企てていると言うより、誰か個人の意志に誘導されている気がしてならないのだ。アップ・ファル・サル王国を引き入れろ、という世論についてもそうだ。三国の連邦からの脱退はダシにされたに過ぎない。……なら、その誰かの目的はなんだろうか？ アップ・ファル・サル王国と言ってまず思いつくのは……」

「魔法……ですか？」

ルーリーの言葉に子爵は頷いた。

「アップ・ファル・サル王国は魔法の代名詞といわれる国だ。となれ

ば、目的は王宮内にあるという巨大な龍青玉か、王家秘伝といわれる魔法技術というところだろう。そんなものを指向するのはまず……」

「魔術師……」

「……私はそう考えている。まあ、憶測の域は出ないがね」

「王家秘伝の魔法。巨大な龍青玉。それは存在するのですか？」ルーリーはカカパラスに問うた。

「さあ？」王子はその質問を軽く流す。答える気はないようだった。子爵が続ける。

「本当にあるかなど問題ではない。それを狙っている者が信じるかどうかなのだ。その者が、バラオ王家の人間さえ王宮から排除すれば、と考えているのなら、次の手は自ずと見えてくる」

「ララサラ女王の排除でしょうか？」

「おそらくな。三国側に今のところその動きはないが、仮に黒幕の魔術師が存在するなら、いつその動きがあるかわからない。だからルーリー、君にあの国に赴いてもらいたいのだ。〈金翠の一族〉に連なる君ならばうってつけだろう」

そして、子爵はこう言った。――自分が今夢見ているのは、アニシャ東方三国をカカパラスが新たな国として平定し、アップ・ファルサル王国を妹のララサラが統治することなのだ。兄妹が治める、若く鮮烈な国家の誕生に立ち会いたいのだと。

カカパラスは、子爵の言葉に微笑んでいるだけだった。しかし、否定しないところを見ると、本当にアニシャ東方三国を平定しようと思っているのかもしれないかった。

ルーリーはゆっくりと頷いた。

子爵は目に見えて肩から力を抜くと、「ありがとう」と言った。そして、小さく折りたたんだ手紙をルーリーに差し出した。

「以前お会いしたとき、リル様はまだ小さくていらっしやいました。私の歌を聴いて眠ってしまわれました」

そうだったかな、と子爵が笑った。

ええ、とルーリーは微笑み、場が和んだのを機に暇を告げたのだ。
った。

出逢い 8

「女王陛下のお命が最優先と、子爵閣下と王子殿下からのお言葉です」

〈灯石〉の青白い光の中で、リルの顔はさらに青くなっていた。

ララサラ女王が曲がりなりにも治世を保てるなら良し。しかし、それを排除しようという動きがあるならば、ララサラの命を最優先して欲しいと、子爵とカカパラスはルーリーに言った。

「あの、誰が姫様のお命を狙っているのでしょうか？」

リルは、ララサラを姫様と呼んだことに、まったく気が付いていないようだった。

「子爵閣下もそこまでは……」

「そうですか……」

結局、黒幕の魔術師の正体も、存在するのかさえもわからない現状では、ふたりには対策の立てようがなかった。リルは、ララサラ女王の周囲に充分気を配ると請け合った。

「前王陛下と王妃殿下の御身柄は……」

「ご存命です。マーテチス州の平原侯の離宮に幽閉されています。場所は特定しましたが、ご様子まではまだ」

「結局、三諸侯がパパマスカ王を幽閉して、偽りの勅令を出したということだったのですか？」

「ええ、そうだと思います。パパマスカ王陛下の退位にあわせて、近衛兵も、側近も、お付きの女官も、すべて姿を消しました。離宮で前王のお側にお仕えしている、というのが平原侯ジョシュ・マーテチス閣下の説明ですが、まだ確認は取れていません。……私はあの日、たまたま王宮の外に出ていましたし……」

「何があったのですか？」

リルは下を向き、唇をかみしめた。

出逢い 9

アップ・ファル・サル王国暦一二一年。弥生月十五日。

その日、リルは王都ファル・バラオの街へララサララの使いに出ていた。用件は一冊の美しい本を受け取ってくることに。それは、ララサララが作った詩と歌を職人に製本させたもので、もうじき四十三歳を迎えるパパマスクア王への、ララサララからの贈り物だった。誕生日の当日、祝いの席で驚かせるために、ララサララはわざわざリルを介して街の職人に頼んだのだった。

リルが王宮へ戻ると、出る前と様子が違った。王宮内はしんと静まりかえり、〈奥の宮〉の女官達は、全員食堂に集まってじっと肩を寄せ合っている。

「何かあったんですか？」リルは同僚に声をかけた。

「わからないんだけど……、王宮中の女官に、集まられて号令がなかったのよ」

リルは、受け取ってきた本をすぐにもララサララに届けたかったのだが、それはできそうになかった。

やがて、集まった女官達の前に、ひよろりと背の高い男が現れた。鉾山候ヴラン・サリユルだった。

「皆のもの、ご苦勞」と鉾山候は居丈高に言った。「今から三日間、皆に休暇を与える。以上だ」

有無を言わせぬ口調。本来ならば、女官を統べる礼部尚書から話があつてしかるべき内容だった。しかし、女官長を始めとする面々の顔を見ると、すでに決定事項なのだと知れた。

リルはララサララに一目会いたいと思った。しかし、その願いは叶えられず、たたき出されるように王宮を後にせざるを得なかった。デル・マタル王国から身一つでアップ・ファル・サル王宮へ来たりルは、休暇と言われても行くところがない。同僚の家に泊めてもらい、じりじりと三日間を過ごした。

そして四日後、リル達が王宮に出仕すると、驚くべき事実が告げられた。

パパマスカ王退位。

ララサラ女王即位。

リルはララサラを探した。しかし、〈奥の宮〉のどこへ行っても、彼女を見つけることができなかった。それどころか、パパムスカ王も王妃もお見かけしない。王達の側近も、お付きの女官達も見かけない。近衛兵も新顔に変わっていた。女官長から説明は何もなく、ララサラ付きのリルは途方に暮れた。

公には、パパマスカ王と王妃はマーテチス州の離宮へと隠居したことになる。しかし、不穏な噂も流れていた。あの日、リルが街へ出ていた時刻、王宮で何かがあった。その何かを知っている者は、全員いなくなってしまった。

しかし、ララサラ女王即位と言うからには、彼女は王宮のどこかにいるはずである。それを信じて、リルは目立たぬようにララサラを探し続けた。

探し始めて二日、廊下を歩いていたリルは、「姫様」という言葉を聞いた気がして立ち止まった。女官長の部屋の前だった。

「どうだ、姫様にそっくりだろう」

声の主は平原候ジョシュ・マーテチス、相手は女官長のようだった。

「ごまかせますかね。リルはしっかりしていますよ」

「なら、お付きの女官を替えればよい」

リルは口を押さえて、足音をたてないようにしながら、その場から全力で離れた。そして、目についた部屋に飛び込んだ。図らずもそこは、ララサラと教育係の老師が日頃の勉強に使っていた部屋だった。

早鐘のように鼓動が高鳴っている。目には、知らず涙が溢れた。

「姫様……」

平原候と女官長の会話——ララサラの偽者？——偽者を用意す

るということは、王女は——ララサラは弑されたのか——

噂は——本場で、王と王妃も三諸侯に弑されたのだろうか。王の退位も、ララサラ女王即位の勅令も、三諸侯がでっち上げたのか——

あの日、リルが出かけるときには、ララサラはこの部屋にいた。彼女はこの部屋で最後を迎えたのだろうか。

リルは涙に滲む目で、室内を見渡した。部屋中に書架を配した雑然とした部屋。中央の卓には、ララサラと老師が勉強に使っていた本が散乱していた。

リルは卓に近づいた。そして、散乱した本の中から、〈詩歌の技術〉と題されたものを手に取った。それは、ララサラが最も熱を入れて勉強していた本だった。

ララサラを想い、なにげなくページをめくるうちに、それは目に飛び込んできた。

血で書かれた小さな文字。

——開きませ

はつとリルの背筋に寒気が走った。

リルは慌ててそのページを破ると、改めて部屋を見渡した。大理石の大きな柱が部屋の四隅に立っている。ララサラが襲われたとき老師が一緒だったのなら、老師はどうするだろうか。どこかにララサラを匿^{かくま}おうとするのではないだろうか。人ひとりを隠そうとしたら、書架がこれだけ詰め込まれた部屋では、場所はいくつも考えられない。

リルはもどかしい思いで、破ったページに書かれた血文字を柱にかざして回った。

術者の血文字は詠唱と同じ。魔法の基本だ。この血文字で開く扉が、老師が仕掛けた魔法が、どこかにあるのではないか。この血文字は、老師が戻れなかったときの保険のようなものではないのか——

それは、三本目の柱だった。

かざした血文字が微かに光った。同時に、大理石の柱も青白く燐光を放つ。龍青玉の魔力が発動した証拠だ。

燐光は、一抱えもある柱に、扉のような青白い長方形を描いた。

それは本当に扉となって、大理石の柱がゆっくりと開いていく。扉が開いた大理石の柱の中には、真っ暗な空洞が作られていた。

そして——ゆっくりと、そこに隠されていたものが倒れ出てきた。

「姫様！」

リルが慌てて受け止めたその体は、憔悴しきっていたが、しかし生きていた。

隠されていたのは、ララサララ・バラオその人だった。

出逢い 10

「私は、何も知らないふりをして医師に姫様を渡しました。たまたま入られた扉の中で、急病になられたらしい、という話で通しました。その話を、三諸侯や女官長が気付く前に、王宮内に広めました。即位前の急病で王宮内は大騒ぎになり、まだ準備ができていなかった偽者は使えず、結局三諸侯は、本物の姫様を王位に就けざるを得なくなりました」

ルーリーは絶句した。

「三諸侯は、守護魔法を残すとか、三国に対する牽制とか、そういうつもりで姫様を王位に就けたわけではありません。元々偽者を仕立てるつもりだったんです。前王陛下と同じく、幽閉するつもりだったのでしよう。でも、彼らの失敗は、姫様を幽閉することができずに見失ったことにあります。結局見つけられずに、それでも予定通り偽者を使ってことを進めようとした。そこに、本物が出てきてしまった……」

「良く、ララサラ女王陛下はご無事でしたね」

「発見された後ですか？」

「ええ」

「療養中は、〈奥の宮〉は医師と女官以外は立ち入り禁止でした。警護も、次期女王ということで厳重でした。三諸侯が自分達で発表したことが、逆に姫様を守ることになりました。結局あの人達は、姫様ひとりなら後からなんとでもなると思い直したのでしょうか」

「嘘から出た誠だったのですね……」

ゴーン、ゴーン。

時を告げる時塔ときとうの鐘の音が王宮内に響き渡った。晚餐の時間が近づいていた。

「ありがとうございます、ルーリー様。王子殿下のこと、姫様が喜びます」

リルが手紙を懷にしまいながら言った。

「父には、また別に使者を立てます」

「そう。大変だと思うけれど、女王陛下をお守りして
「はい」

「さあ、急がなくては」

ふたりは急いで部屋を後にした。

晩餐会 1

女王の私的な晩餐会と聞いていたが、マーリーの目には充分豪華なものと映った。

晩餐会が開かれる広間の正面には、前パパスカ王の大きな肖像画があり、周囲には歴代王達それぞれの肖像画が飾られている。繊細な飾りが施された燭台しよくだいが広間の壁に並び、蝋燭ろうそくの炎が明々と灯っている。高い天井から下がるシャンデリアにも無数の蝋燭の炎が揺らめき、広間中央の食卓も、並べられた椅子も、卓上の食器も、それらの光を浴びてキラキラと輝いている。大きく取られた窓の外には露台ろだいがしつらえてあり、そのむこうには、夜の王都ファル・バラオの灯火が煌めいていた。

ルーリーとマーリーは、晩餐会の余興としてのみ招かれたのではなく、女王の正式な招待客だった。そのためふたりは、リルから晩餐会用の衣装を貸し与えられた。ルーリーは、翡翠色の生地に金糸で刺繍を施したドレス。マーリーは、絹のシャツと、紺地に金糸で縁取りをした上着、膝丈ズボン。髪の毛も女官が綺麗に整えてくれた。ルーリーは何食わぬ顔で大きな食卓の末席に座しているが、マーリーは落ち着かないことこの上なかった。

上座にララサラが座り、その周りを、鉦山候、平原候、港湾候の三諸侯が固めている。続いて、司青署卿を兼ねるといふ、ファル・バラオ精霊大聖堂の大司教。着飾って居並ぶ婦人達の中には、昼間女王とお茶を共にしていた女性達も見受けられた。

晩餐会の開催に先立ってララサラが発言した。昼とは違う形に髪を結い上げ、王冠をつけている。衣装は、晩餐会用の赤地に金の刺繍ししゅうを施した豪華なドレスだ。

「本日は、余の客人を招いておる。ルーリーとマーリーだ」

「ララサラ女王陛下、お招き恐悦至極に存じます」

ルーリーとマーリーは深く礼をした。

「これは……、馬子にも衣装とはこのことですか。ははははは」
平原候ジョシュ・マーテチスが、好色そうな声で言う。

「親子共々ですか？ お盛んですなあ平原候」と鉦山候ヴラン・サリユル。

「おふたりとも、陛下の御前ごぜんでそのような」と一応たしな窘めたのが、一番若い港湾候ゴース・アップセン二世だった。

ルーリーは顔色一つ変えなかったが、マーリーは怖気が走り、思わず身を震わせた。

「後刻、歌を披露してくれるとか。楽しみにしておりますぞ」

そう言ったのは、大司教サン・パウバナだ。華美に着飾った他の出席者と違って、質素な大司教の法衣を身につけている。聖職者特有の微笑みをたたえた、痩せぎすの背の低い老人だった。

頃合いを見てララサララが給仕長に合図をし、晚餐会が始まった。出席者達は、女王が招待したふたりの珍客に興味を示し、あれやこれやと声をかけてくる。ルーリーは、それら客人達の不躰ぶしつけな質問にもそつなく答え、場を繋いでいた。

マーリーはといえば、緊張のためか、どんなに見事な料理を食べてもさっぱり味がわからない。加えて、場違いな感じが否めず、いたたまれなかった。

周囲を見渡してみると、着飾った出席者達は、柔和な笑みを湛えて会話を楽しんでいる。しかし、マーリーには誰もが同じ人間に見える始めていた。そんな中で、ララサララだけは目を引いた。

フォークで肉を切るララサララ。

スプーンを口に運ぶララサララ。

硝子がらす製の杯を傾けるララサララ。

出席者達と話をするララサララ。

少し前に控えの間で、笑いながら話していた彼女のことを思い出し、今の女王然とした姿との差にマーリーは目を見張った。中庭で会ったときには、じつくりと観察する余裕がなかった。これが、女王という仕事をこなす、公のララサララの顔なのか。

（約束の握手だ）

彼女の小さかった手の感触を思い出す。ララサラは、〈女王〉という仕事を必死にこなしているように見えた。老成した柔和な微笑みの下に、十五歳の少女は、どれほどのものを押し込めているのだろうか。さっきのように、笑って歌のことを話せる相手はいるのだろうか。

マーリーは思う。約束した歌をこの場で見事に披露したら、きっとララサラは喜んでくれるに違いない。思い上がりかもしれないけれど、彼女もそれを楽しみにしているはずだから。

マーリーは、こんなにも誰かのために歌いたいと思ったのは初めてだった。

「少年」

気が付くと、食卓の向こうから大司教が話しかけてきていた。

「は、はい」

「〈金翠の一族〉^{きんすい}というのを知っているかね？」

「きんすい……」

「かつて繁栄を極めた魔術師の一族だ。君達親子のように、金色の髪と翡翠色の瞳をしていたという」

マーリーは聞いたことがなかった。

「そうか。私も最後に噂を聞いたのは二十年ほど前のことだ。西に、〈金翠の歌姫〉という稀代^{きだい}の魔術師がいるという噂だ」

マーリーは何となくルーリーを見た。ルーリーは、ふたりの会話に気が付いていないのか、婦人達との会話を続けている。マーリーは大司教に向き直った。

「でも、魔術師って今でもいるんですか？」

「はははは。現代の若者らしい答えだな。もちろん、龍青玉を操る魔法細工の設計は魔術師の仕事だ。精霊大聖堂の司教などをやっている儂も、当然魔術師だ」

魔法具を使わず、精霊との契約により無から魔力を引き出す魔術師。龍青玉による魔法が発達して以降、精霊と契約をせず、魔法具

や龍青玉のみを使用する使い手を〈魔法使い〉、精霊と契約した使い手を〈魔術師〉、と呼び習わすようになった。

マーリーは、魔術師に会ったことはなかった。魔法といえば、龍青玉の魔力を使うのが当たり前だと思っていた。

「なに、そなた達を見ていたら、そんな昔の噂を思い出した。それだけじゃ」

大司教は、かかかと笑ったが、マーリーには、その目は笑っていないように見えた。

晩餐会 2

食事が終わると、菓子と茶が用意された。

ルーリーとマーリーは、広間の一角に用意された舞台上上がった。期待感よりも、多分に好奇が勝った拍手が起こり、ふたりは頭を下げた。

この国に来てから何度も繰り返したように、まずルーリーが〈麗しの王国〉を歌った。その後、宮廷楽団が現れ、出席者らの求めに応じて宮廷歌謡がいくつも歌われた。楽団の伴奏に合わせてルーリーと合唱しながら、マーリーは、ララサラとの約束を果たす機会が巡ってくるのかと気が気ではなかった。

宮廷歌謡が一段落したところで、大司教が劇を見せてくれと言い出した。それを聞いた三諸侯達は、顔を見合わせると、口々に言った。

「パウバナ大司教、彼らはへうそつき面〈〉を使います」と港湾候。

「この広間は、魔法具が使用不能にしてあるではありませんか」と

鉦山候。

「劇をご所望なら、明日にでもご自宅に召せばよろしい」と平原候。しかし、大司教はいかにも残念そうな顔をした。

「明日より、しばらく王都を留守にするでな。女王陛下いかがですか？ ほんの一時、〈魔法封じ〉を解いて、この者達の劇を見ようではありませんか」

ララサラはしばし逡巡した。

ルーリーの歌にすっかり魅了されていた晩餐会の面々は、大司教の提案に驚きつつも、期待を込めて女王を見つめている。

「……わかった」

「陛下！ それはいけません」ルーリーが鋭い声を発した。

「貴様、陛下に対して無礼であろう」平原候がルーリーを睨み付け、「歌い手風情が」と吐き捨てた。

ルーリーは、今にもかみつきそうな目で平原候を睨んだ。それから、大司教に目を移すと、「今へうそつき面」は持っています」と言った。

「大丈夫じゃ」

大司教は近くの女官に耳打ちをした。女官はいったん広間を出ると、すぐに盆を手に戻ってきた。銀製のその盆の上には、へうそつき面が並べられていた。

「王宮に伝わるへうそつき面」じゃ。これを使えばよい」

普段ルーリーとマーリーが使っている木製の面と違って、それは金と銀と宝石でできている。そんなものは使えないとはさすがに言えず、ルーリーは唇をかんだ。

ルーリーの無言を大司教は肯定と受け取った。

「では陛下、よろしいですか？」

「うむ」

おもむろに席を立ったララサラは、大司教と共に、パパマスカ王の肖像画の前に立った。右手を肖像画にかざすと口を開く。

「第九代アプ・ファル・サル王ララサラ・バラオ。我が名において願^{たてまつ}い奉らん。広間に巡らしたる、代々の王の御力^{おちから}と、精霊の力をしばし眠らせん」

ララサラの王冠の中央にはめ込まれた、一際大きな龍青玉が青白い燐光を発した。

「司青署卿サン・パウバナ。陛下のお言葉と並び願^{たてまつ}い奉らん」

大司教の右手の指輪にはめ込まれた龍青玉も、やはり光を宿す。同時に、広間に飾られた八枚の王の肖像画が青白い燐光を発した。肖像画に埋め込まれた龍青玉を使って、広間内の魔力を相殺する魔法、〈魔法封じ〉がかけられていたのだ。

照明に蝋燭を使っていたのは〈灯石〉が使えなかったからなのか、とマーリーが感心しているうちに、肖像画の光は徐々に弱くなり、やがて消えた。

「さあ、これで良いであろう」とララサラが言うと、大司教は満

足そうに頷いた。

「陛下……」

ルーリーの顔は泣きそうだった。近くの女官に声をかけ、リルを呼んでくれるようにと言う。女王の近くに控えていたリルが呼ばれ、ふたりはふたことみこと言葉を交わした。リルは頷くと、持ち場に戻っていった。

何がどうしたのか、ルーリーは壇上に戻ると、悲愴な顔でマーリーに耳打ちをした。

「マーリー。何かあったら、女王陛下をお守りしなさい」
「？」

そして素早く自分の首飾りをマーリーにかけると、演目を決めた。ふたりは、女官から豪奢な（ごうしゃ）へうそつき面を受け取り、観客に向いた。演目を告げるのはマーリーの役目だ。

「それでは皆様、これより、北はベスーニヤ帝国の、双子の王子の物語をお目にかけます」

晩餐会 3

晩餐会が始まって、リルは上の空だった。始まる前にルーリーから聞いた話が、頭の中をぐるぐると巡っていたためだ。しかし、ルーリーとマーリーが客として参加しているとはいえ、その他の顔ぶれは代わり映えのない晩餐会だ。少しくらい気がそぞろでも、リルは不足なく仕事をこなした。

リルは、父ブリスター子爵とカカパラス王子が、ルーリーに伝えた話を咀嚼そしゃくしていた。自分の知っていることと組み合わせ、できるだけ正確な情報をララサララに伝えたい。

リルは、できるだけ簡潔に状況を整理してみようと試みた。

《黒幕の魔術師は、アップ・ファル・サル王国の〈何か〉が欲しい。

しかし魔術師は王国の伝説の守護魔法が怖いので、アニシャ東方三国を出しにして、王国へと近づこうと考えた。

しかし、三国の正面切つての王国への交渉は失敗した。そこで魔術師は、搦め手としてカカパラス王子を使うことを思いつき、またも三国をその計画に上手く乗せた。三国は、今度はアップ・ファル・サルの三諸侯に接触し、謀に引き入れることに成功した。

三諸侯はパパマスカ王を退位させて、ララサララを即位させた。ララサララの即位は王の勅命とされたが、それは三諸侯のでっちあげだった。その結果、王位継承権を飛ばして王になったララサララに対して、王子が異議を申し立てる建前ができた。

しかるに三国は、王子の後見として王国に侵攻する建前を得た。しかるに魔術師は、三国に乗じて王国の〈何か〉に近づく機会を得た。

しかし、現在王子は三国の手から離れてしまったので、魔術師が次の手を考えている――》

こう考えてみると、女王はララサララ本人である必要はあまりない。隠れてしまったララサララを見つけられなかった三諸侯が、偽

者を立てようとしたのもわからなくはない。

しかし、話の最初と最後にだけを顔を出す魔術師が、取って付けたような感が否めない——考えてみれば、魔術師の存在は、状況証拠からブリストアー子爵が推測したものだ。単なる杞憂^{きゆう}、もしくは勘違いの可能性もある。とすると——

《三国は王国へと近づこうと考えた。王国への交渉は失敗したので、搦め手として王子を使うことを思いついた。三国は三諸侯に接触し、引き入れることに成功した。

三諸侯は王を退位させて、ララサララを即位させた。ララサララの即位は王の勅命とされたが、それは三諸侯のでっちあげだった。その結果、王位継承権を飛ばして王になったララサララに対して、王子が異議を申し立てる建前ができた。

しかるに三国は、王子の後見として王国に侵攻する建前を得た——

ここの本筋は変わらず、随分とすっきりとする。いっそのこと三国も外してしまおうか——リルの思考は、わずかに暴走した。

《三諸侯は王を退位させて、ララサララを即位させた。

ララサララの即位は王の勅命とされたが、それは三諸侯のでっちあげだった。

その結果、王位継承権を飛ばして王になったララサララに対して、王子が異議を申し立てる建前ができた——》

ほら、わかりやすい——と、リルは内心ほくそ笑んだ。

リルの眼前では、華やかな晩餐会が続けられている。ルーリーとマーリーを客として迎え、ララサララも普段より楽しそうにしている。

そんなララサララの顔に釣られたわけではないが、リルはくすつと笑ってしまった。今の自分の考えが成立したら、黒幕は王子殿下ということになってしまう——

「……」

リルは、自分の顔が一瞬にして引きつったのを自覚した。

待て——待て。仮に——仮にカカパラス王子殿下が黒幕として糸を引いていたと仮定すると、どうなる？

《王子の指示で三諸侯は王を退位させて、ララサラを即位させた。ララサラの即位は王の勅命とされたが、それは三諸侯のでっちあげだった。

その結果、王位継承権を飛ばして王になったララサラに対して、王子が異議を申し立てる建前ができた——》

しかし、なぜララサラを王にしたのか、その理由が依然わからない。三諸侯はララサラを見失った後、わざわざ偽者を用意している。本人である必要はなくても、ララサラという女王を誕生させた理由があったのだろうか？ 人にこだわらないというのなら、重要なのは《女王》という点だろうか。ララサラである必要がなくても、ララサラならば国民も納得しやすいということか。

加えて、リルに宛て送ってきた手紙の内容にも疑問が生じる。リルを騙^{だま}しても、ブリスター子爵とカカパラス王子に益があるとは思えない。ならば、リルではなく、ララサラを騙したかったのだろうか——いや、それもしっくりこない。リルにしろ、ララサラにしろ、黒幕が《魔術師》だろうと《三国》だろうと、あげく《王子》だろうと、心情的にはともかくとして、現状が変わるわけではない。それなのに、わざわざルーリーを使者に仕立ててきた——

リルはルーリーの正体には心当たりがあった。子供の頃、ブリスター子爵が良く話してくれた、稀代の魔術師。美しき《金翠の歌姫》。

——魔術師？

リルは胸がざわめいた。

王子が魔術師を送り込んできた——この構図はなんだろう？

魔術師が狙っているからという理由で、魔術師のルーリーが送り込まれてきた——携えてきた手紙も、そして語られた物語も、すべてルーリーに向けられたものだったとしたら——

アプ・ファル・サル王宮の状況を知らないルーリーは、ブリス

「子爵の話信じてしまった。王子殿下の目的は、魔術師ルーリーをアップ・ファル・サル王宮へと誘うことただ一点――。ここまで来れば、何も知らずに送り込まれたルーリーを、三諸侯辺りが黒幕に仕立てるのは容易い。とすれば――黒幕は王子殿下という線で決まりだ。子爵も共犯なのは間違いない。」

「陛下！ それはいけません」

ルーリーの鋭い叫び声に、リルは我に返った。

大司教がルーリー達に、〈うそつき面〉を使用した劇を望み、広間の〈魔法封じ〉を解除しようとしているところだった。

――やはり、そういうことなのだ。王子殿下と三諸侯、そして大司教までもが共犯のようだ。そして、総出でルーリーを嵌めようとしている。ララサララではなく、ルーリーを。

呆然としているリルに、女官が声をかけた。ルーリーが呼んでいるという。

ルーリーは泣きそうな顔で、リルに耳打ちをした。

「どうやら私は嵌められたようです」

「やはり……。殿下と父が？」

ルーリーは悄然と頷く。彼女もまた、リルと同じ結論に思い至ったようだった。

「理由はわかりません。しかし、私を捕らえたいようです。私のことは自分でなんとかします。女王陛下を」

リルは無言で頷くと、ルーリーの元を離れた。

若き女王の手助けをするつもりでこの国へと来たルーリー。彼女を捕らえようとするならば、ララサララは格好の人質だ。そのためなら、三諸侯や大司教は、ララサララに怪我の一つも負わせるかもしれない。最終的には、それをルーリーのせいにしてしまえばよいのだから。

リルは拳を握りしめると、ララサララの元へ急いだ。

晩餐会 4

それは、マーリーが高々と演目を告げ、仮面をつけた瞬間だった。突然広間の中を突風が巻き、蠟燭の火がすべて消えた。

一瞬の静寂の後、婦人達が騒ぎ始めた。

「灯りを持ってこい」と誰かが叫び、どやどやと広間の外が騒がしくなる。

「姫様」

「リルか」

「お借りいたしますね」

「なに？」

リルは、微かな星明かりの中でララサララの頭に手を伸ばすと、王冠を取り自分の頭に乗せた。

「卓の下へ隠れてください」

そして、有無を言わずにララサラを食卓の下に押し込んだ。

「灯りはまだか！」

王冠を乗せたリルが叫んだ。それはララサララの話し方にそっくりだった。

ひゅっ、と風切り音がして、食卓下のララサララの頬に暖かい水滴が飛んだ。どさっ、と人が倒れるような嫌な音がする。ララサララが指で頬を拭うと、水滴は微かに滑ぬめった。

ようやく〈灯石〉が灯り、広間内が青白く照らし出された。何が何やらわからず食卓の下から這い出したララサララは、そこに信じられないものを見た。——リルが左脇腹に傷を負い、血の海に沈んでいた。

「リル！」

三諸侯が異変に気付き、ララサララとリルに駆け寄る。

舞台の前では、大司教がルーリーを睨み付けていた。

「やはり〈金翠の歌姫〉か！ 女王陛下を手につけ、王宮の龍青玉

を手に入れるのが目的か！」

「よくもそんなことを！　すべてはあなた方の謀でしょう」

「ぬけぬけと。儂はたしかに見た。〈魔法封じ〉が解けたのを良いことに、陛下に向けて魔法の矢を放ったのをな」

そして大司教は、広間中に響く大音声で叫んだ。

「この者は陛下を襲った賊じゃ！　捕らえよ！」

その声に、ララサラとリルを囲んでいた三諸侯が散った。

「姫様……」血まみれのリルがララサラを呼ぶ。

「リル、今手当をする」

「いえ、聞いてください。王子殿下はご存命です。そして、謀たのはおそらく、私の父と王子殿下……。ご即位のことも、今回のことも……。今はお逃げください……」

「私に、またひとりだけ助かれと言うのか？　また、師のときと同じ想いをしろというのか？」

リルは答えず、小さく折りたたんだ紙をララサラの手に握らせた。

「陛下、大丈夫ですか」

近づいてきたのは女官長だった。

ララサラは反射的に後ずさった。

「おや、どうなされました」女官長は無表情に言った。

「なぜだ……、女官長」

「さて？　その娘はデル・マタル王国の間諜です。しかも、あれなる魔術師の手先。その娘の妄言を信じてはなりません。さあ、お退きください陛下。怪我をなされますよ」

女官長の手には、小さな〈魔法弩〉が握られていた。

〈魔法弩〉は龍青玉の魔力を矢と変える魔法武器だ。〈弩〉は、横にした弓に弦を張り、矢を置いて、引き金を引くことで発射する武器だ。矢をつがえるのに時間がかかることが難点の武器だが、〈魔法弩〉は、魔力が切れるまで打ち続けることができる。

女官長は、あくまでもリルを狙っているという口ぶりだった。し

かし、その手の〈魔法弩〉はララサララに向けられている。おそらく、一発目も女官長が撃ったのだろう。リルが身代わりになっ
ていなかったら、間違いなくララサララが打ち抜かれていた。

女官長が無言で引き金に指をかけた。

ララサララは思わず目をつぶった。

晩餐会 5

灯りが消えた瞬間、マーリーはルーリーに舞台の外に突き飛ばされた。

舞台の下で多々良を踏み、ようやく体勢を立て直したところで、声がした。

「灯りはまだか！」

「？」

それはララサララの声に似ていたが、違和感があった。声は、食卓の上座、ララサララが座っていた辺りから聞こえた。暗闇の中、マーリーが声のした方向に目を凝らしたのと、青白い光の矢が声の主を貫いたのが同時だった。

「！」

ララサララが撃たれたと思い、マーリーは駆けだした。舞台は、広間の廊下側の壁面、つまり、壁を背にして、窓を正面に見る位置に設えられていた。舞台から見るとララサララ的位置は右手。しかし今、マーリーは舞台前左隅にいて、ララサララからは距離があった。わずかな星明かりの中、右往左往する人々にぶつかりながら、マーリーは大きな食卓を回り込んでララサララを目指した。

そして、明かりが灯る。

背後の舞台上では、ルーリーが大司教に詰問されていた。

食卓の陰で、リルという黒髪の女官が怪我をして倒れており、傍らにララサララが座り込んでいた。声の主はこの女官だったようだ。マーリーがほっとしたのもつかの間、年配の女官が何やらララサララに声をかけ、弓矢のような武器に指をかけた。

（何かあったら、女王陛下をお守りしなさい）

マーリーは、無我夢中で年配の女官の体を突き飛ばした。魔法の矢は間一髪狙いが逸れ、ララサララの頭を掠めて、背後の窓を碎いた。

「陛下に何をするんだ！」

マーリーはララサラと年配の女官の間に割り込むと、背中で彼女をかばった。

年配の女官が体勢を立て直し、再び矢を撃とうとした刹那、舞台の上で突風が弾けた。ルーリーを囲んでいた三諸侯と騎士達は、あつという間に吹き飛ばされ、広間の隅に転がった。

風は緑がかった金色の燐光をまとっていた。それは、龍青玉の魔力とは明らかに違う発光現象。精霊との契約と詠唱によって導かれる、太古から連綿と続く魔術師の魔法。そして、風の中心にいるのはルーリーだった。

「マーリー！ ララサラ陛下をお守りしなさい！」ルーリーは叫ぶと、胸の前で手を叩き合わせた。

「我はルーリユーシュ・ファブナツク。金翠きんすいの父母ちちははと我が名において願たてまつい奉らん。妙たえなるその歌声を我に唱しょうせよ！ 猛たけき風の精霊達よ！」

凜然たるその詠唱に呼応するように、風はますます強くなり、渦を巻いて広間を満たした。

風の中から、ルーリーがマーリーに何かを叫んだ。しかし、マーリーには聞き取ることができなかった。

ルーリーの詠唱が高らかに響き、金色に光る激しい風がララサラとマーリーに吹きつけた。ララサラは思わず、目の前の背中にしがみついた。

金翠の魔法の風は、ララサラとマーリーを巻き込み、強引にすくい上げた。ふたりの体は窓を突き破り、あつという間に露台を越え、夜の空へと浮く。王宮も、王都さえも、瞬く間に彼方へと消えた。

そのあまりの速度に、目を開くのもままならず、感覚が麻痺していく。しがみついた背中から、ただマーリーの体温だけが伝わって

くる。今にもかき消されそうな意識の片隅で、ララサララは思った。
——女官長が自分を殺そうとしたのは、何故だろうか？
——兄上とリルの父が首謀者だという。何故だろうか？
——身代わりで怪我を負ったリルは、大丈夫だろうか？
——自分を逃がしたルーリーは、どうなるのだろうか？
——私は、王国は、一体どうなってしまうのだろうか？
ララサララは意識を失う直前、背中から回した手を、マリーがぎゅっと握りしめるのを感じた。

同時刻。

デル・マタル王国、ブリスター子爵邸の一室。

子爵邸の主人ブリスター子爵と、アップ・ファル・サル王国の第一王子カカパラス・バラオが向かい合って座っていた。

「そろそろ頃合いだな」

「まったく、殿下には参りましたな。私は、〈金翠の歌姫〉が気に入っておりますのに」

「私も気に入ったよ。彼女が私の王国の礎となってくれば、この上ない喜びだ」

侍従のひとりが部屋に入ってきて、子爵に耳打ちをした。

「殿下、出発の準備が整いましたぞ」

「そうか。アップ・ファル・サルからの報告はまだこないのか？」

「お待ちになりますか？」

「いや、すぐに出発しよう。パウバナ大司教ならば上手くやるだろう。それに、報告を待って時期を逸してはいけないからな」

「お心のままに」

「うん。初代ババカタラ・バラオの百年の守護魔法。今度は私が使わせてもらう。カカパラス大帝建国のために、ララサララと〈金翠の歌姫〉を人柱としてな。ふたりにも、こんな光栄なことはあるまい」

夜の子爵邸に、カカパラスの不敵な笑い声が響き渡った。

道行き 1

むせ返るほどの草いきれだった。

太陽が容赦なく照りつけている。

遠目に光る水面は、王国中央を流れるタリル川だろうか。日陰一つない広大な草原を歩きながら、マーリーは思った。隣を歩くラサラに訊いてみたかったが、むっつりと黙り込んでいる彼女が答えてくれるとは思えず、マーリーは喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

空は雲一つなく晴れ上がっている。

名も知らぬ鳥が、ふたりの頭上をすいと飛び去っていった。

ルーリーの魔法の風に運ばれたラサラとマーリーは、広大な草原に投げ出された。運ばれている間に気を失ったふたりは、落ちてもなお、朝まで気が付かなかった。夏だったことがふたりに幸いしたのは言うまでもない。

マーリーが朝日のまぶしさに目を覚ましたとき、ラサラはすでに気が付いていた。昨晩は高く結い上げられていた髪が解かれ、朝日に輝いている。とても綺麗だとマーリーは感じた。

「陛下」

声をかけると、ラサラが振り向いた。朝日のまぶしさに一瞬目を細め、やがて「ああ」とマーリーを認めた。

辺りは見渡す限りの草原で、緑の絨毯が果てしなく広がっている。マーリーは立ち上がって周囲を見回した。

「すまんな」

「え？」

ラサラの言葉に驚いてマーリーが振り向いたときには、彼女はもう草原の彼方を見つめていた。視線の先にはアパ・カタラ連峰

が霞んで見える。王都の方角だろう。アップ・ファル・サル王国の地理に疎いマーリーでも、そのくらいは見当がついた。

夏草を掻き分けてララサラが歩き始めた。謝罪の理由を説明しようという気はないらしい。慌ててマーリーも後を追った。

「付いて来ることはない」前を見据えたままララサラが言った。

「私は王宮に戻る」

「僕も行きます」

「やめた方が良く。賊扱いされたばかりであろう」

「それなら、王都まででも。陛下をひとりで行かせるわけにはいきません」

ララサラは立ち止まって、マーリーを睨み付けた。

「ここは私の国だ。自分の国を歩くのに、なぜよそ者のそなたに心配してもらわねばならぬのだ」

「だって、女の子をひとりで行かせるなんて」

ララサラは虚を突かれたような顔をした。まじまじとマーリーの顔を覗き込むと、ぷいと横を向いた。そして「付いて来るなよ」と念を押して、再び歩き始めた。

結局、マーリーは最後の切り札を使わざるを得なかった。

「母さんのことも心配だし……」

その言葉を聞くと、ララサラの体が強ばった。わずかに肩が震えている。それでも、唇をかみしめ、体を引きずるようにして、ララサラは黙々と歩き続けた。

「陛下？」

マーリーは、自分のひとことが予想以上に彼女に効いたことを知った。黙り込んでしまったララサラは、もう付いて来るなどとは言わなかった。

行けども行けども草原だった。

歩き始めてしばらくすると、ふたりとも汗が噴き出し始めた。

ララサララの晩餐会用のドレスは、何しろ裾が長くて大きい。夏草の中を歩くのには、向いていないことこの上なかった。

始めのうちは上品に両手で裾を持ち上げていたララサラだった
が、日が天頂に来る頃には、ついに我慢ができなくなった。立ち止まり、スカートを忌々しげに睨み付けた。それから、裾を大きくたくし上げると、手際よくそれを絡^{から}げ、太股の両脇でぎゅっと縛った。そして、再び勢いよく歩き始めた。

一方マリーは、上着を脱ぎ、シャツの襟を大きく開けて歩いていた。王宮で借りた立派な服が汗だくになっていたが、そんなことを気にするどころではなかった。

その日のうちに草原を抜けることはできなかった。食べ物も水も見つからない。アパ・カタラ連峰の彼方に日が沈むと、ふたりは崩れるようにしてその場にへたり込んだ。

歩き始めて以来、ひとことも言葉を交わしていない。午前中は、ララサラがむつつりと黙り込み、会話を拒む雰囲気を出していた。午後になると、お互いに消耗してしまい、話をするどころではなかった。

草に沈み込むようにして横になると、ふたりはあっという間に眠りに落ちた。

空には満天の星空が広がっていたが、ふたりがそれに気付くことはなかった。

道行き 2

翌日の昼過ぎ、草原を横切る道にぶつかつた。馬車が二台ぎりぎりすれ違える程度の細い道には、新しい轍わだちがくつきりと残っている。荷馬車が普段使っている道のようだった。

轍を見つめて考えていたラササラは、道を左へとたどり始めた。しばらく行くと、道の両脇に木立が現れ始めた。やがてそれは密になり、ほっとするような木陰をいくつも作り出した。微かに湿り気を帯びた風も吹いてきた。

道の先は、こんもりとした林へと続いていた。

相変わらず人は見かけず、家も畑もない。それでも、ラササラは迷わず歩を進めた。道があるのだから、いずれは町にぶつかるだろうと思われた。

林に入ってしばらくすると、ラササラが足を止めた。

「水の匂いがある」

マーリーも立ち止まって辺りを伺った。水の匂いはわからなかったが、微かな水音を聞きつけた。林の右手奥からだ。

ラササラが構わず道を外れ、林の中に踏み込んだ。枝が盛大に伸びた夏の林の中を、ラササラはずんずん進んでゆく。ドレスが枝に引っかかり、いくつも鉤裂きを作っても気にする様子もない。

次第に水音は大きくなり、木々が途切れた先に、小さな川が姿を現した。

「！」

ふたりは転がるようにして川岸までたどり着くと、顔を沈めるようにして水を飲んだ。息が続かなくなるまで水を飲み、顔を上げて荒い呼吸をし、さらに水を飲む。気が済むまでそれを繰り返して、ふたりはようやく人心地がついた。

マーリーは川辺に座り込んで空を見上げた。隣で、同じようにラササラが空を見上げている。

「水ってこんなに美味しかったんですね」

「そうだな」

「二日間も水を飲まなかったなんて初めてですよ」

「そうか……。私は二回目だ」

「え？」

しかし、ララサララはそれ以上は何も語らなかった。

やがてララサララは立ち上がると、川を遡って歩き始めた。道へ戻るよりも、水のあるところを歩いている方が安心だと思ったのだろう。

マーリーも黙って後続く。魚でも捕れないかと、川面かわもに目を凝らしながら歩いていった。

「五日間だ……」突然、ララサララが言った。

何のことだかわからず、マーリーは言葉を返すことができなかった。

「大理石の柱の中の、棺のような狭い空間に、五日間飲まず食わずで隠れ続けた」

さっきの話の続きであることに、ようやくマーリーは気付いた。

「どうしてそんなところに？」

「身を守るためだ」

ララサララは吐き捨てるようにそう言った。後ろを歩くマーリーには、彼女がどんな顔をしているのか見ることはできなかった。

「三ヶ月前、師の教えを受けているときに、突然賊に襲われた。師は慌てて私を大理石の隠し扉の中に押し込め、魔法で蓋をした。そして、リルに発見されるまでの五日間、飲まず食わずで隠れ続けた」

「三ヶ月前……」

それは、ラド親方が話してくれた、王の代替わりがあったという時期ではないだろうか。

「想像できるか？」

「……いえ」

ララサララは歩き続けている。

マーリーはララサララの背中を見つめていた。

「漆黒の闇だ。微かな空気の流れと音だけが外との繋がりだ。自分の排泄物の臭いで息が詰まるのだ。中から開くことは叶わず、誰かが開けてくれるかどうかともわからず、それ以上に、皆生きているのかどうかともわからず……、発狂することも叶わず」

風一つなく、息をひそめたように大気が澱んでいる。容赦のない夏の日射しの中、風景が色あせて見える。

「師が閉じた扉が開かぬのだから、師は死んだと、まず思った。きっと政変があったのだろうから、父王も死んだのだろうと思った。ならば、母様も死んだのだろうと思った。皆死んだのだと思った。自分は何故まだ生きているのかと思った……」

ララサララの足が止まった。そして、絞り出すように言った。

「いっそ、闇に溶けてしまいたいと思った」

「常闇を望むと……」

「あのときと同じだ。あのときは師に助けられ、師は死んだ。遺体を見たわけではないが、おそらく死んだのだろう。今回はリルト、そなたの母君に助けられた」

とぼとぼと、再びララサララの足が動き始めた。

マーリーはかける言葉が見つけられず、ただその後ろを歩き続けた。

たくし上げたスカートから出たララサララの足は、驚くほど細かった。裾からはみ出した膝まである下着の下に、真っ白なふくらはぎが露わになっている。そこにいくつかの切り傷を見つけて、マーリーはいたたまれなくなった。さっき、林を抜けたときにできた傷だろう。

何か言わなくては、とマーリーは考え、結局何も思いつかなかった。

ならば歌ってみようか。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳
春の香まいて野を駆ける
若き清しきその息吹

雨雲払う風の唇^{しん}
宵闇散らす明^{あけ}の声
踏みし草原^{くさはら}咲き誇る
紅き瑞^{みず}しき立ち姿

厳しき誓いの王^{かん}の冠^{しょう}
民草愛^{やまはらうみ}でる慈悲^{しやう}の掌
山原海と精霊^{おき}の
満つる麗しき邦^{くに}の長

いつの間にかララサラは立ち止まり、歌うマーリーを見つめていた。

マーリーが照れくさそうに微笑むと、ララサラはぷいっと顔を背け、勢いをつけて歩き始めた。

「もう一度だ」

「？」

「もう一度歌ってくれ」

「はい！」

それからマーリーは、請われるままに、繰り返して歌ったのだった。

道行き 3

マーリーの歌声を聞きながら、ララサララは、自分が何故こんなにも一生懸命に歩いているのかを考えていた。

正直、昨日の朝草原で目を覚まして、ララサララはほっとした。目が覚めたときに暗闇じゃなかったのは三ヶ月ぶりだった。深呼吸をすると、本当に久しぶりに生き返った気がした。

そして、晩餐会のことを思い出すと――なぜだか、急激に怒りが湧いた。

それが何に対する怒りなのか、それをずっとララサララは考えていた。

大司教に対する怒りだろうか？

女官長に対する怒りだろうか？

三諸侯に対する怒りだろうか？

それとも、兄上に対する怒りだろうか？

怒りの矛先がどこに向かっているのかわからず、矛の形さえわからない。しかし、この状況に怒りを覚えるのは、王として当然のようないきがした。

だから、ララサララはとりあえず、まだ怒っていた。

いつの間にかマーリーの歌が終わっていた。

「もう一度だ」

「はい」

この暑さの中で歌い続けたら、喉がからからになってしまうだろう。それは、ララサララにもわかっていた。でも、請わずにはいられなかった。

マーリーの歌は王宮を思い起こさせた。こうしている現状と、歌が想起させる印象との食い違いは、怒りを持続させるのに一役買ってくれる――

白い鳥が、水際で水を飲んでいた。

「……？」

ララサラは鳥を目で追い、そして、鳥に気付いた自分に驚いた。水を飲んで人心地ついたせいだろうか？ 昨日まで、いや、さっきまで、鳥などまったく気にならなかったというのに。

ララサラは、いつの間にか立ち止まっていた。

「どうしたんですか？」

「鳥だ……」

「本当だ。なんて鳥だろう」

「知らぬ」

「魚を捕るのかな。分けてくれないかな」

「無理であろう。それより、もう一度歌ってくれ」

「はい」

——いつの間にか、怒りが薄らいでいた。

ララサラは、歌いながら歩くマリーーを見た。暑そうだった。見ている方も暑くなってきた。——そして、暑さをあまり感じていなかったことに、今更ながらに気が付いた。

暑い、足が重い、お腹が減った、汗で気持ちが悪い。それだけのことに思い至って、ララサラはふつと微笑む。

「……歌はすごいな」

「え？ 何ですか？」

「何でもない。日が暮れぬうちに林を抜ける。急ごう」
ララサラは大きく息を吐くと、足を速めた。

道行き 4

川を遡った先には、小さな池があった。

林の中にぽっかりと開けたそこは、湧き水が池となり、川へと流れていた。水面には、張り出した木々の枝が濃い影を落としている。時折聞こえる鳥の鳴き声と水のせせらぎ以外には、ほとんど音も聞こえない。池の向こうには、林の中を抜ける道がある。どこから水を汲みに来る人があるのだろうかと思われた。

静かな水面を眺めていたララサララが、ぽつりと呟いた。

「水浴びがしたい」

「え？」

「見張っていてくれ」そう言うと、ララサララはドレスを脱ぎ始めた。

当然のようにマリーリーは慌てた。

「ちょ、ちょっと待ってください。陛下」

「なんだ」

「こんなところで水浴びなんて、不用心です」

「だから見張っていてくれと言っただろ。心配するな、そなたが水浴びをするときは私が見張っている」

「そういう心配はしていません」

「じゃあ、何なのだ」

言っているうちにもドレスは脱ぎ捨てられてしまい、ララサララは下着に手をかけている。

「僕は男ですよ？」

「それがどうした」

「いえ、その……」

しばらく考えていたララサララは、ようやく何かに思い当たったようだ。

「そなた、何か無礼なことを考えているのか？」

「え？ ……いや、考えていませんけど」

「では問題ない。見張っていてくれるな？」

「……はい」

マーリーが答えるのも待たず、ララサラは上の下着を脱ぎ捨てた。

真っ白な肌が目に入り、マーリーは慌てて顔を背けると、その場を離れた。

「あまり遠くに行くでない」

マーリーは池の反対側の道を見渡せる場所に腰を下ろすと、深くため息をついた。王族というのは一般人と感覚が違うらしい。自分の裸を見られることが恥ずかしくないのだろうか？

背後からは水浴びの音が聞こえてくる。

ララサラの真っ白な肌が脳裏に浮かび、マーリーは慌てて頭を振った。

道行き 5

日が暮れる前に林を抜けた。

林が切れた先には墓地があった。大小様々な墓石が、ほぼ等間隔に並べられている。

静謐な死者の庭を歩くうち、マリーは一つの墓石に目を止めた。それは新しく、たくさんの花で飾られている。埋葬が行われたばかりなのだろう。花とあわせて、果物もたくさん供えてあった。

「陛下」

マリーは果物を一つ手に取ると、ラサララに差し出した。ラサララは渋い顔をした。

「それは死者に供えられたものであろう」

「ええ。でも、この人は食べられない」

マリーが墓碑に目をやり、ラサララもそれを見る。《歴史の友が歴史となった ボーズ・ブリュースここに眠る》と刻んでいた。

「王国の民だ。疎かにできるか」おろそ

「ならばこそ、この人も陛下の空腹を見捨てるのは本意ではないでしょう。逆に喜んでくれると思います」

「思いの外、屁理屈が上手いな」

そのとき、ラサララの腹がぐーと鳴った。ラサララはぼつが悪そうに目を逸らす。心とは裏腹に、目の前の果物に胃が反応しているようだ。

ラサララは墓前に片膝をつくとき、神妙に、深く頭を垂こうべれた。

「ブリュース殿、すまぬ。貴殿の供物を少し分けていただく」

マリーもそれに習った。そして、一つ二つを残して、供えてあった果物を抱え上げた。

辺りを見回し、墓地の外れに石の卓を見つけると、ふたりはそこに座った。墓参りに来た人々が休息を取るために設えられたものだ。

ろう。

果物はまだ瑞々しく、供えられたばかりのようだった。一口食べると、いかに空腹だったかを思い知らされた。ふたりは無言で、むさぼるように果物を平らげた。

腹がくちくになると当然のように眠くなる。ちょうど日が暮れたのを良いことに、ふたりは石卓脇の草むらに寝転がった。

見上げた空には、宝石をちりばめたような星々の海が広がっていた。

「そなた……」

「マーリーです」

「マーリー。母君のこと、すまなかった」

その言葉は、昨日の朝に続いて二回目だった。

「陛下、そのことは……」

ララサラが手でマーリーを制した。

「？」

「ララで良い。私はそう呼ばれるのが好きだ」

〈早春の息吹〉ララ姫。しかし、いきなりの呼び捨ては、マーリーには敷居が高すぎた。

「では、ララ姫と……」

「姫ではない。リルもいまだに姫と呼ぶのをやめぬのだ」

リルの名が出たことで、いやな沈黙が訪れた。マーリーは覚悟を決めて口を開いた。

「母さんのことは、ララのせいではありません——ララと口にするとき、マーリーは頬が少し熱くなった。「王宮内のゴタゴタに巻き込まれたのは、きっと母さんに理由があるんだろうと思います。魔術師だったなんて、僕は知らなかった」

「そうなのか？」

「ただの歌い手だと、物心ついた頃から信じていました。たまに、各国の王侯貴族の館に出入りをするところがありましたけど、それだって、歌が上手いからだと思っていました」

マーリーは、ルーリーの首飾りを星明かりにかざした。銀でできているそれは、マーリーが物心ついた頃からルーリーの首にかかっていたものだ。細かく繊細な模様が刻まれているが、下げ飾りの真ん中、飾り石が入るべきところが空になっている。

「魔法細工のようだな」

「え？」

「その首飾りだ。真ん中には龍青玉が入るのだろう」

「……」

マーリーは首飾りをまじまじと見た。裏蓋には文字が掘ってあるが、さすがに星明かりでは読むことができない。裏蓋を開けてみたが、その中は空だった。

「ララ、訊きたいことがあります。〈麗しの王国〉を母さんがわざと間違えて歌った。あれは何の意味があったんですか？」

「あの替え歌は私が作ったのだ。いつも跳び回っていて、ちっとも私と遊んでくれぬ兄カカパラスを^{やゆ}揶揄してな。父王と母様と兄上しか知らないはずだった。だから、どこかで兄上に会ったのだと思っ
てな」

「それで僕らを晩餐会に？」

「晩餐会の前に、リルとそなたの母君で話をしたはずなのだ。報告は後からリルに聞くはずだった。……しかし、その暇はなかった」

ララサラは折りたたんだ紙を取り出した。血で汚れ、真っ黒になっている。

「それは？」

「父王と母様の居場所が書いてある。リルの血で読みづらいが……」
優しい風が林を吹き抜け、子守歌のような葉音を運んでくる。

満天の星に抱かれて、いつしかふたりは眠りに落ちた。

ノース 1

アプ・ファル・サル王国騎士団第八大隊長ノース・ブリューチス
は不機嫌だった。

昨晚、父の葬儀を終えて、明け方まで親戚一同飲み明かしたのだ。
なにがあったかは知らないが、こんなに朝早くたたき起こされては
堪らない。

ノースは寝乱れた肩口までの赤毛を紐で強引に括くると、水桶みずおけから
柄杓ひしゃくで水を飲んだ。

「まだか、ノース」

家の外から叔父のだみ声が聞こえる。ノースを叩き起こしたのは
この叔父だ。もつとも、父の葬儀全般を取り仕切ってもらった手前、
あまり邪険にすることもできない。

「はいはい。女は準備に時間がかかるの」

「騎士団の大隊長なんてやっててなにが女だ。早くしろ」

もう一杯水を飲むと、ノースは仏頂面で家の外に出た。

ノースの感覚ではまだ早朝だと思っていたのだが、日は随分と高
くなっていった。照りつける太陽が二日酔いの目にはまぶしい。

「で、何があったの？」

「親父さんの墓の供え物を盗み食いしたガキどもがいるんだ」

「盗み食い？」

墓に供えた果物は、一晩おいた後、葬儀の手伝いをしてくれた人
達に配るのが、この町ファル・ベルネの慣例だ。今朝、ノースの叔
父は、果物を回収するために墓地へと赴いた。すると、果物はほと
んどなくなっていて、墓地の隅で子供ふたりが食べかすと共に寝て
いたというのだ。

「墓地で寝てたって、誰よ？ アントン？ マラカ？ それともペ
ント？」

「だから、町のガキじゃないんだ。小綺麗な服を着た小汚いガキど

もだ」

「どっちよ……」ノースは苦笑した。「いくら父さんのお墓だからって、叔父さんが小言の一つも言ってくれればそれで済むじゃない」「いいから」

そうしてふたりは、町の中央にある広場までやってきた。広場には人集りができていて、その中心に子供がふたり立っていた。ひとだか

長い褐色の髪に藍色の瞳。真っ赤なドレスを着た女の子。

明るい金髪に翡翠色の瞳。絹のシャツを着た男の子。

たしかに、ふたりとも晩餐会にでも出るような装いだが、随分と汚れてしまっている。町の住民に取り囲まれているにもかかわらず、ふたりとも意外と堂々としていた。

「ほら、おまえらが食べた果物は、こいつの親父さんの墓に供えられていたものだ。罰当たりが」

叔父が言い、ノースの背中を押した。

図らずも輪の中心に押し出されてしまったノースは、仕方なく口を開いた。

「あー……、君達名前は？」

「僕はマリーー」と男の子が答える。

「余はララサララ・バラオだ。何度言わせれば気が済むのだ」と女の子が言った。

ララサララ・バラオ？ それは、この王国の女王の名だ。

ノースはもの問いたげな顔で叔父を振り返った。

「ずっとその調子なんだ。まさかとは思うがよ、おまえなら女王の顔も知ってるかもしれないと思ってな」

騎士団の通常業務にはアップ・ファル・サル王宮の警護も含まれている。騎士団第八大隊長たるノースは、当然女王の顔を知っている。しかし、この女の子がララサララ女王その人か、と問われると自信がなかった。たしかに似ている。しかし、こんな所に女王がいて、しかも盗み食いをしたなどという状況が理解できない。

「私はノース・ブリューチス。君達、なんで盗み食いなんかしたの

？」

「二日間何も食べてなかったんです。だから、申し訳ないとは思いましたが、分けてもらいました」

「なんで二日間も？」

「新しい魔法具を試していて放り出されたんです。ずっと向こうの草原の真ん中に」

「その魔法具は？」

「どこかに、飛んでいってしまいました」

ノースの質問に答えるのは、ほとんどマリーリーと名乗った男の子だった。ララサララと名乗った女の子は、仏頂面で周囲を睥睨^{へいげい}している。

「あなたに訊きたいのだけど」ノースは女の子に向かって言った。「ララサララ・バラオというのは、この国の女王様の名前なのだけれど？」

「もちろんだ」

ノースは深いため息をついた。どう判断したものだろうか。あごに手を当て、下を向いて考えを巡らせる。

百歩譲って、空飛ぶ新しい魔法具を女王が試しに使ってみる、ということがあったとする。何しろ十五歳の女王だ。そして、制御が上手くいかずに暴走し、一緒に乗っていた男の子と共に放り出された――

ノースは男の子を見た。女王が仮に本物だとしたら、この子は誰なのだろう？

「ねえ、君……」

ノースが顔を上げたとき、ひゅっ、と何かが耳の脇をかすめて飛んだ。

「！」

人垣の中から投げられた小さな石礫^{いしりぼし}は、女の子の額に当たった。

「嘘つくんじゃないよ」どこからそんな声が上がった。

それをきっかけに、あちこちから罵声が飛んだ。

「ララ女王を騙るなんて、とんでもないガキどもだ!」

「女王様がこんな所にいるわけがないだろう!」

「その服だって、どっかから盗んできたんだろう?」

「本物の女王様なら、〈行幸の御証〉があるはずだろう!」

「そうだ、そうだ」

〈行幸の御証〉とは、王の行幸に合わせて、天と地から光が溢れる現象のことだ。それは、精霊の秘儀を受けたアップ・ファル・サル王の証だとされていた。

罵声が罵声を呼び、広場は騒然となった。

次々飛んでくる石を避けるでもなく、女の子は無然と立ちつくしている。

男の子は女の子の前に立って、必死で彼女を庇っている。

「やめなさい!」

ノースは一喝した。大隊で号令を発するときの要領で、腹の底から声を出す。

罵声が止んだ。

「この子達の盗み食いは当然見逃さないけど、騎士団第八大隊長としては、寄って集って子供をいたぶるのも見逃せないわ」

ノースが周囲を見渡すと、人垣がそわそわと揺れた。

「この子達が言っていることは私が確認を取ります。それでいいわね?」

「お前がそう言うなら、それでいいさ」ノースの叔父が小さい声でぼそぼそと答えた。

パン! とノースが一つ手を打つ。これで終わり、という合図だ。

ノースの剣幕に気圧された群衆は、足早にその場を後にした。

「さあ、君達。ここじゃあ何だから、私の家にきてちょうだい。傷の手当てもしないよ」

男の子が「ありがとうございます」と言って頭を下げた。

女の子はいえ、額から流れる血を拭おうともせず、無然と立ち続けていた。

ノース 2

広場から続く町の大通りから外れ、小さな路地に入る。似たような小さな家が密集している一画にノースの家はあった。

「じっとしていて」

ノースは清潔な布に水を浸してララサラの傷を拭くと、軟膏なんこうを塗り込んだ。額だけでなく、足の傷にも軟膏を塗る。椅子に座ったララサラは、眉一つ動かさず、されるに任せていた。

「はい、これで大丈夫よ」

「感謝する」

「それはどうも、女王陛下」

ノースの声には皮肉の響きがあり、ララサラをまだ女王その人だと認めていないことがわかる。

「そなた、騎士団第八大隊長と申したな。余の顔がわからぬのか？」

しかし、ノースはその質問には答えず、隣の部屋へと姿を消した。

「ララ……」マリーーが見かねて声をかけた。

「在位三ヶ月の王などこんなものか……。少しみすばらしくなると、国民どころか、騎士にも信じてもらえぬ」

ララサラはぐっと唇をかむとうつぶいた。

「普段家にいることが少ないから、こんなものしか出せないけれど」部屋に戻ってきたノースは、木製の杯に入れられた水をふたりに差し出した。

マリーーはお礼を言って杯を受け取ったが、ララサラは手を出さなかった。ノースはため息をつき、杯を手近な卓の上に置いた。そして、立ったまま腕組みをして言った。

「正直、判断しかねているわ。たしかに陛下に似ている。でも、陛下がこんな所にいるはずがない。〈行幸の御証〉はね……。私も内情を知っているから。でも、さっきは確認を取ると言ったけど、正直なところ、あまり常識外れなことは王宮には聞けないわ」

「じゃあ、僕らをどうするんですか？」

「どうもしないわ。好きにして頂戴。父さんのお墓の供え物を食べた件はもういいわ。だから、君達は自由よ」

そう言うのと、ノースは玄関の扉を開いた。出て行けと言っているのだ。室内から見ると外の風景は、妙に白々としていた。

まずララサラが無言で立ち上がり、とぼとぼと外に出た。マリーもそれに続こうとしたが、しかし思い止まった。ノースの顔を見上げる。ノースは背が高く、マリーより頭一つ半も大きい。

「？」

「ブリュース大隊長ですね？」

「ええ、そうよ」

「アップ・ファル・サル王国の騎士は、迷子の子供ふたりを見捨てるんですか？」

「なんですって？」

「僕達には、ここがどこだかもわからないんです。お金もありません」

「それで？」

「だから、僕達の力になってももらえませんか？」

「君が言いたいのは、彼女が本物の女王陛下かどうかに関係なく、君達ふたりを保護しろと、そういうこと？」

「はい」マリーは唇を引き結んで頷いた。

「広場で助けてあげただけでは足りないの？」

「それは感謝しています。ララの傷の手当てをしてくれたことも。でも、まだ困っているんです」

しばし、マリーとノースの睨み合いが続いた。

「君、何歳？」

「十五です」

「十五歳で、自分は子供だから助けてくれって、そう言うの？」
「言います。駄目ですか？」

ぷっとノースが吹き出した。

「駄目じゃないわね。大人だって、困っているときは助けてもらいたいものだもの」

ノースは両手を上げて、降参という仕草をした。

「わかったわ。信じる信じないは別にして、とりあえず、今すぐ君達を追い出すのはやめるわ。ほら、あなたも戻りなさい」

ララサララは事態が良く飲み込めていないらしく、ポカンとしている。マリーが手を引き、家の中へと連れ戻した。

ノースが扉を閉めると、三人は改めて、部屋の中央の卓を囲んで座った。

うほん、とわざとらしい咳払いをしてノースが口を開く。

「そうとなれば、騎士団の大隊長としては、根掘り葉掘り訊くわよ」ぐるぐる——見計らったようにララサララの腹が鳴った。ノースは目が点になり、すぐに大笑いを始めた。ララサララは頬を染めて横を向き、苦々しげに呟く。「何なのだ」

「そうね、まず腹ごしらえをしようか」

ノースはそう言うのと、食事の用意をするために席を立った。

こうして、ララサララとマリーは、二日ぶりにまともな食事にありついたのであった。

ノース 3

父の葬儀のために休暇を取っていたノースは、四日の休みを終えて、王都ファル・バラオのアプ・ファル・サル王宮へと戻ってきた。ファル・ベルネの町から王都ファル・バラオまでは、歩いて二日、馬を飛ばせば約半日の距離だ。馬を駆って朝早く家を出たノースは、日が天頂に昇りきる前に王宮に到着することができた。

「大隊長、お帰りなさい」

騎士団第八大隊長室に顔を出すと、参謀のベルルが声をかけてきた。

アプ・ファル・サル王国には、〈騎士団〉と〈州軍〉の二つの軍隊が存在する。国王直属の軍隊である〈騎士団〉は、王都ファル・バラオの警護と治安維持を担当する。一大隊の定員が約三百五十名。全八大隊で、総勢約三千人となる。一方、各州で諸侯が率いているのが〈州軍〉だ。人数は州によって違うが、概ね一万五千人程度。こちらにも、各州の警護と治安維持を担当している。

ノースの騎士団大隊長という職務は、騎士団三千人の中で八人しかいない要職だ。騎士団長、副騎士団長ふたりの下に位置する。しかるに、専用の部屋もあるし、参謀もいる。

「お葬式、どうでしたか？」

湿っぽい事柄もからつと話してしまうのが、ベルルの良いところでもあり、悪いところでもある。髪は明るい褐色で、年齢より随分と若く見える。甘いと言えば聞こえの良い童顔。女性かと見間違えそうなすらりとした体型。きっと、さぞかし女性にもてることだろう。

「滞りなくすませたわ。叔父がほとんど仕切ってくれた。私は父の棺の前で泣き崩れているだけで良かったわ」

「泣き崩れる大隊長つてのを、是非見てみたいです」

「ところで、私の留守中、特に問題はなかった？」

「大騒ぎでした」

「なに？」

「大隊長が休暇を取られた最初の日ですよ。晩餐会で、女王陛下を狙う魔術師の襲撃があったんです」

「何ですって？」

ノースの剣幕に、ベルルはたじろいだ。

「ご存じの通り、王宮内はうちの大隊の警護担当じゃありませんでした。第二大隊の当番でした。ミューカス第二大隊長なんて、自分で自分達のときになって、随分愚痴ってましたよ」

ベルルの話をまとめるところこういうことだった。

四日前の夜。ララサラ女王主催の晩餐会に、旅の親子連れの手が招待された。親子は〈うそつき面〉を使う劇をやるから、と言って、中広間の〈魔法封じ〉を解かせた。そして、隙をみて女王陛下を襲った。しかし、襲撃は失敗。母親の魔術師は、パウバナ大司教と三諸侯に取り抑えられた。息子の方は、逃げるときに女王陛下付きの女官に怪我を負わせた。

「陛下はどうなされたの？」

「ご無事です。あれ以来、随分と警護が厳しくなりましたが」

「怪我をしたっていう女官は？」

「重傷だって聞きました」

「逃げた息子の方だけど、どんな服を着ていたかわかる？ 指名手配になっているでしょ？」

「ええ。王宮から貸し出した服だそうです。絹の白いシャツ。紺地に金糸で縁取りをした上着と、膝丈のズボン。明るい金髪で、目の色は翡翠色です」

「もう一つ、晩餐会の際の陛下のお召し物は？」

「え？ さあ、そこまでは……」

わかった、と言うと、ノースは足早に部屋から出た。

「あれ、大隊長？」

「用事を思い出した。後よろしく」

そしてノースは、騎士団第二大隊長デュー・ミューカスの部屋へと向かった。

ノース 4

ノースが王宮内を歩き回って集めた情報は、前日、ララとマーリーから聞いた話と概ね一致していた。ふたりは、新しい魔法具云々が作り話だったことを認めた上で、そこに至るまでの驚くべき出来事を語ったのだった。

晩餐会で、〈魔法封じ〉を解こうと言い出したのが、マーリーの母親だったのか、それともパウバナ大司教だったのか。女官に怪我を負わせたのが、マーリーだったのか、それとも女官長だったのか。それは、今は問題ではない。結果として〈魔法封じ〉が解かれ、女官が怪我をした、という事実が重要だった。

晩餐会当日の女王陛下の服装は、赤地に金糸で刺繍をしたドレスだったという。それは、ララが着ていた服と同じだ。マーリーの服装も、指名手配になっているものにぴったり合う。

ただ、ララサラ女王が無事だという一点が、ふたりの話と食い違っていた。王宮に女王がいるのなら、今ファル・ベルネのノースの家にいるララは偽者ということになる。

――しかし。

昨日、一日かけてふたりの話を聞いてみて、ララがララサララであることを、ノースは七割方信じかけていた。ふたりが語った、中庭での謁見^{えっけん}から、ファル・ベルネの町にたどり着くまでの話に破綻はなかった。加えて、ララは王宮内の些細なことまで実によく知っていた。それは、女王本人ではなくても知り得る事柄がほとんどだった。あそこまで破綻なく話をするのは、偽者ならば驚嘆に値する。〈行幸の御証〉は、王の権力示威のために王宮の魔法使いが行う人為的な現象で、王が移動するだけで自然と起きるようなものではない。国民はそれを知らないことが多いが、ノースは当然知っていた。さらには、旅の歌い手だというマーリーも、嘘をついているとは思われなかった。

これは一体どういうことだろうか。ファル・ベルネのララが女王本人だとすると、今度は王宮にいる女王が偽者だということになってしまう。

ノースは〈奥の宮〉へと足を向け、女王の衣装庫の扉を叩いた。

「騎士団第八大隊長のノース・ブリューチスよ」

「はい。何でしょうか？」

衣装庫で対応に出たのは、十五、六歳の若い女官だった。ララと
同じ年ぐらいだろう。

「女王陛下のお召し物はすべてこちらに？」

「はい」

「赤地に金の刺繍の入ったドレスがあると思うのだけど」

一瞬、女官の視線が泳いだのを、ノースは見逃さなかった。

「数日前の晩餐会で、陛下がお召しになっていたものよ。見事な刺繍だったと噂を聞いたわ。私、こう見えても刺繍に興味があるの。

是非、一度拝見させてもらえないかしら」

「あ、あの……、衣装庫長を呼んで参ります」

慌てて部屋の中へ戻ろうとする女官の腕を、ノースは素早く捕まえた。

「待って。衣装庫長なんかに訊いたら、見せてもらえるものも見せてもらえないわ。長とつく人達は形式にこだわるからね。どう？

一目で良いのよ」

可哀想なくらい若い女官はオロオロしている。

「ええと、あのドレスは汚れてしまつて……、そう！ 汚れてしまつて、廃棄されました」

「捨てたの？」

「はい。ですから申し訳ありません」女官は、下から上目遣いにノースを見上げた。

「それは残念ね。是非、拝見したかったわ」

潮時と見て、ノースは衣装庫を後にした。何食わぬ顔で女官に手を振り、廊下を足早に歩く。そして、辺りに人影がないことを確認

すると、立ち止まった。

ノースは、自分の鼓動が速くなっているのを自覚した。件のドレ^{くだん}スが衣装庫に戻されていないのは、ほぼ間違いない。ララが着ていたドレス、あれがおそらく本物なのだ。

——とすると、今王宮にいる女王は誰だ？

ノース 5

ノースはいったん王宮を出ると、裏手に回った。裏門や勝手口とは別に、目立たない扉がもう一つある。それは、地下牢への入り口だ。

扉の脇には、騎士がふたり衛兵として立っていた。牢が使われていないときには衛兵は立たない。捕らえられたという母親の魔術師が、地下牢に投獄されているためだった。

ノースは扉に近づくと、衛兵に敬礼をした。「ご苦勞様。入れるかしら？」

ふたりの衛兵は返礼し、ひとりがしゃちほこぼって答えた。「中に分隊長がおります。どうぞお入りください」

ノースは軽く手を挙げて衛兵を労い、扉の中へ入った。地下牢への入り口に当たる部屋には、第九六分隊の騎士三人が詰めていた。騎士団の最低構成単位である分隊は定員五人。外のふたりを合わせて全員だ。

「ブリューチス大隊長ではありませんか」

年配の男がノースに気付いて敬礼をした。第九六分隊長ターカスだ。第二大隊所属の第九六分隊はノースの配下ではなかったが、ノースは彼を知っていた。以前、剣の試合で手合わせをしたことがあった。

「仕事中にごめんなさい」ノースは返礼し、他のふたりへも労いの言葉をかける。「晩餐会の日は大変だったようね。私、今日戻ってきたばかりなのよ」

「大隊長も、お父上のこと、お悔やみ申し上げます」

「もう歳だったからね。大往生だと思うわ」

「晩年は、王国史の研究を熱心にされていたと伺いましたが」

「趣味だっただけよ。集めた資料と本が多くて大変よ」

ノースは笑い、ターカスも微笑んだ。

「例の魔術師、ここに投獄してあるんでしょ？ 顔を拝んでおこう
と思っ
てね。さっき、ミューカス大隊長には話を聞いたわ」

騎士団の大隊長が、犯罪者の顔を見ることに不思議はない。ター
カスは頷くと、鍵の束と蠟燭を乗せた燭台を手にとった。

「では、私がご案内いたします」

ノースはターカスに続いて地下牢への階段へと足を踏み入れた。

この地下牢が使われることは、実はめったにない。ノースが騎士
になってから二十年近くが経つが、その間ここに投獄された罪人は
初めてだった。町で罪を犯し、騎士団や州兵に取り抑えられた場合
は、それぞれ、町や州城にある牢に入れられる。ここ、王宮の地下
牢は、王宮内で取り抑えられた重犯罪人のみに使用されることにな
っていた。だから、ノースがここに入るのは、騎士になった最初の
年に王宮内研修で見学して以来だった。

苔生した暗く細い階段を降りると、突き当たりには重厚な扉があ
る。ターカスは蠟燭の灯りを頼りに、鍵を鍵穴へ差し込んだ。

地下牢は全部で六つ。中央の通路を挟んで、左右に三つづつ並ん
でいる。人ひとりが横になるのがやつとの小さな牢の前には、頑丈
な木の扉が据え付けられていた。扉には、目の高さど、地面すれす
れの高さに小さな覗き窓が空けられている。上の窓は監視用。下の
窓は食事の出し入れなどに使うためのものだ。通路の突き当たりの
壁に松明が一つ揺れている。今下ってきた階段とは別に、換気孔が
設けられているようだった。

「ここです」ターカスが、突き当たり右の牢の前で言った。

ノースは頷き、覗き窓から中を見た。

「！」

思わず息を飲む。牢の中は青白い光に満たされていた。

「魔術師を押さえ込むための〈魔法封じ〉です」

両手両足を鎖に繋がれた魔術師は、牢の壁から吊り下げられてい
た。それぞれの鎖には龍青玉が仕込まれ、さらには、壁にも、床に
も、龍青玉と魔法文字が仕込まれている。太い革の紐で猿轡をかま

された魔術師は、ぐったりと目を閉じていた。

しかし、明るい輝くような金髪と、その面影は、マーリーの母親だと疑う余地はない。歳は三十代半ばで、ノースと同じくらいかと思われた。

「すごいね」ノースはため息をついた。

「はい。なんでも〈金翠の歌姫〉とか言う、稀代きだいの魔術師だそうです。暴れ出した当初は、三諸侯の方々や騎士団では歯が立たなくて、陛下と大司教閣下が〈魔法封じ〉を復活させて、ようやく取り抑えたとか」

「あなたは、陛下が〈魔法封じ〉を復活なされたところを見たの？」

「いえ。第九六分隊は、王宮外の警護担当でしたので。中は別の分隊が」

「そう」

王宮内には、いたるところに警護のための魔法が仕掛けられている。それらは、王と司青署卿のふたりでかけていると聞いていた。ララが女王ならば、〈魔法封じ〉のかけ直しはできないはずだ。

——いや、そうとも言い切れないか。

王も、司青署卿も、時と共に人が入れ替わる。そして、龍青玉を使った魔法は、人を選ばずに発動するように組むことができる。でなければ魔法具などが成り立たない。とするならば、〈王〉と〈司青署卿〉ではなく、〈王の持つなにか〉と〈司青署卿の持つなにか〉が揃えば、術者は選ばないということではないだろうか。王といえば、まず思い浮かぶのは〈王冠〉だ。アップ・ファル・サル王の王冠には特大の龍青玉がはめ込まれている。そして、司青署卿の証は〈署卿の指輪〉だ。司青署卿に限らず、署卿に任じられた官吏かんりには、王から証に〈署卿の指輪〉が授けられる。それは、退任のときには王へ返還し、次の人物へと受け継がれる。

ララは王冠をつけていなかった。晩餐会の夜、司青署卿である大司教が王冠を手にしていれば、王が不在でも、〈魔法封じ〉をかけ直すことができた可能性はある。

「ありがとう。もういいわ」

ノースは牢の前から離れた。踵かかとを返し、なにげなく別の牢を覗く。特に理由があつての行動ではなかった。そこは、魔術師の牢とは反対側、入り口から見て、通路左側二番目の牢だった。

「？」

ノースは目を疑った。覗き窓から入る松明の灯りに、横たわる人影を見たような気がした。

「ああ、そこは、怪我をした女官です。魔術師の仲間だったとか」
扉の前で固まっているノースに、ターカスが何でもないような口調で言った。

ノースは燭台を借り、中を照らしてみた。それは、見たことのある顔だった。ララサララ付き女官のリル。上半身に包帯を巻き、木の床板にすぐに横たえられたリルは、もはや虫の息だった。

ノース 6

「王子殿下がお戻りになる？」

ベルルの報告を聞いて、ノースは素^す頓^{とん}狂^{きやう}な声を出してしまった。

「ええ。さっき連絡がありました。二日後には、アップ・タリルの港に到着するそうです」

「また、随分と急なのね」

「ララサラ女王陛下が即位なされてから、一度も謁見されていませんからね。お祝いを申し上げるためじゃないですか？ ああ、それから、大隊長はどこに行ったんだ！ てシュコーチス副騎士団長に怒鳴られちゃいましたよ」

「悪かったわね。例の魔術師の顔を拝んできたのよ」

「ご執心^{しゅうしん}ですね。陛下の晩餐会でのドレスも見にいきませんでしたか？」

「ええ、刺繍を見せてもらおうと思ってね」

「大隊長が刺繍に興味があるとは知りませんでした」

「私だって女だからね」

平静を装って会話を続けながらも、ノースは、背中に冷たいものが走るのを感じていた。ノースが衣装庫へ顔を出したのは、ほんの半時（約一時間）程前だ。あの女官が衣装庫長に報告したとしても、もうベルルがそのことを知っているのは、いったいどういうことだろうか。ノースは、自分が、思った以上に危ない橋の上にいることを知った。

「ベルル、あなたも隅に置けないわね。あんな若い女の子にまで手を出しているの？」

「何ですか？」

「だって、衣装庫の女官と知り合いなんでしょう？」

「は？ あ、いいえ。いや、知り合いなのは間違いないですけど…
…でも、大隊長のことを聞いたのは彼女からじゃありません。シ

ユコーチス副騎士団長が言ったんです。こんなときにドレスなんか見に行くなんて、だから女ってやつは！　って」

ノースは苦笑した。シュコーチス副騎士団長は、以前からそういうところがあり、すぐに女だからどうのと口にする。だから、深く考えての発言ではないのだろう。しかし、彼が知っているということは、騎士団長を始め、大隊長全員が知っていると見て良い。晩餐会の襲撃の余韻冷めやらず、王宮内はまだ過敏になっているということだろうか。犯人はすでに捕まっているというのに――

考え込んでしまったノースに、ベルルが近づき耳打ちをした。

「大隊長。正直な話、この件にはあまり首をつっこまない方が良いでしょうよ」

「何なの？」

「不穏な噂が流れているんです」

「？」

「晩餐会以降、女王陛下は偽者にすり替わったんじゃないかって……」

「何ですって？」

ノースの剣幕を、ベルルは彼女が怒り出したのだと勘違いした。慌てて両手を胸の前で広げ、大きく左右に振る。

「ち、違いますよ。噂です。あくまでも噂」

「ベルル・イモコフ参謀。噂でも、そんなことは口にするものではないわ」

「はい……」ベルルは、しゅんとうなだれた。こういうところが女心をくすぐるのだろう、とノースは思った。

「忠告は感謝するわ」言いながらノースは、手元の紙に走り書きをする。「それよりも、これを調べておいてくれない？」

メモを受け取ったベルルは、一瞬呆然としたものの、「わかりました」と請け合った。

（こうなると、慎重すぎるってことはないわね）

四日分の書類に目を通しながら、ノースはひとり、そう考えた。

ファル・ベルネの町 1

ララサララとマーリーの話を、ノースはまじめに聞いてくれた。
その上で言った。

「君達の話はわかった。それがすべて本当だったとしたら、君達は王宮へ戻るべきではないわ」

「何故だ？」ララサララが食ってかかる。

「わからない？ あなたは命を狙われたのよ。彼のお母さんが助けてくれた。それを無駄にするつもりなの？ 誰に、何故狙われたのかわかっているの？」

ララサララは口をつぐんだ。わからないのではなく、口にするべきかどうか悩んでいることが、その表情から読み取れた。

「そうね。私が、あなたを女王陛下だと認めていない以上、あなたは口にするべきではない。それで正解よ。その慎重さで、王宮へ戻るのも待って頂戴」

「しかし、余は国王だ。逃げてばかりでは王は務まらぬ」

「死んでしまっても、王様は務まらないわ」

ノースとララサララの身長差は頭二つ半。精一杯背伸びをして睨み付けるララサララに、ノースは諭すように言った。

「明日、私は王宮へ戻る。そこで、王宮の状況を確認してくるから。状況がはっきりしていた方が、対策も立てやすいでしょう？」

「……」

「ララ、ここはブリューチス大隊長に任せよう」

マーリーもそう言い、ついにララサララは折れた。

よくよく話をしてみれば、三十代半ばで騎士団大隊長をはいめい拝命するだけあって、ノースは、さばけた人柄の、面倒見の良い女性であった。大隊長になったのは割と最近で、ララサララと面識を持つ機会がほとんどなかったようだ。ララサララは、ノースが顔を覚えていないことに腹を立てていたが、騎士団大隊長に気付かなかったララ

サララも、人のことは言えなかった。

そんなノースだったが、朝は、父親の葬式の翌日だったことと、二日酔いが重なって、希^{まれ}に見る不機嫌だったらしい。話が終わるころには、マーリーはすっかりノースを信頼し、王国の騎士云々（うんぬん）と詰め寄ったことを改めて謝罪した。

そして一晩明けた今日、サララとマーリーは、ノースの家で待つことになった。昨日のことがあるので外に出ることも躊躇^{ためら}われる。ふたりは、ノースの父親の書斎で、本を読んで過ごすことにした。

「すごい量だね」マーリーが何度目かの感嘆の声を上げた。

部屋には、所狭しと本や資料が積み上げられている。ノースはそれらにまったく興味がならしく、いずれ、王宮の書庫にでも寄付するつもりだと言った。

ふたりは思い思いの本を手に取り、ページをめくっていた。

「すごいや。これはマーテル王国の頃の本だよ」

「マーリー。そなた、すごいすいばかりだな」

サララは苦笑しつつ顔を上げ、マーリーが手にした本を見た。マーテル王国は、現デル・マタル王国の前身だ。へマーテル王国年代記 第六代テルメノ王時代」と題されたその本は、随分と傷んでいた。

「マーテル王国の六代目ということは、百年くらい前だ。アップ・ファル・サル王国はへ始まりの母」ババカタラ王の頃だな」

サララはそう言うのと、マーリーから本を受け取り、ぱらぱらとめくった。本は葉を挟んであるページを開いて止まった。

「？」

葉には、ノースの父親が書いたらしい走り書きがあった。

「消された歴史……？」

「どういうこと？」

脇からサララの手元を覗き込んだマーリーが訊く。サララは軽く手でマーリーを制すると、ページに目を走らせた。そして、

問題の箇所を読み終えると、ゆっくりと本を閉じた。

「アップ・ファル・サル王国は、建国以来、一度も他国の侵攻を許したことがない。それが、守護魔法の伝説が生まれる素地にもなっている、といわれている」

「伝説の守護魔法は王家の秘伝じゃないの？」

「少なくとも、私は知らない」

アップ・ファル・サル王宮には巨大な龍青玉があり、それを使って、王国を守る強力な魔法がかけられている。それは、マリーーでも聞いたことがある伝説だった。

「それで？」

「この〈マール王国年代記〉によれば、今から百年ほど前に、マール王国の軍勢がアップ・ファル・サル王国に侵攻して、あわや王宮を陥落かんらくさせるところまでいったというのだ。マール王テルメノ率いる軍勢は二万。防戦一方となったアップ・ファル・サル王国軍は、幾多いくたの魔法武器をもってしても、マール王国軍を押し返すことができず、陥落は時間の問題と思われた。そのとき、初代アップ・ファル・サル王ババカタラ・バラオは何らかの大魔法を行った。その結果、マール王国軍は戦意を喪失、あと一步というところで、不可思議な撤退を余儀なくされた……」

「その話、伝説の守護魔法とぴったり合うと思うけど」

「しかし、私は聞いたことがないぞ」

ララサラは本をマリーーに押しつけると、本と資料の山を漁り始めた。

「何を探しているの？」

「研究者だったのなら、どこかに研究帳があるはずだ」

はたしてそれは、使い古された机の抽出の中で見つかった。ララサラはそれを手に取ると、もどかしそうにページをめくった。マリーーは静かにその様子を眺めていた。

どれほどそうしていただろうか。研究帳を読み終えたララサラは、研究帳を手にしたまま固まってしまった。

「何が書いてあったの？」マリーが訊いた。

「アップ・ファル・サル王国百二十年の歴史を揺るがしかねないことだ」

マリーは、言葉を返すことができなかった。

ファル・ベルネの町 2

「ガキどもいるか？」

扉を開けて入ってきたのは、昨日、墓地でふたりを捕まえた男だった。短く刈った茶色の髪には、白いものが随分混じっている。年の頃は五十代後半くらいだろうか。

「そんなに警戒するな。ノースに頼まれてな。俺の名前はギール・ブリューチス。ノースの叔父だ。昼飯を食わせてやるから付いてきな」

それだけ言うと、ギールはさっさと家を出た。マリーが意を決して立ち上がり、ララサラもその後続いた。

歩くこと一刻（約十五分）、ふたりが連れてこられた家は、ノースの家より一回り大きかった。そこはギールの家で、魔法細工の工房を兼ねていた。マーテチス州では、自宅兼魔法細工工房は多いのだという。

「散らかってるけどな、入れ」

ギールにそう言われて、ふたりは恐る恐る家の中に足を踏み入れた。

「女王様———！」

突然声が上がった。ララサラがびっくりして立ちつくしたところに、小さな女の子が飛び込んできた。ララサラは、思わず女の子を抱き止めた。

「馬鹿だなあ、アリー。そいつ偽者だぜ」

女の子の後ろから、十二〜三歳の男の子が現れた。

「違うもん。こんなに綺麗な洋服着てるんだから、本物の女王様だもん。ね？」

アリーと呼ばれた女の子は、ドレスにしがみついたままララサラを見上げた。

「……ああ、もちろんだ」

「ばっかじゃねえの？ 女王様がこんな所にいるわけないじゃん」
「馬鹿って言った方がばかー。ギニー兄のばかー」

頬を膨らませて睨み合うアリーとギニー。ギールは何も言わずに、部屋の中央にある食卓に腰を下ろした。ララサララとマーリーは顔を見合わせる。そのとき、奥の部屋から声がした。

「アリー。お客様になんですか、お行儀の悪い。びっくりしてるじゃない。それからギニー。女王陛下の件はノース義姉^{ねえ}さんが確認するって言ってるんだから、憶測で人を罵^{ののし}るんじゃないやありません」

良い匂いのする鍋を手に現れた母親は、兄妹を平等に窘^{たしな}めると、せっついて食卓につかせた。

「さあ、ふたりもいらっしゃい。たいしたものはないけれど、たくさん食べて頂戴ね」

「ありがとうございます」マーリーが礼を言って席に着いた。

「……感謝する」ララサララも続いた。

「まあ、本当に女王陛下みたいなの言いね。ねえ、お義父^{とう}さん。なんてお呼びすれば良いかしら？」

突然話を振られて、ギールは返事に困ったようだった。

「ララで構わない」とララサララ。

「そう？ あら、自己紹介がまだだったわね。私はユーナ。次男のギニーと、長女のアリーよ」

ユーナに促されて、ギニーとアニーはぺこんと頭を下げた。ララサララとマーリーも改めて名乗った。その間にも、食卓には続々と人が集まってくる。ギールの妻テナ。ギールの息子で、ユーナの夫ガタナ。ユーナとガタナの長男ユジー。ララサララとマーリーを含めると、総勢九人が食卓を囲んだ。

「さ、お祈りを捧げて食べよう」

ギールがそう言って、胸の前で手を握り目を閉じた。ブリューチス家の面々も目を閉じる。ララサララとマーリーも彼らに倣^{なら}った。

「山と原と海の精霊よ、何れは御許^{いずこ}へ返^{かへ}さんことを約し、溢れし力のひとかけらを、今はただ我ら糧^{かて}となさん。一日とひととき、我ら

にご加護を恵みたまえ」

「恵みたまえ」

全員が唱和して祈りが終わった。

ララサララとマーリーが目を開けたときには、すでに大騒ぎの昼食が幕を開けていた。

「さ、ふたり共早く食べないとなくなっちゃうわ。うちの子達は食いしん坊だから」

ふたりは食卓中央の籠に山積みになっているパンに手を伸ばした。ユーナが椀にスープを装^{よそ}ってくれる。ふたりがそれを受け取っている脇で、ギニーが早々にお代わりを要求していた。

「君は旅の歌い手なんだって？」

ガタナがマーリーに声をかけた。ガタナはギールによく似ている。歳はノースと同じくらいだろうか。

「はい」

「後で何か歌ってくれないか？」

「わかりました」

「あー、私も歌う」アリーが聞きつけて手を挙げた。

「これ、アリー。お行儀の悪い。食べ終わってからにしろさい」とユーナ。

「えー？」

「こちらの工房では、どんなものを作っているんですか？」

「〈灯石〉だよ。ブリューチス家は、代々魔法細工職人の家系なんだ」ガタナが言う。

「へえ。後で工房を見せてもらっても良いですか？」

「もちろんだとも」

「あれ？ でも、魔法細工職人の家系って……」

「ノースのことか？」とギール。

「大隊長のお父さんも、職人ではなさそうでしたね？」

「兄貴は職人になるのが嫌で騎士団に入ったんだ。親がそんなだから、娘もあんなだ。まあそれでも、男四人女一人の兄弟で、ボーズ

兄貴を除く男は皆魔法細工職人になった。姉貴だって職人の嫁になったんだから、職人の家系と言って間違いないさ」

「お義兄さんのお葬式にいのとき、お義姉さん元氣ねえそうだったわね」

テナがそう言い、食卓はしばし身内の話で盛り上がった。子供達は黙々と食べている。ララサララとマリーは、食事をしながら、黙ってそれを聞いていた。

「……ていないのか？」

食事が一段落し、会話も途切れた合間に、ララサララが何ごとか呟いた。

「ララ？」マリーが訊き返す。

「指名手配が出ていないのか？ と訊いたのだ」

和やかだった食卓の空気が、一瞬で固くなった。

「どういうこと？」

「私とそなたは、お尋ね者になっているはずだ。あの晩餐会から今日で四日目。もう国中に手配が行き渡っていてもおかしくない」

「ララ！」

マリーが身を乗り出そうとしたところを、ギールが手で制した。

「？」

「お嬢さん。そりゃあ、俺らがあんた達を足止めしてる、とでも言いたいのか？」

「違うのか？」

ギールはため息をつく。「ごちそうさん」と言っただけ席を立った。それを合図に、他の面々も食卓を立つ。マリーがひとり、「ごめんなさい」と繰り返し、頭を下げ続けた。

ファル・ベルネの町 3

「魔法具の仕組みを始めて知ったよ」

工房の隅の椅子で膝を抱えていたララサララに、マリーリーが言った。

工房の中では、ギール・ガタナ・ユジの三人が作業をしている。マリーリーは約束通り、ガタナに工房での作業を見せてもらっていたのだ。もつとも、歌を歌う約束はうやむやになってしまったが。

龍青玉の魔力を発動する方法はいくつかある。一つは、魔術師による詠唱。もう一つは、魔術師の血文字。そして最後が、金属による文字だ。

血文字による魔力の発動は許容範囲が大きい。使用する言語による制限がないのだ。それは、すぐに人の意思が込められるからだといわれている。

一方で、金属による発動は条件が厳しい。魔力の発動及び方向付けに、人が普段使っている文字は使えない。魔法具の開発の歴史は、この〈魔法文字〉と呼ばれる記号探しの歴史といえる。魔法具には、魔法文字の刻まれた二枚以上の金属が仕込まれることが多い。この金属を動かして、それぞれに刻まれた魔法文字があるべき順序に並べると、魔力が発動するという仕組みだ。なお、魔法文字の連なりは魔法式と呼ばれる。

例えば〈灯石〉では、金属の輪が二重に龍青玉の周りにはめられている。使わないときは二つの輪をずらしておく。これを重ねると魔法式が完成し、魔力が発動するようになっていた。

なお、剣や盾などの魔法武具の類には可動式の魔法式は組み込まれない。武具などは、外的要因があった場合に――例えば、敵の剣に触れたときなど――魔力が発動するような魔法式が、完成形で刻み込まれているのだった。

ブリューチス家の工房では、〈灯石〉の金属の輪を作っていた。

一つ一つ、手で魔法文字を刻印していく。

「あれは失礼だよララ。いくら君が王様でもね」 マーリーはララサ
ララの脇に腰を下ろした。「みんないい人だよ」

「……」

「君の国民なんでしょ？」

ララサララは、かっとなってマーリーを睨み付けた。しかし、怒
りは続かず、ため息と共に視線を落とした。

「ねえ？ ララは何で王宮に戻ろうとしているの？」

「王だからな」

「本当に？」

「どういう意味だ？」

「……建前じゃなくてさ」

ララサララは顔を上げてマーリーを見た。翡翠色ひすいいろの瞳がララサラ
ラを見つめていた。

「僕がララと一緒に来たのは、前にも言ったけど、母さんのためだ。
ララをひとりで行かせられないって言ったけど、本当は逆。僕がひ
とりでは王宮まで行けない」

「私を出しにしていると？」

「うん……そうかな」

ララサララは目を逸らした。工房内で作業をする三人を、見ると
もなく眺める。

「私は……何でこんなことになったのか、納得がいかない」

「うん」

「リルが心配だ」

「うん」

「王宮以外に帰る所がない。王宮に居て、始めて私は王たりえる。
今回それを思い知った」

「……」

ララサララは次々と言葉を重ねて、しかし、マーリーの顔を見る
ことができなかった。

工房内に、金属に魔法文字を刻む音だけが響く。

そして――結局、ララサララは認めざるを得なかった。

「……そうじゃないな。勢いだ。一昨日、そなたに「王宮に戻る」と言ったのは、わけのわからない怒りに突き動かされた勢いだ。見栄……とも言えるかな。王としての見栄だ。ただ、そなたが付いてきたから、後に引けなくなった。それだけだ」

ララサララは自分の手を見た。

「だから……本当は王宮に戻るのが怖い。戻るべきなのはわかってる。でも、戻ってどうするのか、なんて考えていない。大隊長が王宮の状況を確認して、いずれ戻ってくる。王宮に戻るときが近づくほど、戻るのが怖くなってくる。だから……だから、さっきは……」

「戻らなくて良い口実？」

ララサララはむすつとして横を向いた。
くすつとマリーが笑う。

「何なのだ！」

ララサララは勢いよく首を巡らせて、マリーを睨み付けた。

「ごめん。でも、同じだからほっとした」

「なに？」

「大隊長さんにさ、丸投げして任せちゃえるならって……」

ララサララは呆氣にとられた顔をした。

「そなた……さっき、母君のためだと」

「ごめん。嘘じゃないけど、怖じ気付いていたのも事実」

「……卑怯者」

「だから、ごめんて」

ララサララは拳を振り上げて、しかし、ぶつと吹き出すと、腹を抱えて笑い始めた。マリーもつられて笑い出す。工房の三人が、何事か、と手を止めてふたりを見つめていた。

ファル・ベルネの町 4

「さっきは、すまなかった。せつかくの好意を踏みにじるようなことを言った」

ララサラはギールに向かって頭を下げた。

「ああ……。わかってくれりゃあ、それで良い」

ギールは関心がなさそうに言った。ふたりは、ガタナとユジーにも頭を下げると、工房を後にした。

「あら、お帰りになるの？」

工房を出たところで、ユーナが声をかけてきた。

「はい。大隊長さんの家で待たせてもらう約束ですので」

「そう」

ユーナは無理に引き留めようとはしなかった。

家の外に出ると、ララサラがマーリーに言った。

「マーリーのお陰で、急ぎ王宮に戻る気が失せた」

「お陰って……」

「父王に会いにいろいろと思う」

「お父さんに？」

「ここは、マーテチス州のファル・ベルネの町だ。リルが調べてくれた離宮が近いはずだ。大隊長も、そんなにすぐには戻らないだろう」

「近いつてどのくらい？」

「馬で数時すうとき（三〜四時間程度）というところだ……。歩いてても一日あればなんとかなるかな」

「……馬か」

「馬が必要なの？」

ふたりが驚いて振り向くと、そこにはグニーとアリーが立っていた。ふたりは、ユーナから頼まれたと言って、小さな包みを差し出した。中はパンのようだった。

「馬が必要なの？」ギニーが繰り返した。

「どこかで借りられるかな？」とマーリー。

「家では持ってない。でも、何とかかなると思うよ」

「本当？」

ギニーとアニーは顔を見合わせると、にやりと笑った。

「本当。その代わり、お願いがあるんだ」

伝説の守護魔法に関する一考察

ボーズ・ブリューチス記す

——そもそも、この本へマーテル王国年代記 第六代テルメノ王時代〉は、若かりし頃、デル・マタル王国の旅路で見つけたものだった。骨董市で他の本に混ざっていたものを見つけて、私は掘り出し物だと思い、とても興奮した。早速値段を尋ねると、私がいかに目を輝かせていたからだろう、随分とふっかけられてしまった。

それはともかく、当然、買った当時はこの本を良く読んだものだが、いつしか他の本や資料に埋もれてしまった。仕事を引退して、好きな歴史の研究をして余生を送ろうと決めたとき、資料の整理をしていて、久しぶりに相見^{あいまみ}えたのである。

五十年ぶりに読んでみて、私はあることに気が付いた。それは、マーテル王国暦五十八年、アップ・ファル・サル王国暦では十九年にあたる章についてだ。章題は《アップ・ファル・サル侵攻》となっている。大まかな内容は以下の通りだ。

《テルメノ王が即位して五年、国内の政治が安定したことを機に、王は国外に目を向けた。まず目を付けたのが、新興国アップ・ファル・サル王国だった。豊富な龍青玉と、精緻な魔法産業に将来性を感じたテルメノ王は、二万の軍勢を率いてアップ・ファル・サル王国へと侵攻した。アップ・ファル・サル王国軍は戦闘経験が少なく、数も少なかったため、マーテル王国軍を押し止めることができなかった。マーテル王国軍は、海からの上陸に加えて、広大な〈黒の森〉の上を越えて、魔術師による奇襲攻撃も行った。魔法で王国を発展させてきた自負のあるアップ・ファル・サル王国軍は、自分達が魔法で遅れを取ったことで総崩れになった。テルメノ王率いるマーテル王国軍は、上陸からわずか十日で、王都ファル・バラオまで侵攻した。

そして、残るはアップ・ファル・サル王宮を落とすのみ、というところまで攻め立てた。万策尽きたかに見えた初代アップ・ファル・サル王ババカタラ・バラオは、命を賭して何らかの大魔法を行った。アップ・ファル・サル王宮攻略戦三日目の払暁、王宮を中心に、広範囲で光の粒が振るのが認められた。その直後、マーテル王国軍は戦意を喪失。王宮を陥落させる寸前で、不可解な撤退をすることとなった。それ以後、テルメノ王がアップ・ファル・サル王国に攻め入ることとはなかったという――》

これは、アップ・ファル・サル王国の歴史にはない事件である。

不思議なことは、五十年前にもこの章を読んだはずなのに、そのときはなにも感じなかったということだ。しかも、私ばかりではない。今では珍しくなった本ではあるが、おそらく王宮の書庫には蔵書されている。この章を読んだことのある人間は、ひとりやふたりではないはずなのだ。もちろん、年代記なるものが、時の権力者によって捏造ねつぞうされることがあるのは承知している。《アップ・ファル・サル侵攻》が、捏造の可能性も当然ある。しかし、今まで多くの歴史研究家と話をしたが、この件に触れた者がひとりもないというのは、一体どういうことだろうか。私が歳を取ったために、些細なことが気になってしまっているだけなのだろうか。

アップ・ファル・サル王国は、建国以来百二十年間、一度も他国の侵攻を許してはいない。この、王国の矜持きようちともいうべき前提が、間違っているとしたら――

私は、この件を調べてみようと思う。余命幾ばくもない老いぼれの戯言である。この研究で、迷惑めいわくを被る人間もないだろうと思う――

――友人のパウバナ大司教と話をする機会があった。魔法について、常々疑問に思っていたことを、率すぐに訊いてみた。

まず、龍青玉は、どの位の期間魔力を保てるのか。それは、魔法

の種類と龍青玉の大きさによるという。例えば、〈灯石〉のように、使っているときに常に魔力を発しているものは、当然早く魔力が尽きるといふ。なるほど、小石大の龍青玉を使った〈灯石〉は、毎晩使っていると、一年ほどで使えなくなってしまう。一方で、一瞬だけ魔力が発動すれば良いものは、長く使えるという。〈穴なしの鍵〉や〈点火石^{てんかいし}〉などは、何十年も使うことができるというわけだ。

それでは、百年もの間魔法を効かせ続けるには、どれほどの大きさの龍青玉が必要なのか。「伝説の守護魔法かね？」と笑いつつ、パウバナは答えてくれた。実は、龍青玉は、人の拳大より大きいものは見つからないのだという。だから、「これは半分以上想像なのだが」と前置きをした上で、「人間ひとり分ぐらいの大きさは必要ではないか」とのことだった。加えて、龍青玉を使わない魔法は、百年もの間効力を維持することは常識的には無理だ、とも付け加えた。

人の手で龍青玉は作れないのか、とも訊いてみた。「できるのならやっている」と即座に答えが返ってきた。龍青玉に魔力を再充填することは可能なのだという。しかし、現在では、それができる魔術師は、随分と数が少なくなってしまったらしい――

――結局、確証を得るだけの証拠を集めることはできなかった。

最近では体調も良くない。私の人生も終わりに近づいているようだ。

証拠は見つけられなかったが、私の結論は記しておきたいと思う。伝説の守護魔法は存在している。

初代アップ・ファル・サル王ババカタラ・バラオがかけたのは、〈アップ・ファル・サル王国の平和〉という魔法だったのではないか。

アップ・ファル・サル王国の魔法産業で禁忌とされているものがある。それは〈操心魔法^{そうしんまほう}〉と呼ばれる、人の心に作用する魔法だ。〈幻覚魔法^{げんかくまほう}〉や〈傀儡魔法^{かいらいまほう}〉はともかく、〈癒心魔法^{ゆしんまほう}〉も禁忌というのは、よくよく考えると解せない。しかし、すでに王国が魔法にか

かっているならば、それらの魔法を上乗せして使うことはできない。加えて、〈操心魔法の禁忌〉自体も、守護魔法の一部だとしたら——そうすると、いくつかの疑問に説明がつく。

それほど軍隊が強いわけでもない小さなアップ・ファル・サル王国が、百二十年も他国の侵攻を受けていないという点。実際には、百年前に一度侵攻を受けた。しかし、そのときに行われた〈アップ・ファル・サル王国の平和〉という守護魔法によって、王国は守られた。それ以後、周辺国までも影響を広げたその魔法は、百年もの間、王国への侵攻という目を摘み取り続けた。しかし、魔法の効果には範囲がある。魔法の範囲を超えた外で、〈マーテル王国年代記〉のような書物が書かれ、それが守護魔法の伝説を作り上げた。

一方で、王国民にも影響を及ぼした守護魔法は、侵攻があったという事実自体を忘れさせ、認識させず、疑問を持たせず、現バラオ王家への逆心をも抑え続けた。もしかしたら、王家の人間でさえ、もはや守護魔法の事実は知らないのかもしれない。

ところで、それほどの魔法を実現した龍青玉とは、いったいどんなものだろうか。知られていないだけで、巨大な龍青玉が発見されたのだろうか。それとも、人の手で巨大な龍青玉を作りだす乙術が、かつては存在していたのだろうか。初代国王ババカタラ・バラオは、〈マーテル王国年代記〉によるところの〈アップ・ファル・サル侵攻〉以降、王位を退いている。その時期の一致は、もしかしたら、王本人が魔法の寄り代となった証なのか。魔法について門外漢の私の想像は、奇抜すぎるだろうか。

五十年前の私が気が付かなかったことに、今の私が気が付いた。この事実は、守護魔法が弱まってきている事実を示してはいないだろうか。そうだとすれば、今後、この国は試練に立たされる。魔法の守護は失われ、民はそれに気付かず、周辺国はこの国に目を向け始めるだろう。国の内外で、幾多の思惑が渦巻き、王国は動乱の中に投げ込まれるだろう。それに立ち向かうのは、先に即位した女王であり、私の娘であり、この国の民達なのだ。私は先に退場する。

願わくば、彼女らに精霊のご加護があらんことを――

女達 1

アブ・ファル・サル王宮には、小さな庭がいくつも点在している。前パパマスカ王は庭好きで、高い階でも、場所を見つけては庭を作っていた。王宮三階の外れ、小さな露台に作られたこの庭も、そんな中の一つだった。頭ほどもある蔓性植物の垣が囲み、卓が一脚と椅子が二脚で一杯になってしまうこの庭は、まるで恋人達のために設えられたようだった。垣の間からは王都が一望できる。誰が考えたのか、庭への扉には〈使用中〉の札まで用意されていた。ノースは、この通称〈恋人の庭〉に入ったことはなかったが、ベルルはさぞよく使っていることだろうと思われた。

ノースが庭に足を踏み入れると、すでにベルルが待っていた。ご丁寧に茶器まで用意している。

「待たせたわね」

「いえいえ。この時間が楽しいんです」ベルルは立ち上がると、椅子を引いてノースを促した。

「ありがとうございます。でも、誤解は早めに解いておきたいのだけれど」
そう言うノースを、ベルルは手で制した。

「お茶、いかがですか？」

「いただくわ」

ベルルは慣れた手つきで茶を入れると、ノースに差し出した。ふたりはしばし、薫り高い茶を楽しんだ。

「あのね、ベルル・イモコフ参謀……」

「わかっています。ちょっと恋人気分を味わいたかっただけです。手渡されたメモに、〈恋人の庭〉で待つ……、なんて書いてあったら、期待しない方がもったいないじゃないですか。まあ、面倒ごとの代償ってことで」

「私みたいな年増でそんな気分を味わわなくても、若い娘がたくさんいるでしょう」

「でも、彼女らはノース・ブリューチスではありません」

ああ、この男は根っからの女たらしなのだ、とノースは思った。やはり女であるノースとしては悪い気はしない。しかし、今はそんな遊びを楽しんでいる場合ではなかった。ノースが軽く睨み付けると、ベルルは小さく肩をすくめ、表情を引き締めた。

「噂のことですか？」

「ええ。詳しく教えて頂戴」

大隊長室で外から盗み聞きされる心配は少ない。しかし、参謀はベルルひとりではないし、いつ誰が訪ねてくるかもわからないため、用心に超したことはない。そんなわけで、ノースは、大隊長室での会話を強引に打ち切り、わざわざメモを使って、ベルルとここで落ち合ったのだった。

「例の晩餐会の翌日です。女王陛下近辺の女官が総入れ替えになりました。お付きの女官が、なんでも例の魔術師と通じていたとかで、念には念を入れてってことらしいです。陛下の御髪役おぐしやくだった娘と知り合いなんです、入れ替えに際して、引き継ぎもなかったっていうんですよ」

「でも、それだけで偽者ってことになってしまうの？」

「いえ。その程度なら、ありそうな話です。その娘は、今度は掃除役に回されて、随分とばやいていまして……。あ、それはともかくです。掃除役は、日に一度、王宮内のごみをまとめて分別するんです。生ごみは腐葉土にしたり、家畜の餌にする。紙や糸くずなどは燃料と混ぜて焼却する。で、その娘が仕分けをしているところに、新任の御髪役がごみを持ってきた。陛下の御髪を梳かして結えば、当然抜け毛がごみになるわけです。その娘が言うには、新任が捨てに来た抜け毛は、陛下の御髪とは違ったっていうんですよ」

「その女官の見間違いないじゃない？ そんなことがわかるものなの？」

「毎日自分が梳いて結っていた髪ですからね。本人は、間違いない別物だ、色は似ているけれども、と言うんですよ。そうすると、食べる量が違うとか、足音が違うとか、色々な話があちこちから出て

きます。陛下のお役を降ろされた女官達は、ただでさえ理由がわからずにいらいらしているんですから。一度気になり始めたら、際限がないって言うか」

この男には、いったい何人の女官友達がいるのだろうか、とノースは余計なことを考えた。

「陛下は、王宮朝議には出られているの？」

「ええ。でも、ひとことも発言はされていないようです」

「そう」

ノースは、すでに王宮にいる女王は偽者だと確信していた。ファル・ベルネのララが本物の女王陛下に間違いなさそうだ。——とすると、黒幕は誰なのだろうか？ 女官の人事を思いのままにできるということは、それなりの地位にいる人物が関わっているということだ。ララには心当たりがあるようだったが、昨日はそのことは語らなかった。まだ、ノースを敵か味方か判断しかねていたのだろうし、ノースもそれで良いと言った。しかし、こうなると、訊いておくべきだったと悔やまれる——

まず考えられるのは、魔術師を捕らえた大司教サン・パウバナだ。そして、今や我が物顔で王宮朝議を仕切っている三諸侯。彼らの共犯という線もあるかもしれない。偽者の女王を意のままに操り、王権を恣にする——

しかし、とノースは考えた。晩餐会の席から女王が逃げてしまうというのは、予定に入っていたのだろうか。始めからそうなる筋書きだったのなら、偽者を用意しておいた、ということだ。しかし、ララの話聞く限り、王宮から逃れたのは偶然だったように思われる。とすると、本来の筋書きはどんなものだったのだろうか。

ララ達の話からは、筋書きから外れたと推測されるのは二点。リルが女王の身代わりになったことと、女王が王宮から逃げてしまったこと。そこを修正すると——女王は魔術師の襲撃を受けて怪我をし、魔術師は捕らえられる——となるのか。

それとも、女王を殺すつもりだったのだろうか。殺して偽者とす

り替える。聞けば、身代わりになったリルは、脇腹を〈魔法弩〉で打ち抜かれたという。たしか、女王とリルの身長差は頭一つぐらいだったか。そうすると、暗闇で王冠を頼りに〈魔法弩〉を打ったとして、女王本人の場合は足を射貫くのがせいぜいとなる。確実に殺すなら、王冠の真下を射貫くのが正解だ。つまり、殺すつもりはなかった――

「ねえ、晩餐会の翌日には、もう陛下のお出ましはあったの？」

「はい。たしか、午後に一度公務をこなされていたと思います」

早すぎる。晩餐会の後に偽者を用意したとしたら、半日は早すぎる。まるで、用意してあったとした思えない。もっと前から、女王と入れ替える機会を狙っていたのか――

「陛下が即位なされる前に、急病になられたことがあったわよね」

「ああ、ありましたね」

どこかの部屋で倒れ、しばらく発見されなかったとの話だった。

「ご病氣の話と、ララサラ女王即位の勅令が出たのは、どちらが先だったかしら」

「勅令です」

「即答ね」

「ええ。陛下のご病氣の原因が、突然の即位に悩まれたせいではないかって、そういう噂がありましたからね。食事が喉を通らず、それで倒れたってことでした。ほら、〈望みは常闇である〉発言もあったわけで、しんぴようせい信憑性ありましたよ」

あの、パパマスカ王退位からララサラ女王の即位までの期間は、王宮内も慌ただしかった。騎士団への通達も突然で、ノースは随分と驚いた。そういえば、退位の式も行われなかった。大事な時期にもかかわらず、女官達に休暇が出されるという不可解な話もあった。ララサラが倒れたのはその期間で、女官がいなかったために発見が遅れた、と後から問題になった――

今にして思えば、ララサラの急病についても腑に落ちない点がある。食事が喉を通らないほど悩んだとしたら、自室の寝台に伏せ

っていそうなものだ。そんな、まるで何かから隠れるみたいなことをなぜしたのか――

――隠れる？ まさか、本当に何かから隠れたのか？

女王の即位で一番得をしたのは誰だろうか。大司教よりも、実質王権に手が届いた三諸侯の方が益は大きいように思える。彼らが何らかの説得工作をして、パパスカ王を退位せしめた。そして、女王を祭り上げた――。王子は都合良く留学中で、継承権の問題は、勅令を出すことで解決した。そう仮定すると、あの勅令は三諸侯がでっち上げた可能性が強くなってくる。そして、彼らが万全を期すならば、女王も、ララサラ本人より偽者のほうが都合が良い――だから、ララサラは襲われ、どこかに隠れた。出るに出られず、倒れてしまった。たしか、発見したのはリルだったはずだ。三諸侯にしてみれば、勅令を出し、さあこれから偽者を投入、という最悪の時期に本物が現れてしまった。結果として、偽者は使えず、ララサラ本人が王位に就くことになった。しかし今回、都合良くララサラが王宮から消えたので、改めて偽者を玉座ぎよくざに据えた――

我ながら想像力豊かだな、とノースはため息をついた。

「あの頃は、もう一つ、変な噂がありましたね」

「？」

「カカパラス王子殿下が行方不明という噂です」

「何それ？ 知らないわ」

「王子殿下が行方不明だから、しかたなくララサラ殿下は王位に就いたっていうんです」

「それも女官達の噂？」

「ええ。でも、騎士団内にも流れていましたよ。ほんの一時ですが。結果的には流言りゅうげんだったわけですけど」

「仮によ」ノースは言葉を選ぶ。「王子殿下が陛下に謁見されて、陛下が偽者だったら気が付かれるかしら」

「気付かれるでしょう。兄妹ですから。お怒りになるんじゃないですか。暴き立てて、玉座から引きずり落とすとか……」

企んだのが三諸侯だとしても、そんなにすぐ発覚するようなことをするだろうか。女官達が噂をするくらいだ。兄である王子が気付かないはずはない。しかし、王子の突然の帰国にも、三諸侯達が慌てている様子は見受けられない——ということとは、王子と三諸侯が共犯なのだろうか。

「王位継承権の問題もあったわね」

「でも、勅令ですから」

「それでもよ」

王子が継承権を盾に王位を望み、仮に大司教や三諸侯がそれを支持した場合は、ラサラは王位を退かざるを得なくなるかもしれない。黒幕が王子本人ならば、三諸侯の今の落ち着きようも説明がつく。しかし、こんなに回りくどいことをしなくても、カカパラス王子は王位に就くことができたはずではないか。いったん、ラサラを女王にしなければならぬ理由など、どこにあるのだろうか

「何かが……、何かが足りないわ」

「何です？」

ノースは苦虫をかみつぶしたような顔をした。カカパラス王子黒幕説は、まるっきりノースの憶測に過ぎない。内容が内容だけに、簡単に確かめることもできない。

——いや、例の怪我をした女官は何かを知っているのではないだろうか。女王陛下付き女官のリル。彼女は、王冠をつけて女王の身代わりになったという。王冠に手を出すなど、本来許されるものではない。彼女がそれを知らないはずはなく、押してしたからには、何かを知っていた可能性がある——彼女に話を聞くことができれば

「ベルル。悪いけれど、つきあってももらえる？　ちょっと危ない橋を渡りたいのよ」

「大隊長と参謀は一蓮托生いちれんたくしょうです。でも、理由くらいは聞かせてもらえるんですよね？」

「女王陛下のためよ。騎士団は、そのためにあるのだもの」

王子殿下のためではないわ、という言葉をノースは飲み込んだ。

継承権がどうであろうと、ララサラは精霊の秘儀ひぎを受けた正式な
アップ・ファル・サル王国の女王なのだ。

ベルルは躊躇せずに頷いた。

女達 2

「何なのこれは！」

ノースは机に書類を叩き付けた。場所は騎士団第八大隊長室。部屋に居るのは、ノースと参謀のベルルだけだ。

つい先ほど、騎士団大隊長八人全員が騎士団長室に集められた。その場には、副騎士団長ふたりと、三諸侯までが顔を揃えていた。用件は、カカパラス王子帰国に際しての警護計画であった。

「今回、王都までの道程は四日。ご宿泊は各州城。三諸侯各閣下にご協力いただき、州軍の全面協力を仰ぐこととなった」

白い口ひげを蓄えた騎士団長メニューエ・バンドスが、必要以上に重々しく言った。

「騎士団は州軍と協力して各州城の警護を行う。第一、第三大隊は آپセン州城。第四、第五大隊はマーテチス州城。第六、第七大隊はサリユル州城だ。第二大隊はアップ・ファル・サル王宮の警護。第八大隊は王都での通常業務を行ってもらう。なお、王子殿下のお車には〈玉輪ぎよくりん〉を使う」

〈玉輪〉は魔力を動力とした車で、本来は王専用のものだ。豪華な装飾が施された非常に贅沢な乗り物で、王の行幸以外には、国賓か、祭りくらいにしか使われない。

「何か質問は？」というバンドス騎士団長の言葉に、ノースが手を挙げた。

「何だ。ブリューチス大隊長」

「この四日間、王都を一大隊のみとするのはいかがなものでしょうか。通常通り三大隊が無理としても、せめて二大隊……」

「ブリューチス大隊長」と発言を遮ったのは、シュコーチス副騎士団長だった。「ひとりでは心細いかね？ これだから女は」

「性別の問題ではありません」

「これは決定事項なのだよ。長くて五日だ。第八大隊は大変だろう

が頑張ってくれ」とバンドス騎士団長が言う。

集まった面々の中で、最も年少、しかも在任期間の短いノースは、「わかりました」としか言うことができなかった。だから、部屋に戻ってきて荒れているのだった。

「しかしこれは、たいした警護計画ですね」と、ノースが机に叩き付けた書類に目を通したベルルが言った。「警護というより……」

「これはもう帰国祝賀行進よ」

曲がりなりにも女王がいる王都を手薄にして、王子の帰国祝賀行進をやるというのか。〈玉輪〉を引っ張り出し、しかも、ご丁寧にサリユル州まで通って。王都ファル・バラオは、マーテチス州とサリユル州の間にある。アップ・タリルの港からなら、〈玉輪〉で直進すれば、二日とかからずに到着するはずなのだ。もちろん、サリユル州をわざわざ通る必要などない。三つの州城すべてに宿泊し、三諸侯全員の顔を立てるという目的以外には――

「とにかく、至急中隊長と小隊長を集めて頂戴。一大隊での王都内警護の計画を立てるわ」

「はい」

「それから、例の件も急いだ方が良さそうね」

ベルルは頷くと、慌ただしく大隊長室を飛び出していった。

女達 3

「ルカシア第五大隊長とジャジャフ第七大隊長、あと、ミューカス第二大隊長が、今回の警護計画に不満を漏らしていたようです」

「私を入れて半分か」

ノースとベルルは、王宮の裏庭へと続く道を歩いていた。空は朱に染まっている。もう一刻（約三十分）もすれば宵闇が訪れるだろう。

「ところで、変に探って何か感づかれなかったでしょうね」

「参謀同士の愚痴のこぼし合いは日常茶飯事ですから」

「私のことも愚痴っているわけね」

「そんな。滅相もない」

「そう？」

ふたりは裏庭へ出ると、口を閉ざして歩を緩めた。勝手口、そして裏門を通り過ぎる。目指す地下牢の入り口がすぐそこまで迫っていた。ちょうど、地下牢の警備を交替したばかりらしい分隊が、ノース達に敬礼をして通り過ぎた。

「いい頃合いですね」

「ええ」

ふたりは迷わず地下牢の入り口へと歩み寄った。衛兵がふたり立っていた。

「第八大隊参謀のベルル・イモコフです。分隊長はいらっしゃいますか？」

「はい。中におります」

「火急の用件です。お取り次ぎ願いたい」

衛兵のひとりがかしこまって返事をし、中に入った。そして、すぐに扉が開かれる。ノースとベルルは扉をくぐった。

「第一一二分隊長のカーナフです」

若い分隊長が敬礼をしていた。二十歳そこそこといったところか。

まだ、任命されて日が浅いと思われた。

「カーナフ分隊長。緊急の用件です。王子殿下のご帰国に併せて警護を強化します。万全を期すために、ブリューチス大隊長が、投獄されている女官を取り調べることにしました。お手伝いいただけますか？」

「はい……。しかし、自分は何も連絡を受けておりませんが……」

「先ほど決まったことです。おっつけ連絡も入ると思います」

そして、ノースが後を引き継ぐ。

「カーナフ分隊長。物事は迅速に行わなくてはなりません。ここでの一刻が、先々の数時に匹敵することもあります」

若いカーナフにとっては、大隊長たるノースは雲の上の人だ。そんなノースに見つめられて、カーナフは耳まで真っ赤になった。

「しょ、承知いたしました」

「ありがとうございます」ノースは取って置き笑顔でカーナフに微笑んだ。

「で、では、自分をご案内を……」

「それには及びません。すぐに済みますから」

ノースはそう言うと、カーナフの手から鍵束を受け取った。さりげなく、相手の手に触れることを忘れない。ベルルはすでに燭台を手にかけていた。

敬礼したままのカーナフ達を残し、ふたりは地下牢へと続く階段へ足を踏み入れた。

「大人の女の魅力ですね」

「余計なことは言わない」

「はい」

そしてふたりは、階段を抜け、地下牢への扉を開いた。

女達 4

浮き沈みする意識の一端が、彼女を呼ぶ声を捕らえた。

あまり聞き覚えのない声だったが、しきりに彼女の名を呼んでいる。

リルは苦勞して、薄く目を開いた。

蠟燭の灯りに揺らめく、燃えるような赤い髪が眼前にあった。

「リルさん。私がわかる？」

リルは微かに頷いた。

顔は覚えている。たしか騎士団の――しかし、名前が出てこない。
「私は、第八大隊のノース・ブリューチスよ。あなたに訊きたいことがあるの」

今更なんだろうか。

「落ちて聞いて聞いて頂戴。ララとマリーは無事よ。この意味がわかる？」

ララ――

懐かしい名前。

大好きな名前。

守りたい名前。

「姫様が……？」

「そうよ。ふたりとも私の家にいるわ。そして、王宮には偽者がいる。あなた、何かを知っているんでしょう？」

「……首謀者は、王子殿下と父です……」

「父って、あなたのお父さんのこと？」

リルは苦しそうに頷いた。それから、ぽつりぽつりと言葉を紡いだ。

事件は、三ヶ月前のパパマスカ王退位から始まっていたこと。カパラス王子が、三諸侯と大司教の裏で糸を引いていること。リルの父ブリストア子爵が王子に味方していること。そして、王子が何

らかの目的で、わざわざラサラを女王にしようと企んだこと。
ルーリーを伝令として送り込んできて、襲撃事件を演出したこと――
「じゃあ、陛下をなぜ女王にしたかったのかは、あなたも知らない
のね？」

「はい……」

「魔術師のことも？」

リルはゆっくりと首を振った。

「……でも、おそらく、姫様の即位と、ルーリー様の件は繋がって
います……」

リルは、体が急激に沈んでいくのを感じた。

「リル？」

リルは最後の力を振り絞ると、自分の髪を束ねていたリボンほどを解
き、それをノースに差し出した。

「姫様を……」

ノースがリルの手を握った。「お願いします」という言葉は、も
う声にならなかった。――でも、伝わった。

ブリュース大隊長は騎士団唯一の女性大隊長で、信頼もおける。
彼女に助けられたのなら大丈夫だ。彼女になら、姫様を任せられる。
リルは、自分が闇に抱かれていることに気が付いた。暖かく、柔
らかく、闇が包んでくれている。「余の望みは常闇である」と言っ
た姫様の言葉が、今ならわかる。

――姫様。

そして、リルの意識は、常闇の中へと溶けていった。とこやみ

女達 5

ノースの腕の中で、リルは息を引き取った。

「く……」

ノースは唇をかみ、ゆっくりとリルの体を横たえた。乱れた黒髪を綺麗に整えてやる。そして、片膝をつくと、深く頭を垂れた。

「もっと早く何とかできていれば……。ごめんなさい」

そう呟き、ノースは立ち上がった。今は遺体を置いていくしかない。後ろ髪を引かれつつ、ノースはリルの牢から出た。そして、振り向き、左斜め前の魔術師ルーリーの牢を開いた。龍青玉の光が地下牢に溢れる。

ルーリーが目を開いて顔を上げた。ノースはルーリーに近づくと、耳元でささやいた。

「ララとマーリーは生きている。この意味、わかるわね？」

ルーリーはしばらくノースを見つめていたが、やがて静かに頷いた。ノースがルーリーの猿轡を外す。ふうっ、とルーリーが大きな息を吐いた。そして、まず訊いた。

「リルさんは？」

「さっき、息を引き取ったわ」

「なんてこと……」ルーリーは唇をかんだ。

「申し訳ないけれど、今はあなたを出してあげることとはできないの。でも信じて欲しい。私は、本物の女王陛下のための騎士よ。陛下を守るために情報が欲しいの」

「本物……つまり、偽者が？」

「ええ。首謀者はカカパラス王子殿下と、リルの父親の子爵という話ね？」

「はい。デル・マタル王国のブリスター子爵は、各国に娘を送り込んで、情報を集めていたようです。私は、そんな子爵の伝令としてこの国に来ました。もっとも、リルさんは、子爵のためというより、

ララサララ陛下のために情報を集めていたようですが……」

「そのようね」

「それを王子殿下と子爵に利用されました。私は、子爵とは古い知り合いで、子供の頃のリルさんも知っていました。陛下とリルさんが危ないから、是非手助けをして欲しいと頼まれたんです……。それで、リルさんと連絡を取るために王宮へと近づきました。陛下が晩餐会へご招待してくださったのは偶然ですが、結果として、大司教達に格好の舞台を提供することになってしまいました……」

「あなたもリルも、陛下が襲われるとわかっていたような対応だったそうね？」

「私とリルさんが情報を交換したのは、晩餐会の直前でした。大司教が〈魔法封じ〉を解くと言い出したとき、私は嵌められたことにようやく気が付いたんです。大司教は私を嵌めるために、陛下を傷つける可能性があります。最終的に私のせいにすれば良いのですから。」

時間がありませんでしたが、なんとしても陛下はお守りしなければと……。結果的に、私は逃げる機会を逸しました。私は陛下とリルさんの味方になろうと思っていましたから、あのときは、陛下を人質に取られたも同然でした。それに、魔術師の力は随分と長い間封印していましたし……」

「つまり、あの晩餐会での茶番劇は、陛下を亡き者にしようとしたわけではなく、あなたを捕らえるためのものだったということね？」

「……おそらく」

「でも、その理由はなに？　そこまでしてあなたを捕らえたがる理由は？」

「私は、〈金翠の一族〉と呼ばれる魔術師の家系に生まれました。遙か西の地で生まれました。でも、一族にこんな歌が伝わっています」

「歌？」ノースが少し驚いた顔をする。

ルーリーは、小さな声で口ずさんだ。

——我ら生まれし故郷は　はるか東の風の原
昨日と今日と明日とを　貫き止めた風の原
我ら犯せし大罪は　はるか東の白き山
想って待ちたる人も無き　悲しき家の白き山
我ら求めん安らぎは　はるか東の青き海
母の広げた翼が紡ぐ　終わりのなき夢の青き海

「それって……」

「はい。おそらく、我が一族の出自は、このアップ・ファル・サル
の地なのでしょう。そして、何らかの理由で西へと渡った。後悔と罪
の意識を胸に抱いて。私達の祖先は、何か取り返しのつかないよう
なことを、この地で行ってしまった……。それはおそらく、この王
国の、伝説の守護魔法にかかわることだと思っています」

「そこまでわかっていて、なんでこの国に来たの？」

ノースの語気が荒くなる。ルーリーは悲しそうに首を振った。

「ごめんなさい。気が付いたのは最近なんです。王国に入ってから
こっち、ずっと違和感がありました。その正体によりやく思い当た
りました。この国は、もう百年もの間、魔法にかかり続けているん
です」

「どういうこと？」

「これは〈操心魔法〉です。でも、ほとんど切れかかっている。だ
から気が付きました。効力が完全なら、たぶん私でもわからなかつ
たでしょう。守護魔法の正体は、おそらく、王国への疑念や、野心
や、敵愾心てきがいしんを押さえ込むものだと思います。微かですが〈金翠の一
族〉の魔力を感じます。そして、アップ・ファル・サル王国の百年以
上の繁栄……。おそらく、魔法を実行したのは初代王と〈金翠の一
族〉の先祖……」

「……ねえ、その魔法は、敵国にばかり効果があるわけではないわ
よね？」

「はい。効果は人を選びません」

だから、この国の王宮は穏やかで、政変の一つも起きなかったということか。こんな、吹けば飛ぶような小さな国土の国が、百二十年もの歴史を刻んでくることができた。しかし、守護魔法が綻びだし、カカパラス王子が野心を抱いた。――野心？ そのままでも王位に就くことが決まっていたのに、どこに不満があるというのだろうか。王子はおそらく、何かで守護魔法のことを知ったのだ。とすると、次は何を考えるだろうか。今度は、自分に都合の良い守護魔法をかけ直そうとしやしないだろうか。

「あなたを利用すれば、守護魔法をかけ直すことができるかしら」
ルーリーは項垂れた。

「わかりません。もう、我ら一族には伝わっていないんです」

でも、この王宮に伝わっている可能性はある。百年以上も続く魔法など、ノースの想像を遙かに超えている。魔術師の命を一つや二つ犠牲にする、と言われても驚かない。もしかしたら、王の命も必要なのではないだろうか。王も精霊の秘儀を受けて精霊と契約した存在だ。ノースは詳しくないのだが、魔術師が契約する〈魔力の精霊〉と、王が契約する〈土地の精霊〉は少し違うのだという。

〈王としての精霊の秘儀〉を受けたララサラと、稀代の魔術師ルーリー。そのふたりを犠牲にすれば、百年続く魔法が行えるということだろうか。でも、ララサラが必要で、パパマスカ王では駄目な理由はなんだろう――

「それは、おそらく女王が必要だということだと思います」

「王と女王では違うの？」

「昔から、強力な魔術師は圧倒的に女性なんです。それは、子供を産む能力と関係しているといわれていますが……詳しくはわかっていません。魔術師がそうなのですから、王をして魔法を成そうとするなら、女性の方が圧倒的に向いている可能性があります」

「魔力は子宮に宿るってこと？」

「推測ですが……」

女王が必要だから、わざわざララサラを王位に就けた――。百年前に守護魔法を行ったというババカタラ・バラオは――女王だった。

「大隊長、そろそろやばいですよ。切り上げてください」
ベルルが入り口でそわそわし始めた。

「息子さんに伝言はない？」

「黙っていてごめんなさい、と……」

ノースは、ルーリーの猿轡を少し緩めに付け直した。そして、「陛下のことは任せて頂戴」と言い、牢を閉じた。

リルの遺体のある牢に後ろ髪を引かれた。しかしノースは、振り切るようにして地下牢を後にした。

父と娘 1

小気味よい蹄ひづめの音が響いている。

心地よい風が髪を洗う。

流れ行く緑多き風景と、背後から時折視界をかすめる金色の髪との対比が、ララサララから現実感を奪っていく。

こうして馬に跨またがり、マリーと共に風を感じていると、あの晩餐会の夜を思い出す。煌きらめく王宮の広間。響くルーリーの歌声。飛び散るリルの血。砕けた硝子。そして――

「……ララ、ララ！ 馬に乗って寝たら危ないよ」

いつの間にか馬は並足になり、マリーがララサラの顔を覗き込んでいた。どうやら、うとうとしてしまったらしい。

「一休みしようか」

マリーは道の先を指さした。小さな川が、陽光にキラキラと輝いていた。

ギニーとアリーのお願い、それは服を交換することだった。

四人はノースの家へと戻ると、着ている服を交換した。もつとも、体型がまったく違うので、ギニーとマリー、ララサラとアリー、と上手く交換はできなかった。

ギニーの服はララサラにちょうど良かった。マリーはギニーの服もアリーの服も着れず、ノースの家を物色して、ノースの父親のものと思われる服を借りた。ギニーはマリーの服を着た。丈が少し長かったが、袖と裾をまくれれば大丈夫だった。そしてアリーは、嬉しそうにドレスを抱きしめた。

男の子の服を着たララサラは随分と印象が違った。腰まである褐色の髪を両脇で結び、その束をさらに縛っている。動きやすくなつたのが嬉しいのか、その場で何度もぴよんぴよんと跳ねた。

服の交換が済むと、ギニーはふたりを町外れの〈馬屋〉へと案内した。

馬はこの土地でも重要な交通手段だ。街道沿いには、有料で馬を貸す〈馬屋〉や、馬車の業者が軒を連ねていることが多い。その〈馬屋〉では、通りに面した庭に馬が引き出され、客と主人らしき男が話をしていた。庭の奥には厩うまやがあり、何頭もの馬が繋がれている。

「頼めば借りられるのか？」とララサララ。

「違うよ。勝手に乗るんだ」ギニーが言った。

「なに？」

「僕が厩うまやになるから、ふたりは馬に飛び乗って」

「……」

ララサララとマーリーは顔を見合わせた。よりによって馬泥棒とは。

「でも、戻ってくるんだし……借りるだけなら大丈夫かな」

「マーリー。そなた本当に屁理屈が上手いな」

「そう？」

「まあ、失敗したら歩いて行けば良いだけだがな」

ララサララの今の格好ならば、ドレスより数段歩きやすいだろう。

「いい？　じゃあ、あれでいくよ」

ギニーが指さした先で、〈馬屋〉の主人が二頭の馬を引いていた。ギニーの先導で厩うまやの裏から主人に近づいた三人は、頃合いを見計らった。そして、ギニーが庭に飛び出し、主人に向かって駆け寄った。

「こら！　なんだ？」

「ねえ、おじさん。遊あそぼうよ！」

「ブリューチスさんとこのガキじゃないか。儂は忙しいんだ。あっちへいけ！」

主人が気を逸らしたのを見て、ララサララとマーリーも飛び出した。〈馬屋〉の馬には鞍くらと鐙あぶみが付いている。裸馬に飛び乗るのは容

易ではないが、鐙があるなら話は別だ。マーリーは軽々と鐙に足をかけると、一頭の馬の鞍上に飛び乗った。そして、ララサラを引っ張り上げ、馬の横腹を蹴り上げた。

「なんだ？」

〈馬屋〉の主人が驚いて声を上げた。それでも手綱を離さないところはさすがだが、ふたりが飛び乗った馬だけでなく、隣の馬も驚いて暴れだしてしまっただけから、そうそう持っていられるものでもない。ふたりが振り落とされないように耐えるうちに、手綱が主人の手から離れた。マーリーはすかさずそれを握ると、暴れる馬を制御して駆けだした。

「馬泥棒！」背後から主人の怒声が聞こえる。

「返しますから！」とマーリーは叫んだ。

「行ってらっしゃーい」ギニーが手を振る。

主人の怒声も、ギニーの声も、あつという間に彼方へと遠ざかっていった。

父と娘 2

「ブリューチス大隊長の父君の考えが正しいかどうかはわからぬ」
ララサラは、ノースの家から持ってきてしまった研究帳を眺めながら言った。

「しかし、思い当たることはあるのだ。だから、父王に訊かねばならぬ」

「思い当たること？」

湿った風が吹き抜けていった。ファル・ベルネの町を出てから約半日が過ぎていた。目的地はもうすぐそこまで迫っている。

ララサラとマリーは、川縁^{かわべり}で馬を休ませていた。

「歌だ。王家に伝わる子守歌がある」

ララサラは息を吸い、声を出そうとした。しかし、歌うことはできなかった。

「……すまん。あれ以来、歌えないんだ……」

大理石の柱に隠れ続け、やっと助け出されたら、今度は女王になれと言われた。それ以来、ララサラの歌う心は挫けてしまった。

マリーはゆっくりと首を振った。「無理しなくていいよ」

「歌詞はこうだ。《百年の国を築こう／母の腕に抱かれて／千年の国を築こう／龍の翼に包まれて／永久^{とわ}の国を築こう／誰にも気付かれないように》」

「誰にも気付かれないように？」

「この歌は父王が歌ってくれた。そして、人前では歌ってはいけないと言われた。子供ができたとき、そっと歌って聴かせるだけだ。……これは、伝説の守護魔法のことなんじゃないかと思う」

「《龍の翼》って龍青玉のことかな」

「ああ。転じて魔法のことをさしているのだろう。《誰にも気付かれないように》は、他の国がアップ・ファル・サル王国に目を付けないように、ということだ。この研究帳でいうところのへアップ・ファ

ル・サル王国の平和だ」

「じゃあ、《母の腕》は王様？ 父ではないの？」

「初代ババカタラ・バラオ王は女王だ」

見上げる空が少し赤味を帯び始めている。夕暮れが近づいていた。
「……ねえ、今回の事件は、あの大司教が犯人なの？」 マーリーが訊いた。

「言ってなかったか？ おそらく、首謀者は兄上だ」

「お兄さん？」

「ああ。兄上が、三諸侯と大司教を使って、父王に退位を勧めたのだろう。父王の考えはわからぬが、退位を受け入れた。あまり政治に興味のなかった父王だ。もしかしたら、兄上が後を継ぐと聞いて、よろこんで退位したのかもしれない。しかし、なぜか私を王位に就けた。私の即位は父王の勅命だったのだが、私はそれを父王からすぐに聞いたわけではない。尚書令と三諸侯から説明されたただけだ。加えて、兄上は行方不明だと言われた。私しか王位を継ぐものがおらぬ、とな」

ララサラは自嘲気味に笑った。

「最初は、三諸侯の謀かと思っはかりごとた。彼奴らが私を陥れ、傀儡にするためだとな。だから、父王も兄上も殺されたのかと。しかし、リルによれば、父王は生きているという。そして、兄上も生きているというではないか。その上、首謀者ときた……」

「ちよつと待って。リルさんて、お付きの女官の人でしょう？」

「彼女はデル・マタル王国の没落貴族の娘だ。私のために、無理を言っきやつて調べ物をしてもらった」

「デル・マタル王国の没落貴族？」

「たしか、ブリストア子爵家と言ったかな」

マーリーは記憶を辿った。どこかで、その名前は聞いたことがある。

「アニシャ東方三国を旅して、最後に入ったのがデル・マタル王国だったんだ。首都マテンに滞在中に母さんに使者が来て、一晩出か

けていったことがある。たしか、それがブリストア子爵だったような……」

「そうであろうな。兄上と子爵が共犯ならば、そなたの母君と一緒に会ったはずだ。そして、リルへの伝令役を頼んだのだろう。リルに連絡を取ろうと思ったなら王宮に近づく必要がある。そして、母君が兄上に会ったと知れば、当然、私が話を聞きたがる。それを大司教達は事前に承知していたのだ。晩餐会は想定していなかっただろうが、どこかで魔術師の襲撃を演出する予定だったのだろう」

「何のために？」

「……わからぬ。しかし、私を女王に仕立てたことと、なにか関係があるのかもしれない」

「ねえ、言いにくいけど……、リルさんが……」

「言いたいことはわかる。でも、私はリルを信じている」

沈黙が訪れた。マーリーはルーリーのことを想い、リルのことを思い、事件のことを考えた。なぜ、ララのお兄さんは、彼女を王にしたかったのか――

「ねえ、ふと思ったんだけど、初代の王様以外に女王様っていたの？」

「いや、いない。へ始まりの母、ババカタラ・バラオ以降は皆男だ……」

ララサララの言葉が小さくなり、尻すぼみに消えた。

「王様って、他の王族の人と何か違うの？」

半分呆然として、ララサララは虚空を見つめている。右手を握りしめ、強くあごに押し当てた。

「……王は精霊大聖堂で精霊の秘儀を受ける。それはつまり、精霊と契約するということだ」

「魔術師になるってこと？」

「王の契約と、魔術師の契約は少し違う……」

「でも、王冠をかぶっただけでは、本当の王様にはなれないってことだね」

ララサラは聞いていなかった。虚空を見つめる目が、次第に鋭さを増していく。そして、その口から小さな^{つぶや}呟きが漏れた。

「百年ぶりの女王に、稀代の魔術師……、兄上、まさか、再現するつもりなのか……」

ララサラの褐色の髪が、夕日を浴びて燃えるように輝いていた。

父と娘 3

そこは、生け垣に囲まれた小さな館だった。正門と裏門には衛兵が立っている。ララサラとマーリーは、少し離れた木の陰から館の様子を伺っていた。

「あの衛兵は州軍の兵士だ。おそらく、私の顔は知らぬだろう」

「そう。じゃあ、僕があの方のふたりの気を引きつけるから、その隙に中に入ってよ」

「しかし、鍵がかかっておろう」

門には立派な錠前がかかり、ちょっとやそつとでは壊れそうになり。飛び越えるの当然無理だ。

辺りはすでに宵闇に包まれ始めていた。

「たぶん、ちよつと待てばチャンスが来るよ。いつでも出られるように準備をしておいて」

「マーリーはどうするのだ？」

「馬のところで待ってる」

そうこうしているうちに完全に日が暮れた。すると、見計らったように館の扉が開き、中から正門へと灯りが近づいて来た。

「じゃあ、上手くやってね」マーリーはララサラに耳打ちすると、門に向かって駆けだした。

「おい！」

マーリーは門に近付くと、あらかじめ予め拾っておいた小石を衛兵めがけて投げつけた。石は見事に衛兵のひとりの顔面を捕らえた。

「誰だ！」

「やーい！ へぼ兵隊！ ここまでおいで！」

子供のような挑発をするマーリー。怒った衛兵ふたりがマーリー目指して突進した。

「このガキ！ ひっぱたいてやる！」

「鬼さんこーちら！ やーい！」

ギニーと同じではないか、と半分呆れながら、ララサララはそつと門へ近づいた。しかし、やはり鍵がかかっている。ララサララは門脇の生け垣にもたれて様子を伺った。すると――

「おや、兵隊さんはどうしましたか？」と声がした。

どうやら、館の執事が〈灯石〉を入れた燈とうを持ってきたようだった。声の主は燈を地面に置くと、鍵を出して門を開けた。錠前を外すとき、執事の手元が微かに青白く光ったことで、使われているのが〈穴なしの鍵〉だと知れた。執事は門の外に出ると、辺りの様子を伺った。

ララサララは執事の視線が逸れた一瞬をついて、門の中へと滑り込んだ。窓から漏れる明かりを避けつつ、館の入り口へと向かう。背後からは、マリーーを見失った衛兵と、執事との会話が聞こえてくる。気付かれた様子はない。

ララサララは、執事が開けたままにしてあった扉から館の中へと踏み込んだ。

父と娘 4

「何をしに来た？」

父の第一声はそれだった。

館の中に入ったララサラは、前王妃付き女官のベールに、早々に見つかってしまった。ベールは、ララサラが生まれる前から王妃付きだった。だから、どんな格好をしていても、ララサラを見間違えることなどなかった。大仰に驚き駆け寄ったベールは、ララサラの手を引いて父と母——つまり前王と前王妃のいる居間へと案内した。前王夫妻は、夕食前のひとときを、窓を開け放った居間で庭を眺めながら涼んでいるところだった。

「お前は今この国の王であろう。こんな所で何をしている」

くつろいだ部屋着を着て、椅子の上で本を広げていた前王パパスカ・バラオは、立ち上がりもせずと言った。王位在任中は常に整えられていた暗褐色の髪が、無造作に広がっている。威厳を保つために蓄えられていた口髭がない。そして、細面ほそおもての柔和な顔に、ララサラへの侮蔑ともいふべき表情が浮かんでいた。

「父王……？」

ベールの変わらぬ態度に、両親への思慕が急激に募っていたララサラは、まさに冷や水を浴びせられたかのように血の気が引いた。「ララ。まあ、どうしたの？ その格好は」

ララサラの母、前王妃メメチュア・バラオが言った。メメチュアは、灰褐色の長い髪を一本の三つ編みにしている。こちらも、王宮に居たときはきっちり結び上げられていたものだ。元々パパスカ王に付き従うだけの王妃だった彼女は、パパスカの態度に怯え、ララサラに対する言葉も腰が引けている。

「大方、身をやつして王宮を抜け出してきたのだろう。そんな態度でよく王が務まる」

パパスカの言葉はあくまでも辛辣しんらつだった。

「あなた。いくらなんでもその仰りおっしゃようは……」さすがに見かねたメメチュアが言う。

ララサララは父の態度が理解できず、呆然と立ちつくした。

「なんだ？ 王に飽あいたか？ ララ。自分の兄から無理矢理奪った王位に飽いたのか？」

「私が……奪った？」

「勅令を偽装してまで、そんなに王になりたかったのか？」

「な……」

なんと言ふことだろう——ララサララは頭が真っ白になった。

「どうした。何か言うことはないのか？」

パパマスカは深いため息をつく、手元に広げていた本を閉じた。そして立ち上がり、自分の娘、ララサララへと歩み寄った。

「カカが一刻も早く王位に就きたいと言ってきた。余に、二十年も王をやったのだから後は悠々自適の生活をしてくれ、と言ってくれた。だから余は王位を退いた。なのに、余の退位を知ったとたん、ララ、お前は老師を傷つけ、王宮内に隠れ、あろうことか三諸侯を脅して、自分が王になるという勅令を出させたというではないか！」

こんな——こんな人だっただろうか。パパマスカ・バラオという父は——王は。考えてみれば、父王と政治の話などしたことはなかった。為政者いせいしやとしての父王を、ララサララはまるっきり知らない。

ララサララは、血が昇った頭が少しずつ醒めていくのを感じていた。たしかに、あまり政治に興味のない父であった。いつも詩や歌を作り、庭をいじっていた。兄のカカパラスを可愛がり、ララサララも可愛がってくれた——

しかし——

ノースの父親が言うところの〈アップ・ファル・サル王国の平和〉という守護魔法——その仮説が正しいとすると、王家の一家団いっかだんらん欒も魔法のお陰だったとでもいうのだろうか？

バラオ王家の家庭内不和は、当然王国の安寧あんねいに影を落とす。親は子を可愛がり、子は親を慕うという、当たり前だと思っていたこと

が実は当たり前ではなかったのだろうか？ 隣国の野心が摘み取られるのと同じように、政変の種が摘み取られるのと同じように、王家内の不和の種も摘み取られてきたのだろうか。

〈マーテル王国年代記〉の記述を疑う理由はララサララにはなく、アップ・ファル・サル王国の現状を見れば、守護魔法の存在も信じなくなる。そして、その上で、魔法の効力が切れてしまったことも信じないわけにはいかない――魔法が健在ならば、王たるララサララに、例えパパマスカといえども、こんなにも辛く当たったりするはずがない――

「……それは、どなたがされたお話ですか？」

ララサララは絞り出すようにして訊いた。

「平原侯だ」

「父王は、そのお話を信じられたのか？」

「平原侯が余に嘘をつく理由がない」

――これも、守護魔法がもたらした結果か。

ここ百年、アップ・ファル・サル王宮では、諸侯が、官吏が、国中が王に忠誠を誓い、王も王族もそれを疑うことがなかった。パパマスカにとってはそれが当たり前で、臣下を疑うということを知らない。だから、平原侯のお粗末な嘘もあっさりと信じてしまった。

王国への野心や、逆心や、敵愾心のような、守護魔法が抑え込んできたものは、魔法が切れれば噴出してくる。それらは、人が普通に持っているものだからだ。しかし、パパマスカ王の純粹さは、守護魔法が生んだ結果ではあっても、魔法そのものの効力ではない。守護魔法が切れても変わるものではないのだ。よく考えればこれは想像できた事態だったはずだ。パパマスカ王が、カカパラス王子が王になると信じて退位したのではないか、とマーリーに語ったのは他ならぬララサララ自身だ。

それでもララサララは、一縷の望みいちるを持って言葉を繋いだ。

「私は、師と共に賊に襲われました。隠れて、倒れて、気が付いたら三諸侯に王になれと言われました。兄上が行方知れずだからと」

「……」

「信じてくだらないんですか？」

「……」

「父王は三諸侯に謀られたのです。何と言われたのかは知りませんが、仮に兄上に王位を譲るにしても、即日退位などあり得ないではないですか！ 兄上はまだ国外にいるというのに」

「ならば、平原侯達はお前と共犯なのだな」

「は？」

「結局、お前が王になっているではないか。カカも帰ってこない」
ララサラは絶句し、唇をかんだ。今まで、疑念や猜疑心を持っていたことがないかのように、パパマスカは感情を持て余し、その言葉は破綻していた。

しかし、魔法に心を抑えつけられてきたというなら、ララサラだって同じはずだ。あの、大理石の虚^{うつろ}に隠れた五日間以前に、父王を疑ったりしたことがあっただろうか。もちろん、ララサラは感情豊かな子供だった。喜び、怒り、哀しみ、楽しんで成長した。しかし、王国や王に疑問など持ったことはなかったように思う。

——でも、確信はないが、あの五日間の暗闇が、ララサラの何かを変えた。命が消えるようなぎりぎりの状態で、それまで魔法の影響を受けていた心の状態がいったん零^{ゼロ}になった。人として、感情がいったん零になったのではないだろうか——

「父王、本日は伺いたいことがあって参りました」

ララサラは感情を抑え込み、静かな口調で言った。父王との議論は、このまま続けても平行線だろう。ならば、今日ここまで来た目的を果たさねばならない。

「王から王へと、代々伝えられてきたことがあるはずです」

いくら守護魔法が王族を含めた国中の人間に作用したとしても、王家に何も伝わっていないというのは考えづらい。現に子守歌が伝わっている。本来、王から王へと伝えられる何かが、ララサラには伝えられていない。きっと、あるはずなのだ——

「〈王の宝物庫〉のことか？」

「宝物庫？」

「王宮には王しか知らぬ宝物庫がある。そのことではないのか？
ことさらに、パパマスカの言葉に侮蔑が滲む。

「宝など……」と言いかけて、しかしララサラは言葉を切った。
とある可能性に思い当たったからだ。特大の龍青玉は宝物といえないだろうか。

「父王は、そこに入られたことがあるのですか？」

「ああ。龍青玉で造った像が安置されている。あれこそ、アップ・ファル・サル王国の宝だ」

「〈始まりの母〉ババカタラ王……」

「そうだ」

「父王は、それを見て何も感じられなかったのですか？」

「何をだ？」

「……いえ。それで、それはどこに？」

「……」

パパマスカは口をつぐんだ。兄から王位を奪った妹には、それを教えたくないのだろうか。ララサラは手を強く握りしめて、そして言った。

「余は、第九代アップ・ファル・サル国王ララサラ・バラオだ。前王よ。これは、王国百二十年の歴史を揺るがすことなのだ。その場所はどこだ？」

ララサラが小さな体から放った気迫に、パパマスカは押された。よろめくように一歩後ろへと下がり、そして呟いた。

「玉座の裏だ……」

アップ・ファル・サル王宮の玉座は、〈玉座の間〉に設えられていしつらる。あの裏に扉などあっただろうか。

「鍵は、子守歌だ」そこまで言うのと、パパマスカは椅子に腰を下ろし、庭に目をやってしまった。もう、ララサラと話す気はなくなっていたようだった。

ララサララは母に近づいた。

「ララ」

「母様、ご不自由はありませんか？」

「ええ。女官も衛兵も、皆一緒に来てくれましたから。本当は、あなたも一緒のつもりだったのだけれど……」

メメチュアはララサララを抱きしめた。ララサララは抱き返そうとして、しかし、思い止まった。ここでしがみついてしまったら、挫^{くじ}けてしまいそうだった。ララサララはゆっくりと母から体を離し、深くお辞儀をした。そして、踵を返すと、振り切るようにして部屋を飛び出した。背後から母の声がしたが、あえてそれは聞かないようにした。

父と娘 5

居間から飛び出したララサララに、ベールが声をかけた。

「姫様。老師に会って行かれませ」

「師が……生きているのか？」

ベールは頷くと、ララサララを一つの部屋へと導いた。小さな部屋の中には本がたくさん積まれ、中央の机にひとりの老人が座っていた。

「師……」ララサララが声をかけると、老人が振り向いた。白髪白髭の顔が、ララサララを認めると、くしゃっと笑み崩れた。

「姫様。いや、今は陛下とお呼びするべきか」

ララサララは、師の座っている椅子が龍青玉の魔法でわずかに浮いていることに気が付いた。師はその椅子を器用に操り、ララサララに近づいてきた。

「……足を？」

「年甲斐もなく立ち回りなどをしたら、この有様ですわ」

それは間違いなく、ララサララを守ったときに負った傷だろう。

ララサララはすくと両膝をつくと、師の顔を見上げた。

「もう、お会いできないと思っていました」

「うむ。姫様には申し訳ないことをした。あのとき、姫様を隠し扉にお入れした後、私は老体に鞭を打って兵に飛びかかった。しかし、あの兵に襲う気はなかったようなのです」

ララサララの目が驚きに見開かれた。

「三諸侯が、王子殿下の親書を携えて、パパマスカ王陛下に退位を勧めに来ていた。穩便にことは進行了のですが、諸侯に付いてきたかの若い兵は、刀を抜いていないと不安だったらしい。あの部屋に我々がいることも知らず、ただ見回っていただけだったようなのですよ」

師の白い眉が悲しそうにひそめられた。

「すべて、私の早とちりでした。しかも、兵が驚いて突き出した刀で、私は負傷してしまった。姫様が発見されなかったらと考えると、生きた心地がしませんでした……」

師の声は以前と変わらず優しかった。ララサラは、師を責めようという気は起きなかった。

「師も……、私が兄上から玉座を篡奪したと……そう、お考えですか」

「姫様。姫様がそんなことをなされるはずがありませんか？ 何かがお有りになったのでしょうか？」

言い募^もりたいことがたくさんあった。すべてをここで師にぶちまけて、そして膝を抱えてしまいたい——しかし、それらは、先ほど両親の前で押し込めたばかりのものだ。

ララサラは、ノースの父親の研究帳を師に差し出した。師はそれにゆっくりと目を通した。

「ヘマーテル王国年代記 第六代テルメノ王時代」は、私も読んだことがあります。《アップ・ファル・サル侵攻》の下りに、何の感想も抱きませんでした。しかし……言われてみれば、たしかにおかしいですね」

「では……」

師は研究帳をララサラに返すと、首を振った。

「わかりません。私には、この推論が正しいとも、誤っているとも判断することはできません。ただ、この人物を感じたのと同じことを、ヘマーテル王国年代記 第六代テルメノ王時代」について感じる、とそれだけです。そして、私の知る限り、この王国の王宮は他のどの国よりも穏やかです」

師はアップ・ファル・サル王国の生まれだ。しかし、若い頃は数々の国を旅して回り、この国の王宮に仕えるようになったのは、随分と歳を重ねてからだ、とララサラに話してくれたことがあった。政変や革命などに遭遇したこともあったという。

「しかし、姫様。私の結論など、さして重要ではないでしょう。姫

様の顔には、もう結論は出ていると書いてありますよ」

ララサララは頷いた。

「父王を廃し、私を王位に就けたのは、兄上と大司教、そして、三諸侯でしょう。彼らは、この研究帳の中身と同じようなことを考えて、再び女王を使えば人々の心を操る魔法が行えると思っている……。私も、それ自体は可能だと思います。でも、それは、やってはいけない。……もちろん、私も犠牲にななりたくない」

ララサララは師の目を見つめ、小さな声で訊いた。

「師よ。私は大理石の虚の中で考えました。そして、あなたにお訊きしたいと思っていました……。王族とは、毅然とした生き方こそ問われるのですか？ それとも、血を残してこそその王族なのですか？ あのとき、刀を持った兵に、私は毅然とした態度で正対するべきだったではありませんか？」

師は、まじまじとララサララの顔を覗き込んだ。

「姫様……、毅然とした生き方というのは、死を選ぶことではありませんぞ」

「？」

「そして、血を残すということは、逃げ回ることでもありません」

「……」

「これからも、誰かが何かの犠牲になることもあるでしょう。そんなときに問われる毅然とした態度とは、危険の矢面に立つことではなく、犠牲となった者の遺志を無駄にしないことです。そこで止まらず、前へと進むことです。血を残すということは、国を永らえさせていくということです。王ひとりが生き残っても、民が絶えては血が残せたとは言えません。しかし、王が死んだら、国は荒れ、少なからず民もまた死ぬ。王の血は民の血であり、民の血は王の血なのです」

師は諭すように語る。

「姫様が悩まれたことは無駄ではありません。守護魔法が真実ならば、今までの王は、そんな問いかけすら、してこなかったことにな

るのですから。王族とは何かと問い続けることは、ひいては王国とはなにか、民とは何かに繋がります。そして、私の知る限り、それに正解はありません。姫様が、ご自分で、ご自分の答えを見つけないのです」

「自分の答え……」

「土地が違えば、国が違い、王も民も違います。もちろん、百年前と今とも違う。姫様が進む道が、国と民が進む道となるのです」

ララサララの頬を涙が伝っていた。父母の前では流れなかった涙が、今、師の言葉を聞いているうちに溢れてきた。涙の理由はわからなかった――

「姫様。経緯がどのようなものであろうと、あなたがこの国の王であることは変えようのない事実です。王には精霊のご加護がある。思うままに進まれるがよいでしょう」

ひとしきり涙を流したララサラは、少し心が軽くなっていた。

身代わりになって倒れたリル。

身をもって助けてくれたルーリー。

ここまで一緒に歩いたマーリー。

手当をしてくれたノース。

アリーにギニー。

そして、師――

自分の答えなどまだわからない。けれど、彼らの行為を、想いを、無駄にしたくない。その想いこそ、自分と、このアップ・ファル・サル王国が進む道だと信じたい――

私はアップ・ファル・サル王国の王なのだから。

――厳しき誓いの王の冠

民草愛でる慈悲の掌

山原海と精霊の

満つる麗しき邦の長

マーリーの歌声が頭の中で響いた。

曲がりなりにも、王として王冠に誓いを立てたのだ。私が考え、目を向けなければならぬのは、兄上や大司教や三諸侯ではない。ギールやガタナ、ユーナやアリーやギニーのような民達だ。王宮の闇に怯え、自己の闇に閉じこもっている場合ではない。

アリー達に、魔法の力で敬ってもらっても嬉しくはない。隣国の王達が、やはり魔法の力で友好を示しても、それは本当の友好とは言えない。

傷ついたり、裏切られたり、誰かが死んだりするのは正直怖い。しかし、それを受け止め得るのが、毅然とした王ではないのだろうか？

マーリーが作ってくれた歌に恥じぬように――

ララサラは師に深く礼をして、部屋を後にした。

それぞれの転機 1

「これはどういうことか？ ブリューチス大隊長」

地下牢から上がってきたノース達を待ち受けていたのは、バンドス騎士団長とミューカス第二大隊長だった。彼らの脇で、カーナフ分隊長が青い顔をしている。

「これはお揃いで。どうなされたのですか？」

ノースは平静を装って訊いた。しかし、握りしめた掌が汗でびっしょり濡れている。

「どうもこうもあるか、ブリューチス大隊長。勝手に女官を尋問するなどと、何を考えている」バンドスが言った。

バンドスの背後では、ミューカスが脂ぎった顔をしかめている。

おそらく、カーナフが小隊に確認を取り、巡り巡ってミューカスにまで話が通ったのだろう。そして、騎士団長まで確認がなされた。

正直なところ、ノースが予想していたより随分と迅速に話が回った。普段の騎士団では考えられない迅速さだ。

「何か申し開きはないのかね？ このままでは、君も魔術師の一味と見なさざるを得なくなるぞ」

「ええと……、実は特命を受けまして……」ノースは、可能な限り確認に時間を要するような話をでっち上げようと試みた。

「ほう？ それは誰からだね？ 騎士団からはそんな命は出ていないぞ。女王陛下か？ それとも刑部尚書けいぶしょうしょ辺りか？」

「特命ですから……」

「それで通ると思うのか？」バンドスが詰め寄った。

ノースが進退窮まったと思ったとき、意外なところから声がした。「私が命じたのだ」

入り口にがっしりした体軀たいくの男が立っていた。短い銀髪を撫でつけ、豊かな口ひげを蓄えている。そして、部屋の中を睨み付ける鋭い眼光。港灣候ゴース・アプセン二世だった。

「私がブリューチス大隊長に依頼をしたのだが、まずかっただろうか？」

港湾候は、有無を言わせぬ迫力でバンドスとミューカスに向き合った。バンドスがしばし呆気にとられた後、弱々しく抗議を試みた。「閣下。騎士団は陛下のものです。御自重いただかないと……」

「ふむ。しかし、私は今陛下のお手伝いをしている。私の命は陛下のお言葉と取っていただいて結構だと心得るが？」

これには、バンドスとミューカスだけではなく、ノースも絶句した。自分は王と同じだと、そう言っているのだ。しかし、意図はよくわからないが、港湾候がノースに助け船を出してくれたことは確かかなようだった。

「そうなのか？ ブリューチス大隊長」バンドスが訊く。

「はい」とノースは神妙に頷いた。

バンドスとミューカスは顔を見合わせると、乱暴に扉を開いて出て行った。

それぞれの転機 2

「一応、お礼を申し上げます」

「一応か……。ふふふ、ははははは」

ノースと港湾候は王宮の庭園の中を歩いていた。すでに日は暮れて、庭園は夏の宵闇に包まれている。地下牢から出たふたりは並んで歩き、ここまでやってきた。ベルルは第八大隊長室へと戻っていた。

「あの、何かおかしいことを申し上げましたか？」

「ブリューチス大隊長、まだ若いな。そんな風に不審を露わあらにしては、何かを知っていると言っているようなものだ」

「私が無理に牢に入った時点で、閣下はそれを承知していらっしやるのでは？」

「うむ。しかしまあ、間に合って良かった」

「改めてお伺いいたします。何故私に助け船を出してくださいだったのですか？」

「女王陛下のためだ。もちろん、本物のな」

ノースは絶句した。港湾候は今、王宮にいる女王が偽者だと認めたのだ――この男は王子の手先ではないのか？

庭園を吹き抜ける生暖かい風がノースのうなじを撫でていく。それだけのことで、ノースは驚いて飛び上がりそうになった。

「……それは、王子殿下を裏切るといふことですか？」

「どういふことかな？」

王子の名を持ち出したのはノースの賭だった。ここが分水嶺ぶんすいれいになると、彼女の直感が告げていた。星明かりの下では、港湾候の表情ははっきりとしない。

「あなた方三諸侯は、王子殿下の意向を受けてパパスカ王に退位を勧め、ララサラ殿下を王位につけた。魔術師の襲撃を演出して〈金翠の歌姫〉を捕らえた。王子殿下がお戻りの後は、陛下を玉座

から下ろして、王子殿下が玉座に座る予定になっている。当初は継承権の逆転を楯にするつもりだったのかもしれない。陛下が逃れてしまったから、偽者だと断じる計画に変えたのかもしれない。そして、本物の陛下は早急に探し出す。後は、陛下と〈金翠の歌姫〉を犠牲にして、再度の守護魔法を行う……。そういう計画ではないのですか？」

港湾候は興味深そうにノースに訊いた。

「大隊長。仮にその通りだとして、私が王子殿下を裏切るつもりなどなく、単に探りを入れるためだけに貴殿を助けたのだとしたら、どうするね？ この場で切って捨てられるかも知れぬぞ」

港湾候ゴース・アプセン二世は剣の腕が立つことで知られている。「そのときはそのときです。騎士たるものは決断が肝要。私は閣下がお味方であることに賭けます」

港湾候は感心したように息を吐いた。

「もちろん、賭に負けた場合、黙って切られるつもりはありませんけれど」

「なるほど」港湾候は楽しそうに笑った。「機をみるに敏、結構だ。どうだ大隊長、これから一鞍付き合わぬか？」

港湾候は馬駆けをしないかと誘っているのだ。すでに日は暮れているというのに。しかし、ノースは躊躇^{ちゅうちよ}せずに答えた。

「いいでしょう。お付き合います」

それぞれの転機 3

「私は、子供の頃から、長く船に乗って彼方此方の国を旅して回った」

王都ファル・バラオの灯火を見下ろしながら、港湾候ゴース・アプセン二世が言った。庭園からまっすぐ厩へと向かったふたりは、それぞれの愛馬を引き出すと、夜の王都に乗り出した。星明かりの下、都を抜けると、王都を見下ろせる丘の上までやってきていた。

「私は三男だから、港湾候を継ぐことはないと思っていた。しかし、兄ふたりが相次いで病に倒れた。その結果、三年前に呼び戻されてしまった」

港湾候はさも残念そうに肩を竦めた。

「ほとんどこの王国の近くに居なかったということが、どういうことだかわかるかね？」

「守護魔法の影響を受けない、ということですか？」

「そういうことだ。遠く離れた異国の地で、このアプ・ファル・サル王国の噂を聞いたたびに、私は常々疑問に思っていたのだ。二つの大国に挟まれて、この王国は何故、こんなにも穏やかなのだろうか。私なら王宮を乗っ取ってしまうのに、とな」

草むらから虫の声が聞こえてくる。夜の丘は昼間より遙かに過ぎやすい。

「だから、大司教から守護魔法の話聞いたときには納得がいったよ。守護魔法がこの国を腑抜けにしていたのか、とね。そして、王子殿下の計画を聞いたときは心が震えた。殿下は、守護魔法が切れた後、新たに強いアプ・ファル・サル王国を作るために、今すぐにも王位に就きたいと望まれていた」

「ならば何故ララサラ殿下を？」

「箔がつく、と最初は説明していた。王位を篡奪した妹の女王。彼女に対して、王位継承権を盾に実力で王位を奪い返す。それは、今

までの王達とは違うことを内外に示威することができると……。私はその計画に賛同した」

「しかし、それは……」

「そうだ。ある段階から話の雲行きが怪しくなった。件の魔術師をこの国に送り込む算段がついたからだろう。守護魔法を再度かけ直す、という話を持ち上がったのだ。鉦山候と平原候はかえってその話を喜んでいいる。大司教は最初からそのつもりだったようだ……。しかし私は、それには賛成できない。いかにこの王国のためだと言われてもだ。この国は、そんな魔法に頼らずにやっていくべきなのだ」

「女王陛下も、同じように守護魔法は必要だと考えるかもしれないわ」

「本当にそう思うかね？」

ノースはララのことを考えた。自分のことを認めてもらえず、悔しそうな顔をしていたララ。彼女が魔法で民を従えて喜ぶだろうか？ 第一、ルーリーの推測が正しければ、女王本人が魔法の犠牲になる必要が出てきてしまう。

「閣下。何故私にそんな話を？」

「陛下を守るには騎士団が必要だ。大隊長の半分は王子の息がかかっているを見て良い。特に、バンドス騎士団長とミューカス第二大隊長などはその中心だ」

ベルルは、ミューカスが今回の件について不満を漏らしていた、と言っていた。しかし、考えてみれば、襲撃事件のときの王宮警護は第二大隊だった。騎士団も含めて共犯なら、ことは簡単に進められる。わざと不満を漏らすぐらいの演技もするだろう。

「私には、なんの接触もありませんでした……」

「はははは。若い上に女性だ。信頼が置けない、と言ったところだろう。しかし逆に、だからこそ私は、貴殿を味方にする機会を伺っていた」

なるほど。それで、あの絶妙の場面で現れたというわけだ。

「休暇から戻った貴殿は、今日一日、随分と精力的に駆け回ったな。自分が留守中の事件を調べるにしてみれば熱心すぎた。その理由を一つ、私は仮定することができる」

「……」

「陛下に会われたのではないか？」

王都ファル・バラオの灯火は、魔法の国に恥じず〈灯石〉を使ったものが多い。その青白い光は、まるで大地に星々をちりばめたようだった。

それぞれの転機 4

目を覚ましたマーリーは、体が思うように動かせなかった。頭ががんがん痛む。しばらくもぞもぞと体を動かし、自分が後ろ手に縛られ、土の上に転がされていることを認識した。辺りはすっかり暗くなっていた。

何故こんなことになっているのか、マーリーは必死で考えた。

あのととき、衛兵を上手くまいたマーリーは、時間を見計らって繋いである馬の所へと戻った。そのとき、突然背後から頭に衝撃があり、以後の記憶がない――

（そうだ……、ララ！）

マーリーは辺りを見回したが、ララサラはいないようだった。少し離れた場所で焚き火がたかれ、数人の男達がそれを取り囲んでいる。男達は酒を飲んで盛り上がっているようだった。

――つまり、自分は彼らに捕まったということか。マーリーは唇をかんだ。馬泥棒に追っ手がかかることぐらい、予想してしかるべきだったのだ。いったいどれくらいの距離を来てしまったのだろう。ララサラは、自分がいなくなって何と思っているだろうか。

しばらくすると、ひとりの男が様子を見に近づいてきた。

「お、気が付いたか馬泥棒。悪いな、気持ちはわかるけどよ、俺達だってこれが仕事だからな」

だいぶ酒に酔っているらしい男は、転がったマーリーの脇に座った。

「お前、馬泥棒初めてだろう？ あんなよ、盗んだところから一本道の先に馬を繋いでたら、見つけてくれて言っているようなもんだ。しかも、戻ってくるとはな。売り払うなら即座に売らなきゃ駄目だ。乗り捨ててるならよ、戻ってきたりしちゃだめなんだよ」

「おじさん達はもっと上手くやるの？」

「昔の話だよ。今は真っ当な用心棒だからな！ ……てのは表向き

で、今でもたまにはやる。お前より随分と上手くやるぞ。ははははは」

「じゃあ、泥棒のよしみで見逃してくれない？　馬は持って帰っていいからさ」

「馬鹿言え。お前を連れて帰るのと、そうじゃないのでは、どれだけ礼金が違うと思ってるんだ？　駄目だね」

「……そうか、残念。じゃあ、さらに儲かる話なら乗る？」

「何だって？」

男は、まじまじとマーリーの顔を覗き込んだ。酒臭い息がかかり、マーリーは顔をしかめたいのを必死で我慢した。「おい、何をやってるんだ」と焚き火の周りから声がかかり、男は首をかしげながら離れていった。そしてしばらくすると、もうひとり別の男と現れ、引きずるようにしてマーリーを焚き火の所まで引張っていった。

男達は全部で三人だった。最初にマーリーに話しかけた小柄な丸顔の男と、後から来た背の高い男。そして、顔中に傷のあるリーダーらしい男がもうひとり。マーリーは傷の男の前に座らされた。

「おい、馬泥棒。儲け話があるそうだな？」傷の男が言った。

「最近、王宮から賞金首の指名手配が出ていませんか？」

「指名手配？　どんなだ」

「女王陛下に似た女の子と、金髪の男の子のふたり組……かな」

「それで？」

「心当たりがあります」

傷の男は無言でマーリーを睨み付けていた。

「……というか、僕がその男の子です。女の子は馬を繋いであった所の近くにいます」

「わざわざそんなことを言う理由は？」

「彼女と離れたくないからです」

うひゃひゃひゃ、という下品な笑いが起きる。傷の男は黙って考えていた。

「一緒なら、王宮に突き出されようが、〈馬屋〉に突き出されようが構わない、ということか？」

「はい……」

傷の男は手元の酒壺をぐいっと傾けた。そして、勢いよく立ち上がる、足下の砂を蹴って焚き火を消した。

「兄貴、このガキの言うことを信じるんですか？」

「半分な。今から確認に戻ったって、俺達に損はねえよ。指名手配はたしかに出ていたが、王宮からじゃねえ。州軍から出ていた。結構な金額だ。それによ……好きな女と別れたくないってのは良くわかる話だ」

子分ふたりが、あちゃーと顔を覆った。おお「始まったよ」とぶつぶつ言っている。

「おい、さっさと〈灯石〉を灯せ。さっきの所まで戻るぞ。それから、ガキはお前が乗せていけ」

マーリーは、後ろ手に縛られたまま、丸顔男の馬に括りつけられた。男はマーリーの顔を見ると、眉をひそめて呟いた。

「兄貴は姐さんにぞっこんなんだ。あんな顔なのに、男女の話になると急に浪漫的になるんだよ……」

「おら、いくぞ」傷の男が叫んだ。

男達が乗ってきた二頭の馬と、マーリーが盗んだ一頭の馬。合わせて三頭の馬は、〈灯石〉を頼りに夜の道を走り始めた。

それぞれの転機 5

真っ暗な道を、ララサラは走っていた。外はもうすっかり日が暮れていたが、ベールが持たせてくれた〈灯石〉が足下を照らしている。

「お供の者を付けます」と最後まで食い下がったベールに、「ちゃんと共はいるから」と説得するのが大変だった。

「共は〈とも〉でも、友だな」

ララサラはひとりそう呟くと、マーリーの元へと急いだ。きつと待ちくたびれているに違いない。

しかし、馬を繋いでいた木立の所にマーリーの姿はなかった。馬もいなかった。

「マーリー！ どこだ？」ララサラは呼んでみたが、返事はなかった。

まさか、ひとりでどこかに行ってしまったのだろうか？

そんなことはないと思いつつも、ララサラは急に心細くなった。さつきまでは何でもなかった夜の闇が、突然、何かの意思を持ってララサラを見つめているような錯覚に陥る。ララサラは頭を振ると、〈灯石〉を高く掲げて、声を張り上げた。

「マーリー！ ふざけていないで出てこい！」声は夜空にむなしく消えていく。「おい！ 女の子をひとりで行かせるわけにはいかぬのだろ？ 王都までは一緒なのだろ？」

ララサラは、自分が涙声になっていることに気が付いた。

本当にいないのか？ ——本当に？

ララサラは木立の根本に座り込むと、膝を抱えた。野宿にはここ数日で随分と慣れたはずだった。しかし、今まではいつも側にマーリーがいた。ふたりならば、灯りがないことも気にならなかった。今は灯りがあっても、こんなにも心細い——

「？」

〈灯石〉の灯りに何かが光った。拾い上げてみると、それは、マリーが首に賭けていたルーリーの首飾りだった。魔法細工と思われる繊細な模様の入った、飾り石のない首飾り。マリーがこれを捨てるはずはない。ということは――何かあったのだ。

ララサラは勢いよく立ち上がった。

（助けなければ！）

〈馬屋〉の追っ手に捕まったか、それとも、夜盗にでも襲われたか――とにかく、探さなくては。

追っ手に捕まったとすれば、当然ファル・ベルネの町へ戻るだろう。

ララサラは首飾りを自分の首にかけると、ファル・ベルネの町へと続く道を走り出した。

馬に追いつけるはずがない――そんなことは、これっぽっちも思い浮かばなかった。

それぞれの転機 6

夜の大気が湿り気を帯びていた。いつの間にか星が見えなくなっている。

「こりゃあ、一雨来るな」丸顔男が言った。

「向こうに〈灯石〉の灯りが見える！」先頭を走っている背高男が声を上げた。

平原の中をまっすぐに伸びる一本道の先に、ちらちらと青白い光が揺れていた。光はこちらに向かってきているようだ。馬に括り付けられた窮屈な体勢から、マーリーは光に目を凝らした。ララサラは〈灯石〉を持ってはいなかった。しかし、館で手に入れた可能性はある――

背高男が馬の腹を蹴り上げて飛び出していった。しばらくすると、「女の子だ！」との声が聞こえた。傷の男と丸顔男も馬の腹を蹴り上げた。

真っ暗な夜空から、ぽつぽつと雨が落ち始めた。

「なんだ、お前は！ 離さぬか！ 無礼者が！」

はたして、背高男がララサラの腕を掴み、その顔を覗き込んでいた。

「ララ！」マーリーは馬の上から叫んだ。

「マーリー！ そなた、なんだその格好は。今助けて……」

ララサラは背高男の腕を振り払おうとしたが、体格差がありすぎて思うに任せなかった。暴れるララサラの前に、傷の男が歩み寄った。そして〈灯石〉を近づける。

「なるほど。たしかに陛下に似ている。以前、一度見かけたことがある」

「なに？」

「その馬泥棒が言ったのさ。自分達は指名手配になっている。捕まるのは構わないが、ふたり一緒じゃなきゃ嫌だな」

「無礼なことを申すな。余はララサラ・バラオだ」

傷の男は、面白そうにララサラの顔を覗き込んだ。ララサラが睨み返す。

雨が少しずつ強くなってきていた。

「面白い。それじゃあ、その証拠を見せてもらおうじゃねえか」

「証拠？」

「そうだ、証拠だ。俺が、お前は陛下だって納得したら、この場で忠誠を誓ってやる。納得できなかったら、ふたりまとめて州軍に引き渡す」

「……わかった」

「ララ！」マリーが声を上げた。

ララサラはマリーを見つめると、自信ありげに微笑んだ。背筋を伸ばし、胸の前で手を握り、雨が落ちてくる空を見上げた。そして、大きく息を吸い込んだ。

——母なる海はいと深く 父なる山は遙かなり

愛しき風は清らかに 頼もしき日の輝ける

誇りは我ら胸に満ち 名は世界に響き行く

ああ、麗しの麗しの アプ・ファル・サル

ララサラが歌い始めると、まず彼女の頭上の雨雲が割れた。雲の割れ目から、淡い萌葱色もえぎいろの光の粒が一つ二つと降り始める。雨雲はみるみる退き、満点の星空が空を覆う。萌葱色の光の粒は、時間と共に数を増していった。

——姉なる川はいと速く 兄なる原は豊かなり

優しき雨に包まれて 静かなる月に導かる

言葉は我ら胸に満ち 人は世界を渡り行く

ああ、麗しの麗しの アプ・ファル・サル

やがて、地面からも、周辺の木々からも、光の粒がふわふわと漂い始めた。龍青玉が魔力を発動するときには発する燐光に似た、しかし色がまるっきり違うそれは、熱くもなく、眩しくもなく、ただ神秘的で、神々しくララサララを包み込む。

——精霊の紡ぐ言の葉と　太古の龍のちから石
祖母の残せし綾模様　祖父の残せし金細工
魔力は我ら胸に満ち　法は世界を支え行く
ああ、麗しの麗しの　アップ・ファル・サル

星々にさえ届きそうな凜としたララサララの歌声は、夏の熱気と雨の湿気に澱んでいた空気を、瞬く間に清々しく浄化した。

「〈行幸の御証〉だ……」と傷の男が呟いた。

精霊の秘儀を受けた王だけがなしいるという〈行幸の御証〉。その幻想的な光景を、当のララサララでさえも呆然と見渡している。

「陛下」傷の男が地面に片膝をつくと、深く頭を垂れた。「ご無礼の段、お許しください」

「まず、マーリーの縄を解いてやってくれ」

丸顔男がマーリーに駆け寄ると、大慌てで縄を解く。マーリーは、縛られていた腕をさすりつつ、ララサララの元へと走り寄った。

「ララ。ごめん」

「なぜそなたが謝る？」

「だって、ひとり残してしまって。心細かったんじゃないかと」

「何を言う。そなたこそ、私が助けてやらなかったらどうなっていたことか」

「うん。ありがとう」

ララサララは満足そうに頷いた。

「〈行幸の御証〉始めて見たよ」

「私もだ」

「？」

「通常の行幸で現れる〈行幸の御証〉は、王の示威のために、王宮の魔法使いが魔法で見せるものだ。まあ、一種の見せ物だな。しかし、いつか師に教わったことを思い出したのだ。精霊の秘儀を受け、土地の精霊と契約した王は、本当に〈行幸の御証〉を行えるのだと……。その下地があるからこそ、魔法使いの見せ物も、民達はあるがたがってくれるのだとな。やり方がわからなかったから……。そなたや、リルや、この国のことを想って……。歌ってみた」

星明かりの下で、ララサララの満面の笑みが輝く。

「上手くいったであろう」

「とても綺麗な歌声だったよ」

マーリーの言葉に、ララサララは一瞬言葉を詰まらせた。何かを言いかけ、そしてやめる。やがて、諦めたようにぷいと横を向くと、男三人に正対した。

「そなた達、余を国王と納得してくれたか？」

「はい」三人が声を合わせて言った。

「ならば、そなた達に頼みたいことがある」

傷の男がわずかに顔を上げた。「なんなりと、お申し付けください」

「うむ、感謝する。我らは、ファル・ベルネの町を経由して王宮へと戻りたい。送っていてももらいたいのだ。もちろん、勝手に使った馬の分も含めて、礼はする」

「承知いたしました」

ララサララが傷の男の馬に、マーリーが丸顔男の馬に乗った。そして三頭の馬は、まだ〈行幸の御証〉の余韻の残る夜の平原を、ファル・ベルネの町を目指して駆けだしていった。

王としての決意 1

東の空から日が昇り始めた。夜のうちに降った雨が、夏の朝日を浴びて靄となる。

肌に絡みつく湿った大気の中を、九頭の馬がひた走っていた。先頭を行くノースの赤い髪が、炎のように揺れている。

一行はファル・ベルネの町を目指していた。

先頭で馬を駆るノースの脇を、港湾候とその部下二騎が併走している。また、背後からは、第八大隊の精鋭五騎がぴたりと追走していた。

港湾候とのやり取りで事態が差し迫っていることを知ったノースは、急ぎ王宮へと戻った。そして、一晩かけて八方手を尽くすと、その場をベルルに任せ、王宮を飛び出してきた。すでに明け方近かったにもかかわらず、待機していた港湾候は同行を申し出た。部下の五人も、不平一つ言わずに付き従ってくれている。

（さて、どう説明したものかしらね）

実は、ベルル以外にはウラの話はしていない。後ろの部下五騎にもだ。口で幾ら説明したところで、そう簡単に信じられる話ではない。もちろん、説明などなくとも、ノースの命令に部下達は従うだろう。しかし、今回のような事態に際しては、部下達が事情を心得ているかどうかは士気に直接影響してくる。

（……ウラに期待するしかないのかしら）

本物の女王なのだから、会えば皆わかるだろうか――ノースは、自分がウラを女王だとなかなか認めなかったことを思い出した。女王というのは、王宮という舞台装置も含めての女王だ。片田舎のぼろ家においては、信じるという方が無理だ。連れてきた五人だけではない。場合によっては、第八大隊三百五十人に、王宮にいる女王――偽者だが――に、反旗を翻させることにもなりかねないのだ。守護魔法によって、港湾候が言うところの〈腑抜け〉にされている彼

らに、本物のララサララだという確固たる拠り所なしに、それを強いるのは難しいだろうか――

（それでも、やらなくては……）

街道沿いに少しずつ畑や家が現れ始めた。

ファル・ベルネの町まで、もう少しだった。

王としての決意 2

町へと入り、馬を下りた一行は、ノースの家へと続く路地までやってきた。先へと急ぐノースを、部下のひとりが呼び止めた。

「大隊長。あれは何でしょうか」

彼が指さしたのは、町の広場の方角だった。自宅へと気がせいっていたノースは気付かなかったが、他の八人は全員が同じ方角を見つめている。

「？」

通りの先は曲がっていて、ノース達の所から広場を見ることはできない。しかし、家々の屋根を越えて、広場のあると思われる方角から、萌葱色の光の粒が漂っていた。次第に光の粒は数を増し、それと共に、不快な大気のべたつきが失せていくのが感じられる。

ノースは目を見開いた。

（……行幸の御証？）

しかし、〈行幸の御証〉は、王宮の魔法使いが行う単なる演出ではなかったのか。龍青玉を使用するので、光の粒も青白いのが普通だ。マーリーは魔術師の息子だが、本人に魔法の心得はなかったようだが――

ノースは愛馬の手綱を放り出すと、広場へと走った。その背後で、港湾候が慌てて指示を出す声が響く。

緩やかに曲がる通りを抜けると、そこはファル・ベルネの町の広場だ。煉瓦を敷き詰めた広場には、人集りができていた。それは、二日前と同じような光景。人々の垣の中央にいるのは、やはりララとマーリーだった。

広場に近づくと歌声が聞こえた。湿った空気を清々しく浄化する、凜とした歌声。聞き慣れた旋律は〈麗しの王国〉だ。声の主はララだった。

（……これはどういう状況だ？）

ララとマーリーは昨日とは違う格好をしている。ララの服装は男の子のものだ。マーリーはノースの家で見繕みつくろったらしい。そして、ふたりの脇には、三人の男達が、まるで衛兵よろしく付き従っている。あれはたしか、〈馬屋〉の用心棒をしているごろつき達ではなかったか。広場を埋める町の住人達の三分の一ほどは、片膝をつき、頭を垂れていた。

歌が終わってなお、人垣からは咳一つ聞こえない。やはり呆然と立ちつくすノースに、マーリーが気が付いた。

「ブリューチス大隊長！」

その声を合図に、ノースの前の人垣が割れた。

「たいしたものだな」いつの間にか追い付いてきた港灣候が、ノースに言った。「本物の〈行幸の御証〉だ。これを見せられては、彼女を疑う者はいないだろう」

「でも、一昨日は……」

「陛下は日々ご成長されているということだ。頼もしい限りだな」港灣候がノースの背を軽く押した。ノースはゆっくりとした足取りで、人々の垣の間を抜け、ララの前まで歩いた。そして片膝をつき、深く頭を垂れた。

「ララサラ女王陛下。私を含め、この町の者達の無礼の数々、深くお詫び申し上げます」

ノースの口上に合わせて、まだ立っていた住民達も、皆膝をついて頭を下げた。

「氣にするな。先に無礼を働いたのは余の方だ。それに、昨日も随分迷惑をかけた」

そしてララサラは、幾分硬い顔で、ノースの背後を見やった。そこには、ノースと同じように頭を垂れた港灣候の姿があった。ララサラの視線を受けて、しかし港灣候は言葉を発しない。口を開いたのはノースだった。

「陛下。港灣候閣下はお味方にございます」

やはり無言を貫く港灣候を、ララサラはしばらく睨み付けてい

た。やがて、ゆつくりと口を開いた。

「ノース・ブリューチス騎士団第八大隊長。卿はどうなのだ？」

「恐れながら、私は陛下の忠実なる騎士にございます」

「そうか……そうだな。港湾候も、余に敵対したことがあるのか？
余に覚えはないぞ」

悪戯っぽい微笑みを湛えたララサラは、まるで花が開いたように華やかだった。かつて〈早春の息吹〉と讃えられていた頃の、あのララサラのそれであった。

ノースは、周囲の民達がララサラに魅せられていることを肌で感じた。一昨日、始めてここで会ったときとはまるで違う。たった一日で何があったのかはわからない。しかし、港湾候の言うとおり、ララサラは王として確実に成長しているようだ。

ノースは、職務に忠実である自信を持っていた。それは、王への忠誠心と同義だと思っていた。しかし今、それが間違っていたことを知った。ノースの胸の内に湧き上がった新たな想いは、熱く、力強く、体の隅々まで広がっていった。

王としての決意 3

「リルが……」

ノースからリルの最期を聞いたララサラは、しばし絶句した。そして、手渡されたリボンをじっと見つめた。

一行は、広場からノースの家へと移動していた。全員が中に入るのは無理だったため、ララサラとマリー、ノースと港湾候の四人が卓を囲んでいる。ノースの部下達や例の三人は、馬の番をしつつ外で待機していた。

そしてノースが、まずリルのことを報告したのだった。

「ララ……」

マリーが声をかけようとして、それをノースが止めた。ノースはゆっくり首を振ると、人差し指を立てて唇に当てた。

半刻（約十五分）ほどリボンを見つめていたララサラは、おもむろにそれを左手首に巻いた。

「ブリューチス大隊長」

「はい」

「リルを看取ってくれたこと、感謝する」ララサラの目に、涙は光っていなかった。「今はリルを悼んでいる時間はあまりない。そうだな？ 港湾候」

「仰せの通りです」

「わかった。では、まず全員の情報を統合しよう」

ララサラの様子を見て、他の三人は感嘆した。無理をしている痛々しさが感じられない。そこにいる少女は、十五歳の多感さと同じに、確かな威厳を身にまとっている。その目に宿る強い光は、リルの死を無駄にはしない、という決意だろうか。

ノースは、刻一刻と変わる少女に目を見張った。

まず、ララサラとマリーが、続いてノースが、それぞれ前日のことを報告した。そして港湾候は、昨晚ノースに語ったのと同じ

ことを話した。

ララサラは、王宮にいる偽者について、それほど驚いた様子を見せなかった。

マーリーは、ルーリーが生きていることに、とりあえず安心しようだった。そして、ノースからルーリーの言葉を伝え聞くと、複雑な表情をした。ルーリーが魔術師だった事実を、どう受けとめればよいのか、まだ整理し切れていないようだった。

一方ノースはといえば、自分の父親の研究帳を見て目を丸くした。灯台もと暗しとはこのことだ、と嘆息せざるを得なかったのは言うまでもない。

そして、今までの数々の憶測を、港湾候の話が裏付けた。

「パウバナ大司教は、ある市井しせいの研究家の指摘から守護魔法の真実に気が付いた、と話していました。おそらく、それは大隊長のお父上のことだろうと思われますな」

港湾候の言葉に、ノースは顔をしかめた。

「それと気付いて精霊大聖堂や王宮の書庫などを調べてみれば、何故今まで気付かなかったのか、という事柄が色々出てきたそうです。概ね、その研究帳の推測は間違っていない。そして、大司教は王子殿下にそのことを伝えた。一年半ほど前のことです」

「兄上がデル・マタル王国へ留学する直前か」

「王子殿下は、パパスカ王陛下から、宝物庫のことを聞いて知っていたようです。大司教は、殿下と共にそこへも入ったとのこと。

そして、資料を集め、守護魔法の謎と仕組みを解明した……。素材さえ揃えば再度その魔法を再現することが可能だ、と大司教は言い切りました」

「素材って……」ノースが嫌な顔をした。

「女王と魔術師か？」ララサラが訊いた。

——そう、それこそが、パパスカ王退位から始まる、一連の出来事の根幹だと思われる点だ。

「その通りです」

王としての決意 4

港灣候の言葉に、ララサララは何故かほっとした。ここ三ヶ月あまり、胸の中に凝^{こも}っていたものが溶けた感じだ。すべてが兄カカパラスの謀という単純な図式は、ララサララ自身の犠牲を強いるという内容はともかく、明快という一点で心情的に落ち着けるものだった。

——しかし。ララサララは兄の顔を思い浮かべた。日に焼けた肌。褐色の短髪。ララサララと同じ藍色の瞳——あの兄は、妹を犠牲にして、自らの欲望を満たそうとするような人だっただろうか——いや——、私が兄上の何を知っているのだろう、とララサララは思った。兄上と、王国の将来について語ったことなど一度もない。父王のときと同じだ。それなりに仲の良い兄妹ではあった。しかしそれは、家族という生活単位の範疇でのこと。しかも、守護魔法の効果の下だ——

室内を静寂が満ちた。誰もが、この卓に持ち寄られた情報を消化しようとしていた。

「ねえ、ララ」静寂を破ったのはマーリーだった。「宝物庫には龍青玉でできたババカタラ王の像があるんだよね。ということは、この研究帳に書いてある《もしかしたら、王本人が魔法の寄り代となった》て記述は本当なのかな？ そんなことが可能なの？」

「方法はわからない。しかし、龍青玉も元は竜の化石だといわれている。石や金属を龍青玉に変換することは難しくても、命あるものを結晶させることはできるのかもしれない……憶測だがな」

「そう……。じゃあ、方法は置いておく。で、そんなに大きな龍青玉を作った理由は、普通の龍青玉だけでは、魔力を蓄えるのに容量が小さすぎたということではないのかな？」

マーリー以外の三人は顔を見合わせた。

「マーリー。そなた、何が言いたいのだ？」

「あまり整理できていないんだけど……。そうだ、ここに龍青玉に魔力を再充填できるようなことが書いてあるけど、本当かな？　すっからかんになっても大丈夫なの？」

マーリーは研究帳の一カ所を指さして訊いた。

「それは本当だ。しかし、今はあまりやらない。龍青玉を換えるだけの方が楽だからな」答えたのは港灣候だった。

マーリーは、右手の人差し指を空中でゆっくりと回しながら、何かを考え込んでいた。

「……例えば、魔術師が自分の命を失うほどの強大な魔力を発動したとするよね。それで、国中に魔法をかけて、余った分を大きな龍青玉に蓄えて、先々まで効力を維持しようとした……」

「うむ」ラササラが相槌を打った。

「細かい点は抜きにして、魔術を行ったのは魔術師で、ババカタラ王は補助、というか燃料樽の様な役割ということだよ」

「たしかに、役者が王と魔術師なら、そういう役割にならざるを得ない。ババカタラ王が魔術師だったという話は聞かないしな。しかし、その割り切り方は乱暴だ。ババカタラ王の願いと、土地の精霊との契約が、魔法をこの地に根付かせているとも言えるだろうからな……それで？」

「うん。一つは、母さんを捕まえたとして、言うことを聞かなかった場合はどうするのかなって」

「？」

「自分の命をかけるほどの大きな魔力を、人に無理強いされて発動できるのかな」

他の三人が顔を見合わせた。

「マーリー。そなた、本当に魔法のことを知らぬのだな」

「どういうこと？」

「魔術師の血で書いた文字は、魔術師の詠唱と同じ効果がある。魔法の基本だ。だから、必要な呪文と魔法式をルーリーの血で書けば、ルーリー本人が望まなくとも、ルーリーは魔力を発動することにな

るのだ」

マーリーは絶句した。その、あまりの顔に、ララサララは言葉を補わずにはいられなかった。

「……もつとも、今回想定される魔法は大掛かりだ。詠唱する呪文をすべて魔法式にするのは……たぶん、大変だ。それに、それほど大量の血を使ってしまったのは、ルーリーの体力が持たない。結果的に呼び出せる魔力が落ちる。つまり……」

「ありがとう、ララ。もういいよ」マーリーが苦笑しながら言った。ララサララは、意味もなく頬が熱くなるのを感じた。何故、自分がこんな言い訳をしているのだろう。

「そ、それで？ 疑問はまだあるのであろう？」

「うん。ララのことだよ」

「私？」

「ババカタラ王の龍青玉をそのまま使えないものなの？」

一瞬、室内の空気が固まった。港湾候でさえ、虚を突かれたような顔をしている。

ララサララは考えた。兄上が考えている守護魔法は、ババカタラ王のそれとは違うのだろう。自分に都合の良い魔法を行いたいと考えているはずだ。しかし、ババカタラ王の龍青玉が、龍青玉である以上、魔法式を変えればそれを使えるはずだ。条件設定は違っても、国の守護という方向性は変わらないのだろうから……。ルーリーをして魔力を補充させれば、向こう百年とは言わずとも、数十年は守護魔法の効力は持続できるだろう。それとも、そもそも王国を守護するつもりなどないのだろうか――

「閣下」ノースが港湾候に言った。「王子殿下がどんな守護魔法を行おうとしているのか、詳しくお聞きになっていらっしやいませんか？」

「ババカタラ王の守護魔法を復活させるとしか聞いていない。そのために、女王と魔術師が必要だということだったが……」

「まだ、我々が知らないことがあるのか……」ララサララが呟いた。

「兄上、いったい何を考えている……」

王としての決意 5

再びの沈黙が訪れた。

この中心が魔法なのに、魔術師も魔法使いもこの場にいない。無理にでもルーリーを連れてくるべきだったか、とノースは後悔した。しかし、今ルーリーを連れ出してしまえば、大司教や他の諸侯に気付かれることになる。それは避けなければならない。

沈黙を破って、港湾侯が口を開いた。

「陛下。話の混乱を避けるために、まだお伝えしていない件がございます」

「なんだ？」

「王子殿下のご帰国の件は偽装なのです」

「偽装？」

「ご帰国はされます。しかし、アプ・タリルの港から陸路ではありません。〈黒の森〉を越えて、一気に王宮までお入りになるつもりです」

「つまり、騎士団の各州城への派遣は……」

「はい。王都を手薄にするためです。王子殿下はおそらく、デル・マタル王国で味方に付けた私兵団を率いてくるものと思われます」

「……ブリスター子爵か」

ノースはすでに、港湾侯からそのことを聞いていた。ノースと第八大隊は、まさにそこを守る要なのだ。

〈黒の森〉を越えるには魔法を使うしかない。〈翼船^{よくせん}〉を使うか、

魔法使いひとりに兵士ひとりと馬一頭を組み合わせた〈飛行騎士^{ひこうきし}〉を使うか。どちらにしろ、飛翔魔法^{ひしょうまほう}は難しく、龍青玉を使っても、

素人には危なくてそうそう行えるものではない。つまり、王子が引き連れてくるのは大軍ではない——しかし、〈黒の森〉を越えての奇襲は効果的だ。王都ファル・バラオの騎士団が分断されている今ならば尚更だ。

「陛下」港灣候がララサララに向いた。「私は、カカパラス王子殿下の方針には反対です。しかし……」

ララサララは港灣候を制した。

「貴候の言いたいことはわかる。今のままでは、余は単に担ぎ上げられた王に過ぎないからな」

ララサララは椅子から立ち上がった。

「初代ババカタラ王の行った守護魔法の是非は問えない。王国を守る手段が他になかったのだろうし、時代も違う。その魔法が百年も続いてしまうとは、ババカタラ王も思わなかったのかもしれないが……。何にせよ、何も知らずに今日まで来てしまった民達は気の毒だ。」

民が王や王宮に物思うことは自由だと思う。他国がこの王国に対して野心を持つこともそうだ。思い考えることまでやめさせる権利は、余にも誰にもない。それに、余は、王や王宮や王国のことを、民にも色々考えてもらいたいと思う。皆で考え、歩む方向を定めてこそ、この王国は強き国になれるのだと思う。

だから、余は、再度の守護魔法は行わない。さっきマリーが言ったように、ババカタラ王の龍青玉に魔力を注ぎ込めば、兄上を思い止まらせることはできるだろう。しかしそれでは、根本的な解決にはならないのだ。魔法でことを先送りすれば、いつまで経っても、この王国は、他の国と同じ舞台上がることすらできないのだ。国内も、本当の意味での、王と民の絆は生まれないだろう。

……守護魔法が切れたこの時期に、謀によったとしても、余はアプ・ファル・サル王国の王となった。バラオ王家の末裔として、守護魔法のなくなった王国を導くのは、余に与えられた役割だと思う。若い王の綺麗事なのはわかっている。……このまま、兄上が連れにくる私兵団に、すぐにでも王国が危うくされてしまう危険も承知している。しかし、どんな結果になるにせよ、余はその結果をしっかりと受け止めたい」

ララサララは、手首に巻いたリボンを見つめた。

「リルは命を張って余を助けてくれた。師は余のために怪我をした。ルーリーも余のために囚われの身となったようなものだ。マーリーはここまで一緒に歩いてくれた。ブリュース大隊長は傷の手当てをしてくれた。昨日は一日走り回ってくれたのだな。ギニーやアリーや、この町の人々にも迷惑をかけた……。

余は、そんな皆の行為を、想いを無駄にしたくない。余が歩む王の道は、余のことを想ってくれたすべての人達が敷いてくれた道だ。港湾候。それは、貴候が望む国の形とは違うかも知れぬ。しかし、それでもこの国のことを強き国としたいと思うなら、是非力を貸して欲しい」

港湾候は椅子から降りると、片膝をつき、頭を垂れた。

「陛下。私は、このアップ・ファル・サルという国に愛着があります。長く離れていたからこそ、この国のありようが齒痒はがゆかった。しかし、陛下の今のお言葉に、新しい国の未来を見ました。是非、私も一緒に歩んでみたい。今まで、陛下に数々の無礼な発言もいたしました。それは、お許しはいただけるとは思っています。しかし、こんな私でも、陛下と共に王国の未来を創ることができれば、喜んで微力を尽くしたいと存じます」

「感謝する」

港湾候の後ろで、ノースも片膝をついた。マーリーはというと、自分はどうしようかと迷っているようだった。

ララサラはマーリーを制すると、港湾候とノースに言った。

「事態は切迫しているようだ。急ぎ、対策を立てねばならぬ」

ノースは顔を上げた。ララサラが港湾候へと語った言葉は、ノースの胸にも染みた。

若い、理想に満ちた、十五歳の王の言葉。

そこに青臭さを見いだすのは簡単だ。しかし、現にララサラは十五歳の少女なのだから、それで全然構わないではないか。

ララサラは成長する。そのときそのときで、年相応の王であれば良い。その王を補助するための、官僚組織であり、騎士団なのだ

から。

王は国の方向を指し示してくれる存在であればよいと思う。そして今、ララサラ女王が示した道は、たしかに未来へと続いていた。それは、自分の未来でもあると、ノースは素すぐに信じられた。

「お腹すきませんか？」突然マーリーが言った。

「マーリー、そなた……」ララサラは呆れた顔で、マーリーを睨み付けた。

「いえ、腹が減っては戦はできぬといいますから」ノースはマーリーに助け船を出した。

この少年といたことが、ララサラを良い方に変えてくれたのは間違いない。考えようによっては、彼はこの国そのものを変えたと言っても良いのではないだろうか。

食事の用意のために立ち上がりながら、ノースはそんなことを考えた。

ミーネ 1

漆黒の闇だった。

上も下も、右も左も、前も後ろも、粘り着くような闇に閉ざされている。

彼女は柔らかい寝台の上にいた。その身を包んでいるのは、羽のように軽い絹の寝間着。かつて憧れた、王女様の暮らしだった——いや、正確には、これは女王様の暮らしだ。アップ・ファル・サル王宮の〈奥の宮〉にある女王の居室。一日の役目を終えてようやくひとりになった彼女は、自分の手すら見えない暗闇の中で、途方に暮れていた。

彼女は小さい頃から、ララ姫様——ララサラ王女——に似ていると言われて育った。彼女自身、実際にララ姫様に会ったことはなかったが、ことある毎に大人達がそう言うのだから、そうなのだろうと思った。彼女の父親はマーテチス州の官吏で、州城を訪ねてきたララ姫様を何度か見ていた。父親の知り合いにはアップ・ファル・サル王宮の官吏もいて、彼女がララ姫様に似ていることを請け合った。〈早春の息吹〉ララ姫。彼女は、ララ姫様に似ていると言われるのが嬉しかった。明るく元気なララ姫様に負けないような女の子になろう、と思ったものだった。

十五歳の誕生日を三日後に控えた日、彼女は父親に連れられて、マーテチス州城を訪れた。てつきり、州城の女官見習いの面接だと思っていた。彼女の母親は、かつてマーテチス州城の女官をしていた。父親との出会いも州城だったという。だから、自分も州城の女官になるのだと、彼女は漠然とだと思っていた。十五歳になれば女官見習いとして雇ってもらうことができる。

だから、州城の大きな部屋で父親に倣って頭を垂れて待ち、少し高い所から顔を上げるようにぞんざいに言われたときも、まだ彼女は面接だと信じて疑わなかった。顔を上げると、壇上の立派な椅子

から、太った初老の男が見下ろしていた。後で知ったことだが、その男は平原候ジョシュ・マーテチスだった。

「なるほど、よく似ている。何か喋ってみろ」

「……？」

「ご挨拶をしなさい」父親が言った。

「ミーネ・ポルトスです。よろしくお願いします」面接の印象が良くなるように、彼女は精一杯の笑顔で挨拶をした。

「ふん。声は微妙な線だな。よし、試しに着付けてみる」

彼女——ミーネは、大勢の女官に別室へと連れ込まれた。そこで化粧をされ、髪を結い上げられ、服を着替えさせられた。そして、再び平原候の前へと引き出された。

平原候は壇から降りると、ミーネを舐め回すように検分した。その視線には粘り着くような嫌らしさがあり、ミーネは身を震わせた。「よし、なんとかなるだろう。卿の今の官位はなんだったかな？」

「刑部五位次席です」と父親が答えた。

「わかった。次回には二位正席にぎせうせきにしてやる。娘は今日から置いて行け」

「ありがとうございます」

それ以降、ミーネは家族と会っていない。父親が帰った直後は、自分は身売りされたのかと思って泣いた。しかし、彼女が平原候から聞かされたのは、意外な言葉だった。

「お前は、ララサラ王女殿下の影武者となるのだ」

それから、影武者となるための勉強が始まった。

言葉遣い、身のこなし、王族のこと、王宮のこと。何度か、平原候に付いてアップ・ファル・サル王宮へと参内し、ララサラ王女にも会った。もっとも、影武者の件はまだ王女本人には秘密だのこのだったので、話などはできなかった。彼女は、黙って平原候に付き従い、ララサラ王女のことを目で追い続けただけだった。

半年ほど経ったある日、平原候は唐突に彼女に申し渡した。

「明日から王宮で仕事をしてもらう。女王としてだ」

「……女王ですか？」

「詳しくは追々話す。準備をしておけ」

しかし、そのときは何故か、王宮に入って二日後にマーテチス州城へ戻された。

王宮では、パパスカ王が退位され、ラサラ王女が次期女王として即位された。ラサラ王女が女王とされたからには、またすぐにも自分の出番があるのだろうと思っていたが、結局、三ヶ月間、彼女に声はかからなかった。

何にもまして、即位後のラサラ王女は以前とは別人になってしまった、との噂が彼女を焦らせた。明るく、歌が好きで、常に風のように跳び回っていたラサラ王女が、暗く、歌うこともなく、ただそこに居るだけの人形となってしまったというのだ。

ミーネは、今のラサラ王女の影武者を務める自信が持てなかった。しかし、四日前、ついに彼女は王宮へと連れてこられ、女王の影武者として玉座に座らされたのだった。

質問は何一つ許されなかった。ただ、平原候と女官長の言うことに従うだけだった。形式的に会議の席に座り、執務机に座り、散々練習した女王の花押^{かむす}を書類に印し、そして、夜は真っ暗な部屋で眠った。

この部屋で夜を迎えるのは四回目だったが、ミーネは、もう耐えられないと思った。窓から入る星明かりすらないのだ。

——こんな闇の中で、ラサラ王女は、いったい何を考えていたのだろう。暗闇の中では、本を読むことも叶わず、ただ、じっとしているしかない。部屋の隅から、何かがじっと彼女の様子を伺っているような気がしてくる。粘り着く暗闇に、絞め殺されるのではないかという恐怖感が襲ってくる。本当の暗闇の中では、眠ることもできないのだと、彼女は始めて知った。

「……もう嫌」

小さな声で呟いてみた。声に出したことで歯止めが効かなくなっ

「……嫌、……嫌、嫌、いや、いやいやいや、いやああああああ
ガタン、と何か音がした。ミーネはびくつと体を引きつらせ、声
を殺した。

音は部屋の入り口の方から聞こえた。

居室の入り口には、ご丁寧にも大きな屏風が置かれている。入り
口の扉を開いても、光が部屋の中に入らないようになっていた。さ
っきまではなかった気配が室内にある。彼女の声に驚いて、女官で
も入ってきたのだろうか。

「だ……誰？」

その質問の答えは、彼女のすぐ耳元で聞こえた。

「そなたこそ誰だ」

ミーネ 2

ララサララとマーリーを含む総勢十四人は、昼過ぎにファル・ベルネの町を出立した。騎士団がいるのだから、傷の男達三人は不要だったのだが、彼らが女王陛下を王都まで送りたいと強硬に申し出たのと、ララサララがそれを認めたことで、この大人数となったのだった。

王都警護役の騎士団第八大隊長ノースが、こそそと王都に戻る必要はなかったが、万全を期して、一行は夕方近くになってから王都へと入ることにした。

王都ファル・バラオの都市部に入る直前、一行は三手にわかれることになった。ララサララとノース達、港灣候とその部下達、マーリーと傷の男達だ。

ララサララ達は、ゆっくりと王宮へと向かうことにした。そうすれば、いかにも巡回警備中という風情に見えるだろう。ララサララはギニーと交換した服をそのまま着ているので、ノースの馬に乗っていれば、目立たず王宮までたどり着けるはずだった。

港灣候達は、王都内にあるアプセン州の王都屋敷へ向かうのとこのだった。マーリーと傷の男達は、王宮に近い宿屋へいったん入ることになった。マーリーとしては、すぐにでもルーリーを助けに王宮へと飛び込みたかったが、そういうわけにもいかない。頃合いを見計るため、王宮内のことはノース達に任せて自重することとなった。

別れる直前、ララサララは馬から下りてマーリーに向いた。

「マーリー。母君のこと、今しばらく待ってくれ」

「うん。ララは自分のことが大変でしょ？ 無理はしないで」

「ん。……しかし、元々我ら兄妹、我ら一族の問題だからな」

そして、ララサララは胸元から首飾りを引っ張り出すと、それをマーリーに差し出した。昨晚拾ったルーリーの首飾りだった。その

下げ飾りには、小さな龍青玉がはめ込まれている。

「あれ？」

「大隊長の家にいるとき、待機していた騎士にアリーの家まで走ってもらった。マーリーの手から、母君に返すがいい」

「ありがとう」マーリーは大事に首飾りを受け取った。

場所は街道脇。道の先には、王都の灯火が灯り始めているのが見える。

ふたりの周りを大人達に取り巻いていた。

「マーリー」

「なに？」

「……いや、何でもない」

ララサラは、周囲の大人達を気にして視線を泳がせた。彼女にしては珍しい態度だった。しかしマーリーは、ララサラの言いたいことがわかった気がした。——例の歌を歌ってくれと、そう言いたいには違いない。

これから王宮へと乗り込む大事なときに歌を請うなど、不謹慎だとも思ったのだろうか。それとも、ララサラしか知らないあの歌を、他の人に聞かせたくないと思っている——などというのは、自惚れすぎだろうか。

マーリーは、ララサラに向かって軽く頷くと、大きく息を吸った。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳

春の香まいて野を駆ける

若き清しきその息吹

雨雲払う風の唇

宵闇散らす明の声

踏みし草原咲き誇る

紅き瑞しき立ち姿

厳しき誓いの王の冠

民草愛でる慈悲の掌

山原海と精霊の

満つる麗しき邦の長

マーリーの歌を聴いた大人達は、突然のことに驚いたのか、ぽかんと立ちつくしている。

ララサラは、歌い終えたマーリーに右手を差し出した。

マーリーは躊躇せずにその手を握った。

「またな」

「またね」

思い出したように、ノースが小さく拍手をした。それに釣られるようにして、ふたりを囲む輪から大きな拍手がわき起こった。歓声まで上がる。

マーリーははにかんで頭を下げた。

丸顔男がマーリーの肩を揺らす。「おい、今のはなんて歌だ？」

「題名はまだ……。僕が作った陛下の歌です」

「余も手伝ったであらう」

「ああ、そうでした」

「よし、俺が題名を考えてやる。〈麗しのララサラ〉ってのはどうだ？」

「あ、いいですね」

「や、やめんか！ 恥ずかしい」

そう怒って見せたララサラだったが、満更でもなさそうだった。ララサラはマーリーの手を離すと、ノースへと向いた。「大隊長、出発だ」

「はい」

ノースが答えながら、にやにやと含み笑いをかみしめていた。

ミーネ 3

ノース達一行は、問題なく王宮へと入った。ノースとララサララは、まず、騎士団第八大隊長室へと向かった。

「お帰りなさい。大隊長」

参謀のベルルが、普段と変わらない態度でノースを迎え入れた。しかし、広いとは言えない大隊長室が、今日は人で溢れていた。

第八大隊参謀ベルル・イモコフ。同参謀次席ケネフ・ラーセイ。第五大隊参謀エルス・ベガール。第七大隊長ジャス・ジャジャフ。同参謀次席フナール・トースヌス。

「ご苦勞様」と軽く手を挙げて答えたノースに、部屋中の視線が集まった。

ノースがファル・ベルネの町ヘララサララを迎えに行っている間に、ベルルは、反王子派——というより、職務に忠実だと思われる騎士団の面々——に声をかけたのだった。

「ブリューチス大隊長」筋骨隆々（きんこつりゅうりゅう）とした第七大隊長ジャス・ジャジャフが口を開いた。「貴殿の参謀殿から話は聞いた。今回のカカパラス殿下の警護計画は、たしかに納得がいかない点が多い。しかし、陛下の偽者の話も信じきれんな」

「詳しい話は、余がすればよいか？」それまでノースの背後に立っていたララサララが、前へと進み出た。「ジャジャフ第七大隊長」

「……陛下」

ジャスは目を丸くした。他の参謀達も驚きの声を上げる。ノースを含めた全員が、ララサララの前に一斉に膝をついた。

「……となると、今〈奥の宮〉の居室に居られるのは……」

頭を下げながら、第五大隊参謀エルスが呟いた。彼女の疑問は、その場にいる全員の疑問だ。

「それは余が確かめる」

「陛下？」ノースが驚きの声を上げた。今すぐ居室に踏み込み、偽

者を引きずり出すものだと思っていたからだ。

「かの者が生粋きっすいの兄上の信奉者で、何が何でも余に取って代わろうとしているのならば致し方ない。しかし、平原候あたりに上手く乗せられているなら、余の味方にすることもできよう。だから、まずは余に任せて欲しい」

なるほど、と皆が頷いた。

「皆、大方の事情は聞いているだろう」ララサラは、部屋にいる全員に語りかけた。

「兄上が帰ってくる。しかも、私兵団を引き連れて〈黒の森〉を越えてくる、との情報がある。余の転覆を狙っているとの噂がある。伝説の守護魔法の再現を企てている、との推測もある。大司教、鉦山候に平原候、騎士団長や第二大隊長などが兄上に賛同していると思われる。……偽者は、彼らの駒だろう」

ざわ、と室内が揺れた。

「卿ら騎士団には戦闘経験がない。しかも、大半が王都から引きはがされた状態だ。〈黒の森〉を越えてくる兵は少数だろうが、敵は身内にこそ多い。万が一戦闘になれば、かなり厳しい闘いになるだろう」

「第八大隊を、すべて王宮の警護に回してはどうでしょうか」発言したのはベルルだった。「そうすれば、他大隊が戻ってくるまでの時間が稼げます」

しかし、ララサラは首を振った。

「それは駄目だ。第八大隊には、王都の民を守ってもらわねばならない」

ベルルが言葉に詰まり、それを見てララサラは微笑んだ。

「余のことを考えてくれたのはわかる。しかし、忘れないで貰いたい。騎士団の使命は、王都を、王都の民達を守ることだ。余のことは二の次でよい」

「しかし、陛下！」ジャスが声を上げた。

ララサラはそれを手で制した。

「ああ、自分をないがしろにするつもりはない。……何と言ったらよいか……つまり、余と、卿ら騎士団は一心同体だということだ。わかるか？」ララサラは焦り気味に言葉を探した。「王は頭で、王国が体で、民達が血だとする。そうすると、卿らは……」

「我らは手足である、ということですね？」まとめたのは、第五大隊参謀エルス・ベガールだった。「手足は、体を守るためにあると？」

「そうだ！」我が意を得たり、とララサラが手を叩いた。

「しかし、最も守らなければならないのは、頭ではないでしょうか？」

「……」

エルスが微笑んでいる。頭の回転が速い彼女は、口が達者だ。

「陛下もベガール参謀も極論です。重要なのは双方の釣り合いです。第七大隊参謀次席フナール・トースが割って入る。」

そして、当該の第八大隊長ノースが言った。

「我らは陛下のご意向を尊重いたします。しかし、最低限、王宮に兵力を振り分けることをお許しください」

「……わかった。塩梅は任せる。偽者がどちらに転ぶかで状況は随分と変わるが、味方にできたからといって、それは、ほんの一手だ。予断が許せないのは同じだ」

「どんな状況になれど、不屈き者は蹴散らしてご覧に入れます」と氣勢を上げたのはジャスだった。

「そうだな」ララサラは笑った。

「余が常闇を望んだのは、今の現状を認めたくなかったからだ。父王も母様も師も、誰もが突然に余の前から消えた——消えたと思っただ。そのことを信じたくなかったからなのだ。しかし、今にして思えば、あのとき、余が少しでも周囲を見ようとしていれば、事態は違っていたのではないかと思う」

ララサラの言葉は明瞭だった。

「どこまでできるかはわからない。でも、余は、このアップ・ファル・

サル王国を強き国にしたい。幸せな国にしたい。永き国にしたい。明るい国にしたい。優しい国にしたい。……そのためには、まずこの危機を乗り越えなければならない。今日まで何もしてこなかった王としては、卿らにできるのは願うことだけだ。その力を、余に貸して欲しい。王国の未来のために、余と運命を共にして欲しい」

室内を満たしたのは、熱に浮かされたような沈黙だった。誰もが目を輝かせ、頬を上気させている。

しばしの沈黙の後、ララサラは小さく微笑んだ。誰も何も言わなかったが、室内の空気を感じ取ったようだった。

「では、余は余の役割を果たそう」そう言うと、ララサラはひとり、第八大隊長室を後にした。

残された面々は、しばらく頭を下げたままだった。やがて、誰かがぼつりと呟いた。

「〈早春の息吹〉が戻っていらした……」

ノースは顔を上げた。その場にいた全員が顔を見合わせ、誰からともなく頷きあった。

まず、ジャスとフナールが飛び出していった。彼らの第七大隊はサリユル州への移動を開始している。急ぎ追いつき、引き返させるつもりだろう。

続いて、エルスが部屋を出る。「面白くなってきた」とほくそ笑み、足取りが軽い。マーテチス州にいる第五大隊長を、どう言いくるめるかを考えているに違いなかった。

そして、部屋に残ったノースは、自身の参謀であるベルルとケネフに言い放った。

「さあ、忙しくなるわよ」

ミーネ 4

勝手知ったる王宮内である。ギニーの着古した服を着たララサラだったが、〈奥の宮〉の自分の居室まで、誰にも見咎められることなくたどり着いた。

ララサラの懐には、ノースから手渡された護身刀がある。偽者が、万が一ララサラに危害を加えようとした場合の用心だ。護身刀の重みを感じ、ララサラは一つ大きく息を吐いた。そして、居室の扉に手をかけた。

「……いやああああああ」

部屋の中から叫び声がした。驚いたララサラは、慌てて部屋に飛び込んだ。中は真っ暗だったが、そこは自分の居室である、ララサラは迷わず寝台の近くへと達した。

叫び声の主は、ララサラの気配に気付いたのか、叫ぶのをやめた。

「だ……誰？」

「そなたこそ誰だ」

ララサラは低い声で質した。暗闇の中で、相手がびくっと体を硬くする気配がした。

「……よ、余は、ララサラだ……」

「それで？ 何がいやなのだ？」

「何って……」

「暗闇が怖くなったか？」

「……」

「闇は何もしない。闇に潜んでいるのは、いつだって自分の心だ。疲れたとき、闇は優しく包んでくれる気がする。心細いとき、闇には何か潜んでいるような気がする。誰かと一緒なら、闇はふたりの時間を止めてくれるような気がする。……鏡のようなものだ」

「鏡……」

「私は、闇に溶けてしまいたいと思ったこともある」

「……まさか、陛下？」

寝台の上でばたばたと人の動く気配がした。続いて、ごつつ、と鈍い音がする。「痛っ……」——どうやら、寝台の柱にぶつかったようだ。

ララサラは、暗闇の中部屋を横切ると、手探りで化粧台の抽出を開けた。

「これには気が付かなかったのか？」

青白い光が室内を照らし出す。ララサラの手には〈灯石〉が握られていた。それは、この部屋が真っ暗に改装されてから、リルがこっそり忍ばせてくれたものだった。

寝台の上では、ララサラの寝間着を着た少女が額をさすっていた。ララサラは〈灯石〉を燭台に載せ、手近な卓上に置いた。

偽者の少女は慌てて床に降り、片膝をついて頭を下げた。

「陛下！」

この様子に、彼女は何も知らないのだろう、とララサラは判じた。

「そなた、名前は？」

「ミーネです」

「誰の命で、何故ここにいる？」

「平原候閣下のご命令です。陛下の影武者をするようにと。理由は伺っておりません……」

概ね予想通りだった。ミーネが不安そうな目をしている。ララサラはミーネを立ち上がらせると、鏡の前へと誘った。

「私とそなた……似ているかな？」

ララサラにしてみれば、自分とミーネの相違点などいくらでも見つけることができる。ララサラの方が髪の色がわずかに濃い。身長はミーネの方が少し高い。唇の形が微妙に違う——しかし、それらは些細な点だった。顔の作りが驚くほど良く似ている。同じ格好で、ひとりづつ別々に現れたら、判別するのは難しいだろう。

ミーネは、魅せられたように鏡を見つめていた。ララサララも鏡の中を覗き込みながら、王宮の現状と、ミーネの立場を淡々と語った。

「……偽者……」それだけ呟くと、ミーネは絶句した。

「偽者でも影武者でも、今のそなたは、平原候らが都合良くことが運べるように用意した駒だ」

「あ、あの……陛下！」

鏡の前で、ミーネがずっと腰を落とした。礼法に則った片膝をつく姿勢ではなく、完全に尻を付いてしまっている。「私……わたし……」

「とはいえ、影武者というのは良い考えだ。平原候も人が悪い。私に内緒にしておくなどと」

「？」

「ミーネ。本当に私の影武者をやらないか？　せつかくこんなに似ているのだ。使わぬ手はないであろう」

ミーネは呆気にとられて、言葉が出てこないようだった。

「嫌か？」

「そんな」

「ふふふ。すまん。わざと突き落としておいてから、持ち上げるような真似をして。でも、影武者をやってもらう以上は、事情を正確に知っておいてもらいたかったのだ」

「あの、お伺いしてもよろしいですか？」

「何だ？」

「私が平原候の……あの……ええと」

ララサラはミーネの手を取ると、ベッドに座らせた。そして、自分も並んで座った。

「そなたが平原候の手先だったらどうするのか？　と言いたいのであらう？　それは、言ってもきりが無い。それに、一目でわかった。平原候の手先なら、暗闇が怖くて喚いたりはしないであろう」

「……ひ、ひどいです陛下」

ララサラは笑った。ミーネは顔を真っ赤にしたが、やがてくすくすと笑い出した。笑い出したら止まらず、ふたりはしばらく笑い続けた。

そして、同い年で、顔もそっくりのふたりの少女は、夜遅くまで並んで話し続けたのだった。

翌朝、王宮の門が開かれると同時に、三人の男達がその門をくぐった。

ひとりは顔中に傷があり、ひとりは異様に背が高く、ひとりは小柄で丸顔だった。彼らは、縄でぐるぐる巻きにした子供をふたり、引きずるようにして従えていた。

ひとりは、金色の髪を持ち、翡翠色の瞳をした男の子。

ひとりは、ララサラ女王に良く似た、褐色の髪をした女の子。

王宮の受付で男達は、指名手配の子供達を連れてきた、と言った。

兄妹 1

「ご即位を心よりお慶び申し上げます。女王陛下。お祝いが遅くなり、誠に申し訳ございませんでした」

アップ・ファル・サル王宮の〈玉座の間〉に敷かれた深紅の絨毯の上で、カカパラス・バラオは片膝をつき、深く頭を下げた。

カカパラスが礼をした先には、絨毯の敷かれた十八段の階段があり、その上にはアップ・ファル・サル王の玉座がある。カカパラスの背後には、平原候と鉾山候を筆頭に、大司教や署卿・尚書らが並んでいる。広間の両脇に警護の騎士団が整列しているのは言うまでもない。そして、誰もが、女王と王子の対面を固唾を飲んで見守っていた。

「言祝ぎ、感謝します。兄上。顔をお上げください」

カカパラスが膝をついたまま顔を上げた。

「それにしても、突然のご帰国で驚きました。アップ・タリルの港に到着されるとばかり思っていました」

「デル・マタル王国で懇意になった方が、魔法使いを世話してくださいましたので、それに甘えました。〈黒の森〉を越えるというのは、なかなか貴重な体験でした」

公式には、カカパラスは、この日アップ・タリルの港に到着するところになっていた。しかし、馬に乗ったカカパラスは、唐突に王宮の上空に飛来したのだった。カカパラスの乗る馬には魔法使いが同乗していた。それは、一頭の馬に〈騎士〉と飛翔魔法を操る〈魔法使い〉が同時に乗る〈飛行騎士〉の形態だった。カカパラスは共として、飛行騎士を五騎ほど従えていた。

突然の飛来に驚いた王都警護の騎士団第八大隊は、六騎の空飛ぶ馬に対して矢をつがえた。しかし、先頭を飛ぶカカパラスの馬がアップ・ファル・サル王国の旗を掲げていたため、かろうじて攻撃を思い止まったのだった。

「港湾候が出迎えの準備をしていたと思います。王都警護の騎士団は、敵襲かとさぞ驚いたことでしょう」

「それは失礼をいたしました。しかし、王宮内で魔術師の襲撃などあったと聞きまして、気が急せきました」

「ご心配をおかけしました。それについてはことなきを得ました」

「それは何より」

「では、今宵は兄上のご帰国を祝って宴うたげを開きましょう。留学先でのお話など、楽しみにしております」

そこまで言うと、女王は玉座から立ち上がった。そして、話は終わりだとはかり、壇上脇にある扉へと向かう。

「お待ちください、陛下」

カカパラスが女王を呼び止めた。立ち上がり、ひとと女王を見つめる。〈玉座の間〉を辞そうとしていた女王は立ち止まり、カカパラスへと振り向いた。

「何ですか？ 兄上」

「伺いたいことがございます。よろしいですか？」カカパラスは、幾分強い口調で言った。

「どうぞ」女王は踵を返すと、玉座に座り直した。

「父王と母上はどうなされておいでですか？」

「身内のことは、後でゆっくり話しましょう」

「これは王家のことだ！ 王国全体の話です。皆がいるところで話しをして、何の障りがありませんよう」

「……隠居しておられます」

「居室は〈奥の宮〉か？」

「いえ、マーテチス州の離宮です」

「なんと……王宮から追い出したのか？」

「……」

カカパラスは、ずいとはず玉座へと近づいた。その視線は、女王へと据えられている。

「父王は何故退位なされたのだ？」

「お心の内はわかりません」

「では……、なぜ、次期王が私ではなく、ララサララ、お前なのだ？」

「勅命です」

カカパラスが黙した。下を向き、両脇で拳を握りしめている。その肩が小さく震え始めた。やがて、顔を上げたカカパラスは——笑っていた。

「ふふふ……ははははは。勅命？ 誰の勅命だ？」

「だれ？ 決まっています。前王陛下です」

「本当ですか？」

突然、カカパラスが首を巡らした。そこには、いつの間に入ってきたのか、ひとりの男が立っていた。

無造作に広がる暗褐色の髪。線の細い顔。その場にいる全員が彼を知っていた——誰であろう、パパマスカ・バラオ前王だ。

「どうですか？ 父王」

「余は、そのような勅命を出した覚えはない」

〈玉座の間〉が、しんと静まりかえった。

カカパラスはさらに視線を巡らし、人垣の中の尚書令グラス・ホルシュを見据えた。

「尚書令、卿は誰の命で勅命を発したのだ」

「……はい……」グラスは下を向くと、申し訳なさそうに言った。

「ララサララ陛下です。パパマスカ陛下が退位なされ、カカパラス殿下が不在の今、空白の期間は作れない……国民が納得しやすいのは勅令だから……と」

女王は無言でカカパラスを見ていた。そのとき、壇上、玉座脇の扉から、ひとりの官吏が飛び出してきた。彼は女王の近衛兵に何事か耳打ちをして、急ぎ戻っていった。耳打ちを受けた近衛兵は、女王に近づくと、やはり耳打ちをした。女王は一つ頷き、そして立ち上がった。

「それで？ 兄上は何が仰りたいのですか？」

「わからぬか？」

「……」

「では、はっきりと言わせていただこう。貴様は王には相応しくない！」カカパラスは、大音声と共に女王を指さした。

「実の妹に対して、酷い仰りようですね？」

「実の妹？ たしかに、精霊の秘儀を受けたのはララサラだったようだ。しかし、貴様は別人だ」

「別人？」

ざわ、と〈玉座の間〉が揺れた。ざわめきに乘じて、いつの間にか、平原候と港灣候、そして大司教が、カカパラスの背後に並んでいた。自分達もカカパラスと同意見だ、という構えである。

「数日前に魔術師の襲撃があったそうだが、そのとき、貴様はすり替わったのだろう？ いくら似せても、実の兄の目はごまかせぬ」

カカパラスの言葉に大司教が続く。

「昨日、陛下のご遺体が見つかりました……」

〈玉座の間〉は騒然とし始めた。ことの成り行きが把握できない警護の騎士達が、さすがにそわそわし始めたのだ。

壇上の女王は俯いていた。口元には――笑みが浮かんでいる「……なるほど、そうきたか」

「？」

カカパラスが訝しげな顔をした。

「笑止！」

女王は傲然と顔を上げた。その瞳が、燃えるように輝いている。

女王の一喝に、広間内は水を打ったように静まりかえった。その隙を突いて、数人の警護の騎士が女王の元へ寄り、近衛兵と共に警護の陣を厚くした。一方で、別の数人の騎士がカカパラスと大司教らを取り囲む。こちらは警護ではなく包囲だった。

カカパラスがわずかに身構える。

大司教が顔をこわばらせる。

鉦山候が狼狽^{うろた}える。

平原候が兵を睨め付ける。

それらを見ながら、壇上の女王は大きく両手を広げ、胸を反らせた。

息を吸い、そして声を張る。

——バラオ王家の紅き血

カタラの山の白き峰

タリル川の緑の流れ

日出ずる海の碧き波

父の父の父も生きた

小さき小さき土地に

母の母の母も愛した

豊穡の豊穡の土地に

子の子の子が誇れる

永く優しき国造らん

それは、アップ・ファル・サル王国の国歌だった。

凜とした歌声に合わせて、〈玉座の間〉に萌葱色の光の粒が溢れ、満たした。

それは、紛れもないアップ・ファル・サル王の証——〈行幸の御証〉だ。

カカパラスも、パパマスカも、広間中の誰もが、呆然と漂う光の粒を見つめた。

「そ、そんな馬鹿な！」大司教がひとり、玉座に向かって叫んだ。

女王——ララサラ・バラオその人は言い放った。

「兄上！ これでもまだ余を疑うか？ 実の妹を前に〈偽者〉などと、まるで、〈偽者〉がこの場にいることが、最初から決まっていたようなもの言いではないか？ 大司教もだ。余はここにいるというのに、誰の遺体が見つかったというのだ？ いい加減、戯れ言はやめるがよい！」

ララサララは、昨晚ミーネと入れ替わった。本物のララサララがミーネの振りをしていたのだ——もつとも、女王が偽者に入れ替わっていることを知っている人間は数えるほどしかいなかったのも、それは容易なことだった。

そして、ララサララはミーネとして、カカパラスとの謁見に臨んだ。大司教達の計画は、その場で偽者をあばきたて、ララサララ女王を廃位に追い込むことだったのだろう。当然、暴くのはカカパラスの役目だ。しかし——カカパラスはミーネと会ったことがない。いかな実の兄妹とはいえ、策に溺れる可能性はあった。偽者だと決めつけられた女王が、その実紛れもない本物であったなら、彼は逆に窮地に立たされる。

ララサララはその可能性に賭け、それは現実となった。もちろん、今朝、マリーーと共に男達に連れてこられたのが、入れ替わったミーネだった。

今や形勢は完全に逆転した。

「もう一つ。たった今、王宮の物見塔に〈遠矢文〉とおやぶみが立った」

誰もが、固唾を飲んだ。〈遠矢文〉は長距離連絡用の魔法の矢文だ。緊急事態に際して、各州城から王宮へと放たれる。

「アプセン州からだ。王国の沿岸にアニシャ連邦と思われる艦隊が現れた。これはどういうことか？ 兄上！」

兄妹 2

時は少し遡る。傷の男達に賞金首として王宮に突き出された——もちろん作戦のうちだが——マーリーとミーネは、大司教サン・パウバナの前に引き出された。

ミーネは、ララサラと服を取り替えて王宮を抜け出し、明け方マーリー達の宿屋へと飛び込んできた。マーリーと男達が、本人が戻ってきたのかと勘違いするほど、その姿はララサラに良く似ていた。

ミーネはララサラからの伝言を携えていた。マーリーと男達は、日が昇ると同時にララサラの作戦を実行に移すことにした。——作戦。それは、ララサラがミーネとして王宮で王子を迎え、反逆の意を見せたところで捕らえる。ミーネはララサラとして、マーリーと共に王宮に突き出され、大司教らを油断させる、というものだった。ミーネとララサラは、その作戦を成立させるために、一睡もせずに打ち合わせをしてきたのだった。

「また会ったな、少年」大司教が満足そうにマーリーの顔を覗き込んだ。

場所は王宮内の司青署卿執務室^{しせいしきよう}。マーリーとミーネの背後には、それぞれ騎士が起立している。ふたりは後ろ手に縛られ、騎士に抑えられていた。

「母さんはどこだ!」

「心配せずとも生きている。殺してしまったては元も子もないからな」
「……母さんをどうする気だ?」

「少年。お前は母親の正体を知らなかったようだな。哀れなことだ。しかし、案ずるな。死に目には立ち会わせてやる。〈金翠の歌姫〉が新たな国の礎^{いし}となる、すばらしき瞬間にな!」

大司教は、かかかと笑うと、ミーネへと向いた。

「これはこれは、陛下。何とも言えないお姿ですな」

背後の騎士達は、大司教がミーネを〈陛下〉と呼んだことに、動揺一つ見せる様子がない。彼らもこの謀に荷担している者達だということだった。

「大司教。さっさとこの縄をほどけ」

「そうはいきません。王宮に女王はふたりもいません」

「ふたり？ どういう意味だ？」

ミーネの演技にマリーは舌を巻いた。彼女は、昨日の夜まで女王としてこの王宮にいたのだ。そして、今朝は偽者として連行されてきた。今は、大司教の前で本物のララサララとして振る舞っていて、まるで疑われていない。偽者の存在を知っている者も知らない者も、彼女を前にして自分の先入観を疑うことがない。平原候に教育されたとのことだったが、彼の教育は見事だった、と言うしかないだろう。

大司教はミーネの質問には答えず、にやにやと笑った。

「しかし、今日という日に見つかるとは。やはり、運は殿下にあるということですね」

「殿下？ どの殿下だ？」

「もちろん、カカパラス王子殿下です」

「な……、兄上が生きているのか？」

ことさらに、ミーネが驚いて見せる。

「ああ、陛下には〈王子殿下は行方不明〉ということにしてあったのでしたな。お喜びください。本日戻られますぞ」

「……それで？」

「玉座の偽者を引きずり下ろし、殿下が王になれる。そして陛下……御身は、魔術師と共に王国の礎となるのです」

ミーネは顔面蒼白となった。ララサララと入れ替わらなかったときの、自分の身の上を想像したようだった。

「……礎とは何のことだ？」

手駒が揃ったことへの安堵感からか、大司教の口は軽かった。

「今から百年ほど前、初代ババカタラ王が、王国を中心に発動した

〈操心魔法〉。誰も、王国に対して野心や敵愾心や不満を持たないように、とかけられたその魔法は、百年の時を経て有効だったのですよ」

「伝説の……守護魔法……」

「そうです。しかし、さすがにここ数年は効力が弱くなってきていた。……わかりますか？ 陛下。バラオ王家は、その求心力で王国を運営してきたわけではないのです。魔法の力で、隣国ばかりか王国の民達をも謀^{たばか}ってきたのです」

「……そう言うなら、兄上とてバラオ王家の人間だ」

「勘違いなされては困りますな。私は、百年の操心魔法を否定しているわけではないのです。むしろ、その素晴らしさには賞賛を惜しみません。……〈玉座の間〉の裏に〈王の宝物庫〉と呼ばれる部屋があるのはご存じですか？」

ミーネは首を振った。大司教が勝ち誇ったような顔をする。

「あそこには、龍青玉でできたババカタラ王の像がある。いや……あれは、王が龍青玉に結晶したものだ。そして、それを実現する魔法式も残されている。操心魔法の効力があつた頃は、目に見えていても解読されなかった式……古^{いにしえ}の〈金翠の一族〉が組み上げた式です」

「金翠の……一族」マリーが絞り出すように呟いた。

「そうだ！ かの一族は、自分達が行った魔法の余りの強大さに恐れをなし、西へと逃げたのです」

「何故、魔法を解除しなかったんだ？」

大司教は、哀れみを込めた目でマリーを睨め付けた。

「何故？ それは無理です。操心魔法は魔術師達にも等しく働くのです。自らの記憶の喪失を止めるくらいが精一杯で、王国への敵対行為となる、守護魔法の解除など、以ての外でしょう」

大司教はミーネに近づくと、そのあごに手をやった。ミーネは顔を背けようとするが、背後で騎士が抑えているために思うに任せない。

「瑞々（みずみず）しい命をそのまま龍青玉へと変換すれば、魔力は強大なものになる。只の人よりも王。男よりも女です……」

「だから……余を騙して王としたのか？」

「残されていた魔法式は生きた女王を素体としたものでした。ならば、式の通りが良いだろうと、殿下が仰ったのです。三ヶ月前、我々の前から逃げたことがありましたな？ 陛下。あのとき発見されなければ、偽者に精霊の秘儀を受けさせても良かったのです。そうすれば、それは本当の王になる。バラオ王家の人間である必要はないのです。だから、申し上げました。あなたは精霊の秘儀を受けたから王になるのです、とね」

大司教は喋り足りたのか、騎士達に顎で指示を出すと、ふたりを連れて司青署卿執務室を出た。そして、王宮内をぐるぐると歩き、窓一つない部屋へと入った。

「この入り口も最近見つけたんですよ。以前は〈玉座の間〉からしか入れなかった」

そこは、八本の大理石の柱に取り囲まれた、円形の部屋だった。

床の固い感触は、どうやら金属のようだ。金属の表面には、何やら細かい文字がぎっしりと刻み込まれている。天井はそれほど高くなく、部屋の中央には、祈りを捧げる女性の像が建っていた。よく見なければ気付かないが、像は微かに青白く光っている。

「ババカタラ王……？」 ミーネが呟いた。「じゃあ、ここが……」

「そうだ。〈王の宝物庫〉だよ」

マーリーは呆然と室内を見渡した。壁に灯された数少ない蠟燭が、ぼんやりと室内を照らしている。その暗がりの中、マーリーは、反対側の壁、像の向こう側に人影を認めた。

「母さん！」

「さて少年。お前には、〈金翠の歌姫〉に対する人質となっておりますよ」

兄妹 3

「で……殿下！ 艦隊とはどういうことですか？」

平原候ジョシュ・マーテチスが、慌てた口調でカカパラスに質した。

「どうということは無い。アニシャ東方三国の連中が、連邦脱退のための切り札を欲しがっていたからな。この国はどうだ、と言ってやっただけだ」

「し、しかし！」

「案ずるな。俺が王になったら、すべての国を一つにまとめる」
平原候は絶句した。

「ララ！ お前も意外とやるではないか。穩便にことを済ませよう
と思っていたが、予定が狂ってしまった。大司教、失態だな」

「面目ありません」

大司教は、女王が入れ替わっていたことの動揺を、未だ引きずったような顔をしていた。

「兄上！ 先ほどの言葉、反逆罪と見なして拘束する」
カカパラス達を包囲していた騎士達が、ずいっと包囲の輪を縮めた。

「さて、できるかな？」

言うが早い、カカパラスは懷から何かを取り出して放り上げた。
「！」

刹那、〈玉座の間〉に目映い閃光が迸った。〈灯石〉を基盤に開
発された〈閃光石^{せんこういし}〉だ。本来なら、〈玉座の間〉は〈魔法封じ〉が
施されているため、魔法武具は使えないはずなのだが――

「大司教か！」

ララサラが気付いたときには、カカパラスは包囲の騎士を蹴散らしていた。ララサラが王宮にいなかった四日間で、大司教は王宮中の〈魔法封じ〉をすべて解除していたようだ。

「陛下！ ご無事ですか」

〈玉座の間〉にノースの声が響いた。カカパラスの帰国のどさくさに紛れて、第八大隊はかなりの数〈玉座の間〉に潜り込んでいた。先ほど、真っ先に動いた騎士達も第八大隊だった。

「ブリーチス大隊長！ 飛行騎士に気をつけろ！」

「遅いな」

ララサララが叫んだときには、カカパラスが壇上まで駆け上がった。近衛兵と騎士達が倒されている。

同時に、〈玉座の間〉の外、王宮内で、雷が落ちたような轟音が響き渡った。

「兄上！」

睨み付けたララサララを、カカパラスは剣の柄で殴りつけた。ララサララの小さな体は飛び、玉座に叩き付けられた。

「ぐ……」

「王宮の〈魔法封じ〉を過信したな？ ララ。これでおしまいだ」
カカパラスと同行してきた飛行騎士達——魔法使い六人と騎士五人——は、王子の賓客^{ひんきやく}として別室で歓待されていた。もちろん、武装解除は行った。しかし、魔法使いだと思われた六人が魔術師ならば、武装解除など意味はない。魔術師は、魔法具がなくても魔法を使うことができる。

「もうすぐ、新たな飛行騎士達が〈黒の森〉を越えてくる。沿岸からの侵攻も始まるだろう」

「それで？ この国を荒らして、兄上はどうするのだ？ 百年前と同じように、陥落直前に守護魔法をかけようというのか？」

「そんな馬鹿の一つ覚えはしない。こんなちっぽけな国は、俺の礎となりさえすればいいさ」

「？」

カカパラスは、ララサララの首根っこを掴むと、壇の下へと投げ落とした。背中から落ちたララサララは、呻^{うめ}いて気を失った。

「陛下！」

ノースが駆け寄る。しかし、ひとりの騎士が立ちはだかった。ミューカス第二大隊長だった。

「ミューカス大隊長！ 陛下を裏切るのですか？」

「カカパラス殿下が正当な次期王陛下だ。それがわからぬか、ブリューチス大隊長！」

「正当？ 今はララサラ陛下が王だ！ それが現実です！」

ノースとミューカスの剣が交わった。金属と金属がぶつかる鋭い音が響き、力が拮抗する。その間に、カカパラスは壇から降りると、ララサラを抱え上げた。

「その女騎士、考え直すなら今のうちだ」カカパラスが言う。

「何？」

「ララに何を吹き込まれたか知らないが、所詮子供の考えることだ。この国の人間は臍抜けだからな。力がすべてだということを教えてやる。大司教、やれ」

「はい」

ノースが何も言い返せないうちに、轟音と突風が〈玉座の間〉を満たした。朦々と立ち上る煙と埃が晴れると、玉座と階段は無惨に破壊され、そこに大きな穴が開いていた。穴の向こうには、円形の部屋が覗いている。大司教が破壊の魔法を使ったのだった。

呆氣にとられたノースの一瞬の隙を突いて、ミューカスの一撃が脇に入った。ノースは横様に吹っ飛ばされ、床に叩き付けられた。

〈玉座の間〉は騒然となった。騎士達が入り乱れ、怒号が響き渡る。そこに、さらなる衝撃が、焼け付くような輝きと共に叩き付けられた。その狙い澄ましたような〈魔法の雷〉^{いかずち}は、外に面した窓という窓を砕いた。その窓の破片を踏み越えて、六人の魔術師と五人の騎士が姿を現した。もちろん、カカパラスがデル・マタル王国から引き連れてきた飛行騎士達だ。魔術師は全員深紅の外套を、騎士は深紅の甲冑^{かっちゅう}をつけている。居並ぶその姿は、悪い夢のようだ。王宮内では、急ぎ戻ってきた騎士団第七大隊先行部隊が応戦していたはずだが、彼らは傷一つ負っている様子がない。

「いくぞ」

ララサララを抱えたカカパラスに続き、大司教と六人の魔術師達が、円形の部屋へと入っていった。五人の騎士は、部屋の入り口を塞ぐように仁王立ちになった。彼らが剣を鞘から抜く冷たい音が、瓦礫の山と化したへ玉座の間へに冷たく響く。その威圧感に、広間中が息を飲んだ。

時を同じくして、すっかり見晴らしの良くなった窓の外に、新たに飛来する三十騎ほどの飛行騎士の姿が認められた。

兄妹 4

「大隊長！ しっかりしてください大隊長！」

「……ベルル？」

「大隊長。良かった」

「状況を……痛っ」

起き上がろうとしたノースの左脇腹に、鈍い痛みが走った。甲冑に守られていたとはいえ、ミューカスの一撃に、肋骨が何本かやられたようだった。

玉座の下に開いた大穴の前では、深紅の騎士と、鋼の甲冑をつけたアップ・ファル・サル王国の騎士が睨み合っている。深紅の騎士側に立つ鋼の数人は、第二大隊の王子派の騎士だろう。深紅の騎士達はかなりの手練れで、状況は膠着しているようだった。

「この場合は最低限現状維持ということで、王宮と王都の警護に人員を割きました。王子殿下が連れてきた連中は、全員あの中に入りましたからね。今、他の入口を捜させていますが、あんな部屋誰も知りませんでしたから、まだ見つかっていません。それから、ジャジャフ大隊長が、第六大隊を説得してくれました。第七大隊と第六大隊の本隊が、先ほどサリユル州から王都に戻りました。今、新手の飛行騎士団と交戦中です。ジャジャフ大隊長は、サリユル州軍の半分ほども引っ張ってきてくれました」

ノースは痛みを堪えて何とか立ち上がった。

「王都の住民は建物から出ないように徹底して。街中まちなかにいる第八大隊本体は、住民の安全を最優先。サリユル州軍の力を借りて頂戴。それから、飛行騎士団の目標は王宮だろうから、第六・第七両大隊には、応戦しつつ王宮の警護も固めるようにお願いして」

ベルルは、ときぱきと周囲に指示を飛ばした。

「沿岸はどうなの？」

「〈遠見鏡〉を繋いだアップセン州城との連絡が王子派に抑えられて

いて、はつきりしません。ですが、アプセンの王都州城に確認したところ、港灣候閣下が現地に到着されたのは間違いないようです。こうなると、閣下が陛下の後見を名乗られたことが効いてきますね。第一大隊も第三大隊も閣下の指揮下に入るでしょう。ルカシア大隊長の第五大隊は、アプセン州へと援護に向かうようです。第四大隊の動向はわかりませんが、ベガール参謀辺りが、上手く説得すると思います」

「〈遠見の間〉を押さえているのは誰？」

「バンドス騎士団長とシュコーチス副騎士団長です。第二大隊の王子派は約半数……といったところですね。状況を見て、王子派には与せず、という第二大隊の中隊小隊も多いようです。ですから、数ではこちらが圧倒しています。それで、あのふたりを裏切り者と解釈すれば、現状の騎士団の最高指揮権はカルサマル副騎士団長にあることになります」

「カルサマル副騎士団長はどこ？」

「飛行騎士を迎え撃っていると思います」

「エクスーラ中隊長、この場はいったん任せる」

「はい」

ノースは部下に言い置くと、後ろ髪を引かれつつ〈玉座の間〉を後にした。ベルルが付いて来る。

「大隊長」

「なに？」

「〈魔法封じ〉が解除されているのはわかっていたのに、無謀だったんじゃないませんか？」

「だから、陛下は何重にも護身魔法をまもっていらっしゃるわ。しばらくは大丈夫よ」

王宮内の〈魔法封じ〉が解除されていることは、昨日の段階でわかっていた。しかし、ララサラだけではかけ直すことはできなかったし、その時間もなかった。深紅の魔術師達についても、カカパラスを油断させるためには、王宮内に招かざるを得なかったのだ。

「しかし、このままでは、いずれ王子殿下の思う壺になってしまうのではないですか？」

王宮内を早足で歩きながら、ノースは目に付いた部下達に指示を飛ばした。深紅の魔術師と騎士達が暴れた傷跡は大きく、怪我人も多く出ているようだった。

「私は最近、王子殿下の思惑通りには進まないのではないか、と思うようになったのよ」

「どういことですか？」

「考えても見て？ 百年も前に、人を素体として龍青玉に変換する技術があったのよ。この王国では封印されたとしても、百年の間に、どこかで同じような技術が開発されても良さそうなものじゃない？ そんな研究をしている魔術師や魔法使いはごまんというでしょう？」

「たしかに……」

「人でなくてもいい。鳥でも植物でもいいんじゃない？ 出来上がった龍青玉が内包する魔力の多寡はともかく、龍青玉という〈魔力の器〉が造れるなら、これだけでも有意義なことだわ。でも、それは実現していない。きつと、なにか致命的な欠点があるのよ」

「欠点？」

「私の勘。おそらく、王子殿下の企みは成就しない。最悪、ララサラ陛下を贄^{にえ}とすることが成功したとしても、最終的に魔法は失敗すると思うわ」

ふたりは王都が見渡せる露台へと出た。上空では、〈黒の森〉を越えてきた飛行騎士団に対して、第七大隊が大型の〈魔法弩〉で対抗している。第六大隊は、遅ればせながら飛行騎士を数騎用意しているようだ。

ノースは父の研究帳の記述を思い出した。百年前、アップ・ファルサル王国軍は、マーテル王国軍のこの戦法にやられたのだ。数は少なくとも、空から縦横無尽に降り注ぐ魔法の攻撃や、所構わず飛び込んでくる騎士達は脅威だ。そして、百年前に得たはずの戦訓は、

守護魔法によって、戦の記憶そのものと共に失われてしまっている。以降、この国は戦の経験がない――

それでも、百年を超えたアップ・ファル・サル王国騎士団の歴史が、なんとか戦況を五分に保っていた。

「その先はどうなるんですか？」

「さあ。そこまではわからないわ。でも……そうね、なんとかならんんじゃないかしら？」

「根拠がわかりません」

「勘よ。それに、陛下には精霊のご加護があるもの」

――萌葱色の、優しい精霊の加護がある。ノースは、ファル・ベルネの町で見た〈行幸の御証〉を思い浮かべていた。あれは、ララサラがこの土地の精霊に愛されている証だ。

「だから、王宮と王都は、何が何でも私達で守るわよ！」

ノースは、少し離れた露台に、カルサムル副騎士団長の姿を認めた。彼の元、騎士団の指揮系統を再構築し、陛下の信頼に応えなければならぬ。

陛下は大丈夫――大丈夫と信じて。

ババカタラ王 1

ララサララの意識は闇の中を漂っていた。暖かい闇だった。

(……?)

誰かに呼ばれた気がした。

上も下も、右も左も、前も後ろもわからない中、ララサララは辺りを見渡した。すると、闇の中に、金色に淡く光る小さな輝きを見つけた。そこに意識を集中すると、輝きは大きくなり、すぐ近くまでやってきた――いや、ララサララが近づいたのだろうか？

(私に呼びかけたのはそなたか?)

(陛下?)

何故気が付かなかったのか、輝きの正体はルーリーだった。

(呼びかけたのはそなただったのか?)

(いいえ。私も、誰かに呼ばれました)

闇の中で、ララサララとルーリーは顔を見合わせた。ここがどこだとか、自分達はようになったのか、等という疑問は浮かんでこなかった。お互いの姿が見える以外は、やはり闇のままだ。

(また聞こえた)

(私も聞こえました)

それは微かな声――まるで、残響のような声だった。

(子らよ……)

ララサララは声に意識を集中した。そして、今にも消えそうな、青白い輝きを見つけた。それは――

(我が遠き子らよ……)

気が付くと、柔和な微笑みを浮かべた女性が、ララサララとルーリーに正対していた。

(始まりの母……ババカタラ王か?)

ララサララの問いに女性は頷いた。

(アップ・ファル・サルの子……、そして、金翠の子……百の年月をとしつき

越えて、ここにこうして集うたのも運命さだめか）

女性――ババカタラ王は、大きく手を広げた。

（今こそ、子らに……失われた真実を……）

闇が、ざわと揺れた。

ララサララとルーリーの意識は、大波にさらわれたかのごとく、

彼方へと押し流された。

ババカタラ王 2

アップ・ファル・サル王国暦十九年。長月十日。

アップ・ファル・サル王宮の〈玉座の間〉は、悲愴な空気に包まれていた。

十二日前にアップ・タリルの港の沖合に姿を現した、テルメノ王率いるマーテル王国軍は、破竹の勢いでアップ・ファル・サル王国を侵攻していた。二日前には、王都ファル・バラオの守りが破られ、残るはこの王宮のみとなっていた。

建国から十九年目のアップ・ファル・サル王国には、十分な兵力がない。元々、山から海にかけての小さな町や村の寄り合いだ。自衛と称して、各州に数千人ずつの兵と、王都に千人程度の騎士がいるにはいるが、彼らの普段の仕事は戦^{いくさ}ではない。治安維持を担当し、役人の末端として機能し、橋や道を作る土木工事をして、日々過^{すご}ごしていたのだ。そんな彼らが、戦い慣れた二万の軍勢に曝^{さら}されたらどうなるか。結果は火を見るよりも明らかだった。

それでも、彼らは、魔法武具という優位があるので何とかなるだろうと思っていた。アップ・ファル・サルで造られる魔法具や魔法武具は、他国のそのの追隨を許さない精緻^{せいちゅうみょう}巧妙さだった。〈魔法槍^{まほうそう}〉一本とっても、並のそれ五本分に相当する威力を発揮する。

しかし——結局は使う人間次第なのだということを、アップ・ファル・サル王国の兵達は知ることとなる。

開戦から六日目。アプセン州とマーテチス州の州境付近で、何とかマーテル王国軍を押し止めていたアップ・ファル・サル王国軍は、突然、南側面から新手の攻撃を受けた。王国の南には、一度入ったら二度と抜けられぬといわれる広大な〈黒の森〉が広がっている。そのため、アップ・ファル・サル王国軍は、南側にはまるっきり注意を払っていなかったのである。それに対してマーテル王国軍は、馬一頭に魔法使いと騎士をひとりずつ乗せるといふ組み合わせで、飛

翔魔法を使って馬ごと〈黒の森〉を越える攻撃に出た。後に〈飛行騎士〉と呼ばれることになるこの編成は、アップ・ファル・サル王国軍の度肝を抜いた。飛来したのはたった十騎だったにもかかわらず、アップ・ファル・サル王国軍は総崩れとなり、態勢を立て直すことができないまま、雪崩^{なだれ}を打って王都ファル・バラオまで後退することになってしまったのだった。

「進退窮まりましたな」

宰相ゲルニス・ガダーテンが重々しく言った。誰もが思っていたが、誰も口にしないでできた言葉だった。言葉にしたが最後、それは動かぬ真実となってしまう。しかし、ゲルニスは自らの宰相という立場を良く理解していた。

「陛下、ご決断のときです」

〈玉座の間〉に居並ぶのは、宰相を筆頭にした王宮の役職者達、騎士団長や参謀、そして、王都まで追い込まれてしまった諸侯達だった。宰相の言葉を受けて、彼らの視線は一点に集中した。

「ゲルニスの言う通りね」

全員の視線を受け止めて、アップ・ファル・サル王ババカタラ・バラオは言った。装飾の少ない暗赤色のドレスの上に革の鎧をつけ、腰には銀の剣を帯びている。その頭上に王冠はなく、龍青玉をあしらった額飾りつけていた。すでに五十歳を過ぎた女王の藍色の瞳には、疲労が色濃く表れていた。

広間の中央に置かれた大きな卓上には、アップ・ファル・サル王国の地図が置かれている。王国軍を表すしるしは、今や王都ファル・バラオにしかない。赤い筆跡は、マーテル王国軍が刻んだ傷だ。地図に向かい合い、女王は厳しい表情を湛えていた。

「テルメノ王は、この国の魔法技術が欲しいのよね。ということは、王宮が落ちれば民達は助かるでしょう。でもその場合、あなた達を辛い目に遭わせることになるわね」

ババカタラは広間内を見渡した。

「陛下。我々は陛下と共にあるを喜びとしています。誰も、自分だ

け助かりたいなどと考えている者はおりません」

騎士団長ミザル・サナイの言葉に、広間中の人間が頷いた。

「ミザル、皆もありがとう。最後に少しだけ時間を頂戴。半時ほど

……心の準備がしたいわ」

誰もが無言で頷くと、〈玉座の間〉を後にした。ババカタラは、地図上の王都ファル・バラオを愛おしそうに撫でると、卓の前から踵を返した。

ババカタラ王 3

「やはりこちらでしたか、陛下」

「レーヌ……見つかってしまいましたね」

ババカタラは振り返らずに言った。眼前には、アパ・カタラ連峰に傾いた太陽がある。あと半時（約一時間）もすれば、美しい夕焼けを見ることができるようだろう。そこは、八本の大理石の柱に囲まれた、小さな円形の部屋だった。〈玉座の間〉の隣にあるここは、王の瞑想室だ。王宮建設時に、ババカタラが望んで造らせたものだった。小さな丸いこの部屋で瞑想をしていると、ババカタラはとても落ち着くことができた。臣下達はそれを知っているので、むやみやたらと入室してこない。入ってくるのは、王夫と王子、そして、大司教レーヌ・ファブナックぐらいだった。

「ついにご決断なさると伺いました」

レーヌは、金髪と翡翠色の瞳を持った、五十絡みの背の高い男だった。

「耳が早いですね。そういうことだから、あなたにも迷惑をかけます」

「迷惑？」

「旧王家と親しかった司教を、テルメノ王が見逃すとは思えません。あの国は、精霊信仰はあまり盛んではないとも聞きますし」

「なるほど」

レーヌは苦笑しつつ、女王に並んで立った。小さな窓から、アパ・カタラ連峰の威容が見て取れる。

「王夫殿下と王子殿下はどうなされましたか？」

「あの人は、最後まで王宮に残ると言っています。息子達も、騎士団と共に最後まで戦うと……。あの子達も大人ですから、本人の判断を尊重します」

ババカタラは苦悶の表情を浮かべた。女王の夫である王夫ダイダ

カス・バラオも、ふたりの王子、サカスルスとククムクも、降伏して王宮を明け渡した後、命を赦されるとは思えない。

「私は、この国をつくるとき、民達と約束しました。皆の生活を私に預けて欲しい。その代わり、私は全身全霊でこの国のために働くからと。だから、いざというときは、命に代えても守らなければなりません。国ではなく……民達を……」

「……」

「あの人も、あの子達も、それはわかっているのでしょうか」

「陛下。そのお命をかけると仰るなら、一つだけ手があります」

「手？ なんの手ですか？」

「マーテル王国軍を追い返す手です」

ババカタラはレーヌを正面から見据えた。

「この期に及んで、私を使ってどんな実験をするというのですか？」
ババカタラは含み笑いをしながら訊いた。レーヌは一瞬呆気にとられ、そして笑い出した。

「ははは。さすがは陛下。お見通しですか」

「何年、あなたと付き合っていると思っているのですか？ まだ、

この王国が形もなかったころからですよ」

「そうですね……。陛下。私が、人の手で龍青玉を造ろうと研究していたことはご存じですよね？」

「ええ」

「龍青玉を一欠片と素体になるものを用意して、その素体を龍青玉の結晶に変換することには成功しました。素体になるのは、植物とか鳥や動物……命あるものです」

「まあ、初耳です」

「見た目だけ……なのです。例えば、薔薇の花を使うと、綺麗な青い薔薇の形をした龍青玉らしきものができます。でも、龍青玉として魔力を引き出すことができないのです。その青い薔薇の玉に、魔力はあるように感じます。でも、引き出すことができない……」

「どういふことですか？」

「あくまでも仮説ですが、結晶化した命の〈意志の方向〉にのみ、魔力が発揮されるのではないかと思います。掘り出された龍青玉は、素になつた魔竜の意志が永い年月で風化し、力だけが残つたのではないかと。そして、結晶したばかりの龍青玉の魔力は、素体の意志を色濃く反映するのではないか……」

「……つまり、私がマーテル王国軍を滅ぼしたいと思って結晶化すれば、私の命を攻撃魔法に変換できる……そういうことですね？」

レーヌは頷いた。頷いて、それから、ゆっくりと首を振った。

「考え方はその通りです。でも陛下、あなたは攻撃など望んでいないでしょう？」

ババカタラが目を丸くした。

「何年、陛下とお付き合っていると思っていますか？ 陛下の望みは、この国の平和。民達の幸福。心の奥底がそれで占められている以上、うわべだけ攻撃を望んでも、それは実現しないでしょう」

「つまり？」

「操心魔法です。陛下の結晶に込められた〈王国の平和〉という魔力を、王宮を中心に、無差別な操心魔法として発動するのです。そうすれば、マーテル王国軍は戦意を喪失して、これ以上、王国の平和を脅かすことはなくなるでしょう」

ババカタラは腕を組んで考え込んだ。

「レーヌ、それはあくまでも仮説ですよ？ 失敗したらどうなりますか？」

「二度と戻れません」

「そうですか……」

それからしばらくして、〈玉座の間〉に主立った人々が再び集結した。ババカタラ女王は、翌朝、マーテル王国軍に降伏する旨を決定したのだった。

ババカタラ王 4

小さな丸いその部屋の、窓という窓が目張りされた。床には、魔法文字がびっしりと刻まれた金属板が敷き詰められている。

「レーヌ。あなた、随分前から準備をしていましたね？」

ババカタラに睨まれて、レーヌは肩を竦めた。

「使うことになるとは思いませんでした」

部屋の中にいるのは、ババカタラとレーヌのふたりだけだった。時刻は明け方近いはずだったが、窓が塞がれているため、外の様子はわからない。松明の頼りない灯りの中、ふたりは向かい合って立っていた。

「よろしいのですか？ 陛下」

「大丈夫。あの人と息子達には話をしました。でも、魔法が成功すれば、忘れてしまうかも知れませんが……。それに、もし失敗しても、日が昇ればゲルニスが降伏の手続きをするでしょう。それよりも、あなたは良いの？ レーヌ」

「何がですか？」

「国を横断するような強力な魔法……。あなたの体とて、保たないでしょう」

「さあ、それはやってみなければわかりません。何しろ、誰も試したことがないのですから」

「本当に、試したことがないの？」 ババカタラはレーヌを睨み付けた。

「……さすが、隠せないですね。結晶化は、二度、人で試しました」「なんてことを」

「罪人です。もちろん、結果は芳しくありませんでした。事前に操心魔法で王国の平和を願うようにしていたにもかかわらず……。です。心からの願いでなければ無理ということですね。それに、陛下は精霊の秘儀を受けておられる。きっと、精霊の力も引き出せるのでは

ないかと思います」

ババカタラは、自分の首から首飾りを外した。銀製の下げ飾りの中央に龍青玉があしらわれた〈魔法返し〉の首飾りだ。ババカタラは、それをレーヌの首にかけた。

「陛下？」

「強大な操心魔法は、成功すれば、あなたの心も操ってしまうかも知れません。これは、お守りです。それに、これから魔法にかかる私がつけていては困るでしょう？」

レーヌはその下げ飾りを裏返してみた。〈蒼天そうつんを駆かける紅あかき風へ

〉と掘ってある。三十年以上前に、まだ若かりしレーヌが、ババカタラへと贈ったものだった。当時は、ババカタラは王ではなかったし、レーヌも大司教ではなかった。

「お互い、随分遠いところまで来ましたね？」ババカタラが言った。「守るものも、失うものも何もなかったあの頃が懐かしいですね」レーヌが言った。

ふたりの盟友は、しばし、思い出に身を浸し、お互いを見つめ合った。

「さあ、レーヌ・ファブナック大司教。始めて頂戴」

振り切るようにババカタラが言い、部屋の中央に立った。昼間と同じドレスを着ているが、革の鎧はつけていない。髪は綺麗に結い上げられ、額には龍青玉の額飾りが光っている。

レーヌは部屋の隅まで下がると、足を肩幅に開いて仁王立ちした。「我はレーヌ・ファブナック。金翠の父母と我が名において願ひ奉らん。この地により従たる命の炎を、輝く青き力に換えん。先ずは集えよ！ 精霊達よ！」

部屋中に敷き詰められた金属板が、緑がかった金色に光った。魔法文字がレーヌの詠唱に反応したのだ。そして、ババカタラの額の龍青玉が青白い光を帯びる。ババカタラは手を胸の前で握り、目を閉じた。

丸い部屋の外側から中心に向かって、金翠の光の波が幾重にも集

まる。それは、水に石を投げ入れたときにできる波紋と、ちょうど逆の流れだ。集まった光は次々とババカタラに降り注ぎ、彼女に吸収されていく。一方、ババカタラの額の龍青玉は目映く輝き、その青白い光がババカタラの体を包み込み始めた。

頃合いと見たレーヌは、左右に大きく手を広げて胸を張り、そして叫んだ。

「結べよ！」

ぱんっ！ とレーヌが胸の前で手を打ち合わせた。それに合わせて、ババカタラを包んでいた青白い光が弾けた。部屋を青白い光が満たし、何も判別が付かなくなるほどの輝きに包まれ、そして、それは唐突に一点に収束した。

レーヌが、思わず瞑ってしまった目を開くと、部屋の中央には、青く輝く龍青玉の像があった。それは、手を胸の前で握り合わせた祈りの態勢のまま、魔力を湛えた龍青玉と結晶したババカタラの姿だった。

レーヌは、胸につるした首飾りを握った。そして、いったん目を閉じて気持ちを落ち着けると、ババカタラへと近づいた。

「ババカタラ……さあ、行くよ。我々の国を守ろう」

レーヌは像の前に立つと、胸の前で手を組み合わせた。

「我はレーヌ・イス・ファブナック。金翠の父母と我が名において、命を賭して願ひ奉らん。青き力眠る白き山と、大いなる海に見守られし、この豊穰の大地に、民達の安寧が永久にもたらされんがため、母なる王ババカタラ・バラオの想いを形になせ！ 言の葉を司る音の精霊達よ！」

光が弾けた。

ババカタラを中心に広がった魔力を乗せた光の波が、王宮の壁を抜け、王都を越え、州を越え、国を超えて広がっていくのを、レーヌは感じた。一方で、レーヌは、自分の頭の中が、何かに探られているような不快感を覚えた。それは、術者にさえも効力を及ぼす強大な操心魔法が、確かに発動した証だった。レーヌは、目の前の龍

青玉に、自分のすべてが吸い込まれていくような錯覚を覚えた。体力が急激に抜け、立っていられなくなり、膝から崩れ落ちる。

（レーヌ……レーヌ）

動くこともできないほど憔悴したレーヌの耳に、ババカタラの声が響いた。

（レーヌ。魔法は上手くいったわ。でもこれは……想像以上に……）
「……想像以上に？　なんだ？」レーヌは呟く。

（大地の精霊から力が流れ込んでくるわ……これは、この先何十年も続きそうなほど大きな……）

「……何十年？　……ババカタラ、君は意識があるのか？」

（……ええ）

レーヌは愕然として、うつろな瞳をババカタラの龍青玉へと上げた。

「君は……、何十年もそのまま……」

（レーヌ。でも、これで王国は救われるわ。ありがとう。私はここから、この国を見守ることにする……）

「……」

（この魔法の事実には、あなた以外誰も気が付かないでしょう。今回の戦いの記憶さえ……国内ではいづれ消える。レーヌ、だからあなたは西へ行って。魔法が切れるまで何十年かかるかわからないけれど、この記憶を語り継いで頂戴。そして、いつかまた魔法が切れた頃に戻ってきて、子供達に真実を伝えてくれると嬉しいわ……）

レーヌの足下には、龍青玉が砕けた首飾りが落ちていた。〈魔法返し〉は、間違いなく効力を発揮したようだった。

「ババカタラ……」

レーヌは辛うじてそれだけ呟くと、そこに突っ伏して気を失った。金色の髪が、真っ白になっていた。

アプ・ファル・サル王国暦十九年。長月十一日。

その日、まだ日が昇る前に、王国全土で、空が青みがかった金色の光で満たされた。それは一瞬で、唐突に現れ、唐突に消えた。

日が昇ると、マーテル王国軍は肅々と撤退を始めた。アップ・ファル・サル王国の人々は、それを当然のように見つめていた。

戦の復興は速やかに行われ、王宮では、サカスルス・バラオが二代目アップ・ファル・サル王として即位した。ババカタラ王の退位については、誰も何も言及しなかった。

王の〈瞑想の間〉は封印された。そこで発見されたレーヌ・ファブナックは、衰弱著しかったが、一命を取り留めた。そして、体力が回復すると、一族を率いて王国を後にした。

そして、戦の記憶は失われた――

魔法 1

縄で縛られたマリーは、〈王の宝物庫〉壁際の床に転がされていた。

すぐ脇では、ミーネが椅子に括り付けられていた。彼女の額には龍青玉の額飾りが光っている。それは、ババカタラ王の像の額にあるものと良く似ていた。

部屋の反対側の壁に吊されたルーリーは、相変わらずぐったりと目を閉じていて、マリー達に気が付いた様子はない。革の猿轡が痛々しく、マリーの胸を締め付けた。

大司教と騎士達はどこかへ行ってしまった。〈玉座の間〉では、ララサララとカカパラス王子の謁見が行われているはずの頃合いだった。

「私、上手く陛下を演じられたかしら」ミーネが呟いた。

「うん、上手だった。大司教は完全に騙されていた。作戦は成功だね」

「よかった」

ミーネが微笑んだ。右の頬に小さなえくぼができる。それはララサララにはないものだ。

「マリーさん。あなたのこと、陛下から聞いたわ」

「なんて言ってた？」

「歌がとても上手なんですってね？」

「ありがとう。一応、それで食べているからね」

「屁理屈もとても上手だった」

「……」

「それから、翡翠色の瞳が綺麗で、とても好きだった」

「え？」

「あ、これは言ったらまずかったかしら」

マリーはしばし言葉を失い、ミーネは少し悪戯っぽい表情をし

た。

「ねえ、あなたから見た陛下ってどんな方？」

「意地っ張りかな」

「それから？」

「我が儘」

「うん」

「でも、人一倍責任感の強い、素敵な女の子だよ」

ミーネが、椅子の上からマリーリーを覗き込み、何か言おうと口を開いた。そのとき――

どーん、という大きな音と衝撃と共に、室内に朦々（もうもう）と煙とも埃ともつかないものが舞った。マリーリーとミーネは驚き、目を瞑り、咽せ上げた。

やがて室内が晴れると、壁に空いた大きな穴が露わになった。薄暗かった室内に光が差し込んでくる。

崩れた壁の瓦礫を乗り越えて、まずパウバナ大司教が現れた。大司教はまっすぐミーネの前まで来ると、その椅子を蹴り倒した。

「この女狐が！　とんだ恥をかかされたわ！」

大司教は懷から護身刀を取り出すと、鞘を捨て、切っ先をミーネへと向けた。

「やめておけ、大司教」後から入ってきた若い男の声が大司教を諫めた。「それだけララに似ているのだ。ここで殺してしまうのはもったいない。使い道は幾らでもある」

大司教は不請不請頷くと、ミーネの顎を蹴り上げ、護身刀を収めた。

「ん？　こいつは何だ？」

床に転がされているマリーリーは、このときになってやっと、若い男が誰かを抱え上げていることに気が付いた。あれは――

「ララ！」

マリーリーは、精一杯体を伸ばし、男を見上げた。褐色の短髪と藍色の瞳、大きな体躯。ララサララの兄、アップ・ファル・サル王国第

一王子カカパラス・バラオだろう。

「ああ、歌姫の息子か。しかし、魔術師ではないのだろうか？」

「〈金翠の歌姫〉に対する人質になるかと……」と大司教。

「ふん」カカパラスは、早くも興味を失ったようだった。

室内には、深紅の外套をまとった人物が五人、何やら作業を始めていた。ひとりがミーネへと近づくと、彼女の縄を解き、椅子だけを持ってその場を離れた。大司教に顎を蹴られて気を失ったミーネは、その場に放置された。

外套達は、ババカタラ王の像を部屋の隅へと移動し、代わりに中央に椅子を置いた。カカパラスが椅子にララサララを座らせると、手早くララサララを椅子に括り付ける。何があったのか、ララサララもぐったりとしていた。

続いて彼らは、ララサララの体をまさぐり、いくつもの小さな龍青玉を引っ張り出した。護身魔法として、ララサララのドレスに仕込まれていたものだろう。そして、すべての護身魔法を外したことを確認すると、額に龍青玉の額飾りを付けた。それは、さっきまでミーネの額にあったものだ。

壁に空いた穴からは、金属と金属がぶつかり合う嫌な音が響いてくる。人々の怒声、悲鳴、足音がそれに混じる。マーリーは五感を研ぎ澄ませた。

ララサララがカカパラスに捕まっている——ということとは、作戦は失敗したということだ。このままでは、ララサララが龍青玉にされてしまう——

（魔法返しを……）

突然、マーリーの耳に女性の声が響いた。驚いたマーリーは周囲を見渡した。ミーネは気を失ったまま。近くにそれらしい人物はいない。

（その首飾りが、また、金翠の子によってもたらされるのも巡り合わせか……）

唐突に、マーリーの頭の中に映像が浮かんた。この部屋の中で、

赤褐色の髪的女性と金髪の男性が向き合っている。女性の顔には見覚えがある――ババカタラ王だ。王は首飾りを外すと、男性の首にそれをかけた――

「魔法返し……」

今、自分の首にかかり、服の下に隠れているルーリーの首飾り。ララサラは魔法細工だと言っていた。下げ飾りに龍青玉がはめ込まれ、完全な形となったそれは、かつてはババカタラ王の首にかかっていたもの――〈魔法返し〉の魔法具だということのか。

マーリーは苦勞して首を巡らし、部屋の隅へと追いやられたババカタラ王の像を見た。

（この首飾りでララを守ることができるんですね？）

微かに青白く光るババカタラ王の像は、しかし、深紅の外套三人に囲まれ、マーリーに対して答えを返してはくれなかった。

魔法 2

気が付くと、ララサラは椅子に縛り付けられていた。小さな丸い部屋の中央。正面の壁には、龍青玉が仕込まれた鎖と、革の紐で緊縛されたルーリーが吊されている。その脇には、何やら不満顔の大司教が立っていた。

首を巡らせると、左手の壁に空いた大穴から、瓦礫の山と化した〈玉座の間〉が見えた。王国の騎士団と、深紅の甲冑を着た騎士達が睨み合っている。右手に目を転じれば、女性を象った像を、深紅の外套を着た魔術師らしき三人が取り囲んでいた。淡く青白く光るその像は、〈始まりの母〉ババカタラ王が龍青玉に結晶したもの――さつき夢で――夢だろうか？――会った女性だった。外套の魔術師達は、像に向かって魔力を注ぎ込んでいるように見える。やはり、あれはあれで何かに使おうとしているようだった。

そして、それを見つめるのはカカパラス――

マーリーとミーネも、この〈王の宝物庫〉にいるはずだった。しかし、ララサラの視界が及ぶ範囲にはいない。おそらく、背後にいるのだろう。

「気付かれましたか、陛下」大司教サン・パウバナが低い声で言った。「偽者を取り込んで何やら画策されたようですが、ここまでです。もう、すべての準備が整いました」

「……余を、ババカタラ王と同じにするのだな？」

「もちろん。陛下はここで、カカパラス大帝国の礎となるのです」

「カカパラス大帝国？」ララサラは呆れて呟いた。

「そうだ！」

脇から声を上げたのはカカパラスだった。

「この、ちんけな王国だけで俺が満足すると思ったのか？ ララ。世界は広大だ。アニシャ連邦も、ベスーニャ帝国さえも越えて、大陸はさらに西に広がっているのだ。ここを起点として、まずはアニ

シャ東方三国をまとめる。それから西へ。やがては、大陸すべてを支配下に治めてみせるぞ」

「余の結晶を使って、逆心を押さえつけてか？」

ふふん、とカカパラスは鼻で笑った。そして、足下の金属板を、がんがんと踏みつける。敷き詰められた金属板の、そこだけが新しいものに取り替えられているようだった。

「ババカタラ王は、ここに民達の安寧を願う、と刻んでいた。甘い。刻むのは〈恐怖〉だ。俺に対する、絶対的な恐怖だよ！」

「……」

「いいか、ララ。百年前に施術をした魔術師……大司教だったようだが、そいつは命を失わず、一族を引き連れてこの国を去ったという。精霊大聖堂に記録があったよ。そして、この女はその末裔だ」

カカパラスはルーリーを指さした。

「もし、その魔術師が命を捨てるまでしていたら、どうなっていたと思う？ この国に攻め込んだマーテル王国軍だけでなく、もっと広範囲の魔術を最初から指向していたらどうなっただろうな？ この規模で百年続いたのだ。十年に絞れば、大陸全土を魔法の支配下に置くことも可能だと思わないか？ 十年もあれば、俺はことを成し遂げてみせるぞ」

「そんなことはさせない」

「なぜだ？」

「兄上は、民達のことを考えていない。民ひとりひとりのことを何も考えていない。心を恐怖で縛り付けて支配するなどと、そんなこと、余は王として許すわけにはいかない！」

「ははははは。だから甘いというのだ。支配者がひとりひとりのことなど考えていたら、兵も動かすことができない。それに、最終的に一つの国に統一されれば、民達も幸せだろう。犠牲などあって当たり前。さっさとお前が龍青玉となれば、犠牲は少なくてすむぞ」

「そんなものは幸せではない。民達は、そんなことは望んでいない」
「お前は民に期待をし過ぎだ。誰だって、長いものに巻かれたいの

だ。それは、この三ヶ月で、お前も身に染みたのではないか？」

王宮朝議を仕切る三諸侯。それに迎合する官吏達——たしかに、一度は挫^{くじ}けた。でも、自ら考え、なんとかしようという芽は、必ず頭を出すものなのだ。その小さな芽を、大切に育ててやるのが大事なのではないか。やがて、一面に花が咲くのを信じて——

「迎合した結果は、やがて本人に還^{かえ}ってくる。つけが回ってきたとき、迎合し続けた者には、それに対処^{すべ}する術がない。だから、誰もが自ら考え、自分で選んで歩かなければならないのだ。そうしてできた道は、国は、心から愛することができ。それが強き国で、幸せな国だ！」

「ララ……お前は王には向いていないな」カカパラスが嘆息した。

「お前の理想論は、結局は民を殺す。なら、民達は何も知らない方が幸せだ」

「そんなことはない！」兄妹の話に割って入った声は、マリーのものだった。「ララの言葉は未来に繋がっている。誰もが、この国の未来が、自分達の未来だと信じることができるんだ」

がつん、という鈍い音がして、マリーが呻いた。外套の魔術師のひとりがマリーを蹴ったようだった。ララサラは唇をかみ、カカパラスを睨み付けた。

「何をどう理屈をつけようと、決着はついたのだ。最終的に生き残り、王となった者が勝ちだ」カカパラスは傲然と言い放った。

「殿下、準備が整いました」

大司教の言葉に、カカパラスは小さく頷いた。

大司教は部屋を横切ると、大理石の柱の一つに手をついた。そして、もごもごと詠唱を行う。直後、大音響と共に柱と壁が吹き飛んだ。

部屋の隅では、ババカタラ王の像が輝きを増していた。像を囲んだ三人の魔術師は、詠唱の声を上げ、揃って手を頭上に挙げた。光を増した像は小さく揺れ始め、それが次第に大きくなり、やがて、ふわっと床から浮き上がった。合わせて魔術師達の体も浮く。

「行け！」

カカパラスが号令を発すると、像を囲んだ陣形を維持したまま、三人と一体は壁の穴を抜けて外へと飛び出した。残りの魔術師ふたりも、飛翔魔法で後を追う。

「何をするつもりだ？」

「〈黒の森〉を消し去るのですよ」答えたのは大司教だった。

アップ・ファル・サル王国とデル・マタル王国の間に横たわる広大な〈黒の森〉。その広さは、アップ・ファル・サル王国全土より広い。――それを消し去る？

かつてマリーリーが言った。ババカタラ王の龍青玉は使えないのか？と。

守護魔法――カカパラスが行おうとしているのは、すでに守護魔法ではないのだが――それを行うには、強大な魔力が必要だ。魔術師に魔力を補充させるより、若い女王の命を魔力に変えられるのなら、その方が効率が良い。なにより、この場に残されている魔法式は、生身の女王から龍青玉を結晶させるものなのだ。可能な限り変更は加えたくないのだろう――そうすると、ババカタラ王の龍青玉はお払い箱となる。もちろん捨てることはないのだろうが、カカパラスらの謀略の中に、その使い道はないだろう、とララサラは思っていた。せいぜい、後々、他国を牽制するための象徴にでも使うのだろうと考えていた。しかし――

さつき見た夢が本当に過去の王国の出来事だというなら、ババカタラ王の龍青玉は、〈黒の森〉を消し去るなどという目的には使えない。使えないはずだ。――しかし、ババカタラ王の意志が風化しつつあり、そこに新たな魔力を注ぎ込まれた場合、魔術師達が意図する魔力が発動しないとも限らない――

仮にララサラが龍青玉に結晶しても、人々の心にカカパラスへの恐怖を植え付ける、等という操心魔法は使えないはずだ。ララサラはそんなことは望んでいない。しかし、それが失敗しても、〈黒の森〉がなくなってしまうては、アップ・ファル・サル王国はデル・

マタル王国の前に裸にされたようなものだ。現状の王国の兵力では、攻め込まれたらひとたまりもないだろう。

「あれだけ巨大な龍青玉に、魔術師五人が魔力を可能な限り流し込む。その力は計りしれないでしょう」大司教がうつとりと語った。

「おしゃべりはその位だ。こっちも始めろ」カカパラスの言葉に大司教は頷き、壁に吊されたルーリーへと歩み寄った。

結局、ババカタラ王の意志が残っていることを祈るしかないのか、とララサラは唇をかんだ。

魔法 3

大音響と共に王宮の壁面が飛び、中から深紅の外套をまとった魔術師達が飛び出してきた。ノースはそれを見るや、背後のベルルに向き直った。

「真っ赤な魔術師が五人飛んでいったわ。陛下の所に行くのは今しかない。一分隊、付いてきて！」

ノースは、第八大隊の指揮を参謀のベルルとケネフに託して駆けだした。

「飛翔魔法が使える魔法騎士はいる？」走りながらノースが訊いた。穴が空いた〈王の宝物庫〉は地上三階にあたる。今から梯子はしこを用意している暇はない。

「申し訳ありません。我が分隊には……」第五〇二分隊長のクーヒスが答える。

ノースは無言で周囲を見渡すと、一番近くを飛んでいた第六大隊の飛行騎士目がけて短刀を投げつけた。第五〇二分隊の五人が目を丸くする。

背後から短刀が飛んできたことに驚いた飛行騎士が、ノースへと鼻先を向けた。鹿毛の馬に魔法騎士と弓騎士が乗っている。弓騎士が魔法の矢をつがえ、ノース達に向かって弓を引き絞った。

ノースは立ち止まり、剣を下げて、飛行騎士に正対する。

青白い光を放つ魔法矢が放たれた。それはノースの顔面を捕らえたかに見えた。

しかし――矢はノースの兜かぶとをかすめ、背後の壁を砕いただけだった。

魔法騎士がノースの前に馬を降ろし、弓騎士が飛び降りた。

「第六大隊第九〇小隊のブラバーです」弓騎士が名乗った。「何事ですか？」

「第八大隊長のノース・ブリューチスよ。そっちの魔法騎士にお願

いがあるの」

「また、随分と荒っぽいお願いですね。危うく射貫いてしまうところでした」

「でも、ちゃんと外してくれたじゃない。あそこに空いた穴に、私達六人を放り込んで欲しいのよ」

弓騎士は背後を振り返った。馬上の魔法騎士はまだ若い女だった。

「六人まとめてですか？ 随分と無茶ですね？」魔法騎士が言う。

「無茶は承知の上。でも、陛下をお助けするには今しかないのよ」

「わかりました。私はデミーです」

ノース達六人とデミーとブラバーは、壁に空いた穴が正面に見える所まで走った。

「全員手を繋いでください」デミーが言う。

「おい、連中が気付いた。早くしろ」ブラバーが魔法の矢をつがえながら叫ぶ。敵の飛行騎士が二騎、こちらを指向していた。

デミーを中心に七人が輪になって手を繋いだ。デミーの甲冑は飛行騎士用の軽量のものだ。その胸と肩に龍青玉が仕込まれている。

甲冑そのものが飛翔魔法の魔法具となっていた。

「いきます！ 飛翔！」

龍青玉が光り、ノース達の足が地面から離れた。と、凄まじい勢いで体が飛び、七人は壁に空いた穴に向かって突っ込んだ。

がんっ、と甲冑が床に叩き付けられる音が響く。自分がどんな態勢なのかもわからない。脇腹の傷が悲鳴を上げる。それでも、ノースは急いで立ち上がると、揺れる頭を振って周囲を見た。七人も同時に飛ばしたため、デミーは魔法の繊細な制御が効かなかったらしい。部屋に飛び込めたのは、ノースを含めて三人だった。デミーを含めた残りの四人はどうなったのか？ ノースはあえてそのことを頭から閉め出した。

「陛下！」

小さな丸い部屋の中では、大司教がルーリーの太股に刀を突き立てていた。

ノースは剣を構えると、大司教に向かって突進した。しかし、脇から一閃された剣に、立ち止まらざるを得なかった。

「さっきの女騎士か。思い切りが良いな」

ノースの前に立ちふさがったのはカカパラスだった。

「こちらは三人だ。王子殿下、お諦めください！」

「冗談」

言うが早い、カカパラスはノースの懷に飛び込んだ。甲冑を着込んだ騎士と、身軽なカカパラスでは速さが違う。剣の間合いを殺したカカパラスは、ノースの足を払った。

「しまっ……」足下をすくわれたノースは、仰向けに倒れた。

カカパラスは倒れたノースには目もくれず、次の騎士へと迫る。騎士が距離を取ろうと下がると、途端に方向を変え、もうひとりの騎士の懷に肉迫した。

カカパラスの背後に回ろうとしていたその騎士は、不意を突かれ、壁際へと追い込まれた。カカパラスは躊躇せず、剣を鎧の隙間へと突き立てた。鎖帷子が千切れる甲高い音と共に、ぐふっ、という嫌なうめき声が漏れ、騎士の腕から力が抜ける。カカパラスは剣を引き抜くと、振り返りもせずに横へと飛んだ。

カカパラスの背後に迫っていた騎士の剣は空を切り、彼は、倒れた分隊の仲間と正面から向かい合うこととなった。

「分隊長……」

その一瞬の隙に、カカパラスは騎士の背後へと回り、剣を突き立てた。カカパラスの持つ〈甲冑割かっちゅうわり〉と呼ばれる剣は、騎士の鎖帷子をも軽々と貫く。もちろん、アップ・ファル・サル王国で鍛えられた魔法の剣だった。

倒れたふたりの騎士に一顧だにせず、カカパラスはノースへと向き直った。ノースは立ち上がっていたが、剣を構えたまま、動き出すことができなかった。

「見ただろう？ お前らと俺では速さが段違いだ。それに、もう準備も済んだ。残念だったな」

壁際には、大司教が、ルーリーの血で壁に魔法文字を書き終えていた。

魔法 4

飛び込んできたノース達を、カカパラスが手玉に取る様を、マーリーは唇をかみながら見つめていた。やられてしまったふたりの騎士は、マーリーとミーネの側に倒れている。壁際には、大司教がルーリーを傷つけ、流れた血で、壁に魔法文字を書いていた。

大司教が最後の一笔を終えると、血文字が光を発し始めた。大司教は、ルーリーを緊縛していた鎖などを外し始める。吊り下げるための縄と、猿轡を残して。〈魔法封じ〉が解かれると同時に、吊されたままのルーリーの体から緑がかった金色の光が溢れた。溢れたその金翠の輝きは、やがて部屋中に敷かれた金属板の魔法文字へと波及した。

「おおっ！」大司教が感嘆の声を上げた。

その魔力のすさまじさに、ノースは壁際へと押しやられた。カカパラスは余裕の表情でルーリーの側、大司教の脇に立つと、ララサララを見据えた。

「覚悟はいいな、ララ」

マーリーの位置からでは、ララサララの表情を見ることができない。

——なんとか、なんとかしてララのところへ——

後ろ手に縛られ、体を縄でまかれ、足も縛られている状態では、マーリーにできることはなかった。それでも諦めきれず、マーリーは体をよじった。すると——唐突に、体をまいている縄が外れた。

マーリーは、はっとして頭を巡らせた。

「じっとしてください」

ミーネだった。さっきまで気を失っていたミーネは、ふたりの騎士が倒れ込んだ衝撃で、気が付いたようだった。甲冑を着た騎士は、剣の他に、脇に何本もの短刀を差している。その一本を手に、ミーネはマーリーの縄を切っていた。

部屋の中では、ますます光が強くなっていた。金属板に刻まれた魔法文字が光り、溢れた光は波となってララサララに降り注ぐ。ララサララの頭上には青白い輝きが広がっている。輝きの元は、額につけた龍青玉の額飾りだろう。魔法に詳しくないマーリーにも、そろそろ魔法が最終段階に入っていることが感じられた。

足を縛っていた縄が解けた。マーリーは立ち上がると、後ろ手に縛られたまま、光の中へと飛び込んだ。

凄まじい魔力の流れは、マーリーの体を押し返そうとする。その力に呼応するように、胸の首飾りが青白い光を発した。服の下にあるにもかかわらず、その光は溢れ出した。そして、マーリーに叩き付ける魔力を、徐々に押し始める。

マーリーは歯を食いしばり、光の中心へと歩を進めた。一步、また一步と、ララサララへと向かう。無限にも、一瞬にも感じられる時間の果て、マーリーはララサララまであと数歩の所まで近付いた。そこで、部屋の向こう側にいるカカパラスが、マーリーの行動に気付いた。

しかし、いかな王子とて、この魔力の潮流の中には入ってくることができない。カカパラスは憤怒の表情でマーリーを睨み付けた。

しかし、マーリーはそんなことには気付いていなかった。足を踏ん張り、最後の距離を埋めるべく、足を前へと送る。

――あと少し。

――あと少しでララサララに届く。

ララサララの額にある龍青玉の額飾り。あれが、ララサララを龍青玉に結晶させる引き金になるに違いない。

額飾りを外せば、ララサララが龍青玉にされてしまうことは回避できる――できるはずだ。

マーリーは、手を伸ばせばララサララに届くところまで到達した。しかし、手を縛られたままのマーリーは、手を伸ばすことができない。

輝きはますます強くなり、ララサララの体は、ほとんど青白い光

に飲まれてしまっている。

大司教が、ルーリーの血で何かを書き始めた。それが最後の呪文なのだろうと思われた。

マーリーは、力を振り絞ってララサラの傍^{かたわ}らまでたどり着くと、その額に顔を近づけた。

そして、額飾りにかみついた。

（ララ、ごめん！）

ララサラの綺麗な顔に傷が付かないことを祈りながら、マーリーは全体重をかけて、額飾りを食いちぎった。

魔法 5

ばんっ、と何かが弾けるような音がした。

大司教がルーリーの血で呪文を書き、魔法が始まって以降、光に飲み込まれたラササラは、何もわからなくなっていた。ただ、何かが弾ける直前、マーリーの声を聞いた気がした。

気が付いたとき、ラササラは、魔法が始まる前と同様、丸い部屋の中央に座っていた。

（どうなったのだ？）

龍青玉になってしまった実感はない。縛られたままだが体は動く。何やら額が痛い以外は、特段の怪我もなさそうだ。

ひゅん、という風切り音が聞こえて、ラササラは顔を上げた。

眼前には、吊されたルーリーと、呆然とした顔の大司教、憤怒の表情のカカパラスがいる。

そして、ルーリーの猿轡が、飛来した短刀に切り裂かれたところだった。

「目を覚ましなさい！ 金翠の歌姫！」ノースが叫ぶ。

ルーリーの瞳がゆっくりと開かれた。

大司教がしまったという顔をする。

カカパラスの剣がルーリーへと振るわれる。

しかし、すでに遅かった。壁に吊されていたルーリーは、いつの間にか、部屋の中央に立っていた。

「陛下……ご無事で」

「ああ」

ルーリーが小さく何かを呟くと、ラササラを縛っていた縄が弾けた。

ラササラは周囲を見渡し、床に倒れたマーリーを見つけた。マーリーは額飾りを口に咥え、手は後ろで縛られている。床に倒れて気を失っていた。その胸には、龍青玉が砕けてしまった首飾りがある。

った。

「マーリー！」

「陛下。その子を頼みます」

ララサララが何かを言う前に、ララサララとマーリーは、部屋の隅へと移動していた。ノースのすぐ脇だった。同時にマーリーの手を縛っていた縄が弾ける。

ルーリーの詠唱の速さは尋常ではなかった。ララサララでは、聞き取ることも、いつ詠唱したのかすらわからない。これが、覚醒した〈金翠の歌姫〉の力なのか――

「陛下」ノースだった。

「大隊長。何がどうなった？」

「その子が魔法を阻止しました」

「そうか」

ララサララはマーリーを見つめた。愛おしさがこみ上げ、その頬を撫でる。そして、一瞬でその感情を押し込め、顔を上げた。

部屋の中央では、ルーリーがカカパラスに向かい合っていた。

「お久しぶりです、殿下」

「〈金翠の歌姫〉。子爵邸以来だな」

「私が愚かだったばかりに……殿下の企みに乗せられてしまいましたわたくし。でも、元々は我ら一族から始まったこと。これを終わらせるのは、私の役目です」

ルーリーが言い終わらないうちに、床の金属板がひしゃげ始めた。刻まれた魔法文字が消えていく。

「あああ！ 魔法式が！」大司教が叫び声を上げて床に這いつくばるが、その目の前で金属板は崩れ、砂になり、風に舞った。

異変を察知した深紅の騎士達が部屋に飛び込んできた。しかし、ルーリーが口笛の様な音を発すると、全員吹き飛ばされ、動かなくなった。

カカパラスはルーリーを睨み付けた。

「これで終わりではない！ もうすぐ〈黒の森〉が消える。港から

上陸した軍も、この国の兵など簡単に蹴散らすぞ！」

ルーリーは悲しそうに首を振った。

「あなた達は、結局真実にはたどり着けなかった。女王を龍青玉に結晶しても、女王の心からの想いにしか魔力は発動しない。ババカタラ王の想いは未だに健在です。あの方が、〈黒の森〉を消す等という野蛮な魔法に答えるはずがない」

「で、では……」大司教が恐る恐る声を上げた。

「そう。ララサラ陛下を龍青玉に結晶させても、無駄だったという事です」

大司教はがっくりと肩を落とした。

しかし、カカパラスは逆に、肩をふるわせて笑い出した。

「ははははは！　そういうことか。なるほど、そこには俺は気付かなかった。しかし、無駄ということはないぞ」

「？」

ルーリーが怪訝な顔をする。

「俺が、ババカタラ王と同じ魔法を使おうとしたら、きっと失敗しただろう。しかし、俺への恐怖ってのは、上手くいったんじゃないか？　きつとララの中には、俺への恐怖が溢れていただろうからな」

「もしそうだとしたら、それは悲しいことです」

ルーリーはカカパラスに向かって左手を掲げた。カカパラスの手にある剣が、弾かれて部屋の隅に転がる。

それを見たララサラは、「待て！」と叫んでいた。

「それ見ろ、ララは俺を殺すのが怖いそうだ」

「陛下。これは私が勝手にすることです。陛下が負うべきことではありません」

「だめだ、母さん！」ララサラの腕の中で、マリーが叫んだ。

ルーリーが思わず振り向いた。その一瞬について、カカパラスが〈玉座の間〉へと飛び出した。

「しまった！」ノースが慌てて後を追う。

「ごめん、ララ」マリーが体を起こした。

「いや。気持ちわかる。母君に人殺しをして欲しくなかったのだろう？」

「……」

「これは我が王家の問題だ。裁き、葬るなら、私がやらねばならぬことだ」

「陛下！」ノースが慌てて戻ってきた。「王子殿下が……」
「？」

ララサラは瓦礫がれきを乗り越え、〈玉座の間〉へと足を踏み入れた。瓦礫が溢れ、硝子が散乱した広間には、深紅の騎士にやられた騎士が倒れ、怪我をした騎士達がうずくまっている。しかし、誰もがしんと静まりかえり、部屋の中央一点を見つめていた。

そこには、血ぬれて倒れたカカパラスの姿があった。

そして、手に剣を持ち、呆然と立っているのは――パパマスカ・バラオ前王だった。

終わり、そして、始まり 1

事態は急速に終結へと向かった。

ララサラが〈玉座の間〉で呆然としているうちに、ルーリーは王都へと飛び出した。〈魔法の雷〉^{いかずち}の一撃で、飛行騎士をすべて墜とすと、返す刀で深紅の魔術師達も一瞬で葬った。ババカタラ王の龍青玉は結局発動せず、〈黒の森〉へと落ちた像は、そのまま行方がわからなくなってしまった。

王都の敵を一掃したルーリーは、その足でアプセン州へと飛んだ。その速さは、もはや飛翔魔法と呼べるものではなく、瞬間移動に近かった。

上陸寸前だったアニシャ東方三国軍の頭上に突如降り注いだ〈魔法の雷〉は、彼らの戦意を挫くのに充分な威力を持っていた。そして、単身、三国軍の旗艦へと乗りこんだルーリーは、指揮を執っていたブリストー子爵を捕らえ、王都へと連行した。

後でわかったことだが、元々この侵攻に、アニシャ東方三国の王達は懐疑的だったのだ。しかし、万が一にでも成功したら、との皮算用から、兵だけをカカパラスとブリストー子爵へと与えていた。もちろん、精鋭とは言い難い兵達だ。だから、子爵以外には、三国の王族も、貴族も軍の幹部すらいなかった。そのため、子爵が抜けた軍隊は総崩れとなり、港湾候が指揮するアプ・ファル・サル王国軍——アプセン州軍と騎士団の混成軍——に返り討ちにあうこととなった。もちろん、ルーリーの雷の一撃が、これ以上もなく効いていたのは言うまでもない。

カカパラスが死んだことで、王宮内の王子派の士気も急速に落ちていった。最後まで〈遠見の間〉で抵抗した、バンドス騎士団長とシュコーチス副騎士団長以下数名も、ノースを筆頭とする騎士団に追い詰められ、観念せざるを得なかった。

鉾山候と平原候は、自分たちの処遇がどうなるのか震え上がり、

彼らの手足だった女官長を始めとする女官達は、いつの間にか王宮から姿を消していた。

パウバナ大司教は、魔法の失敗に衝撃を受けたのか、一気に老け込んだ。すべての地位を剥奪された彼は、命だけは赦され、サリユル州の寒村へと追いやられた。しかし、誰の目にも、余命幾ばくもないのは明らかだった。

そして、王宮に連行されたブリスター子爵は、ララサアラの前に引き出された。

「そなたがブリスター子爵か？」

「……」

「一つだけ訊く。今回のことは、兄上の野望だったのか？ それとも、そなたの野望だったのか？」

ララサアラとしては、すべてがカカパラスひとりの野望だったとは思いたくなかった。たしかに、きっかけはこの王宮にあった。しかし、その先は、ブリスター子爵にそのかされたと思いたかった。しかし、結局、子爵はひとことも言葉を発しなかった。

王国としては、敗戦の将にかける情けはさすがになく、ブリスター子爵は極刑に決まった。リルの遺体と面会する機会を与えたことが、ララサアラのせめてもの温情だった。もちろん、子爵のことを思い遣ったわけではなく、リルのことを思っていたことだったが。

カカパラスを刺したパパマスカ前王は、多くを語らなかった。ただ、カカパラスの遺体を見つめる目が悲しげだった。カカパラスが自分を騙し、王国をも潰そうとしたことが、父王には信じられなかったのではないか。父親として、何とかカカパラスを止めようと思ったのではないか——それが、ララサアラが出した結論だった。もともと、憶測の域は出ず、憔悴したパパマスカは、また、マーテチス州の離宮へと引っ込んでしまった。

そして、王宮内が落ち着いて始めて、ララサアラはリルと対面したのだった。

終わり、そして、始まり 2

「待たせたな、リル」

地下牢から運び出されたリルは、庭園脇の、騎士団詰め所の一角に安置されていた。寝台もなく、棺もまだなく、ただ、毛布の上に横たえられていた。胸元に置かれた花は、ノースの心遣いだろう。

ララサララは、横たわるリルの傍らに膝をついた。

「父王と母様に会った。師も……元気だった」

詰め所の中にはふたりきりだった。さっきまで一緒だったノースは、外で待っている。

「兄上は死んでしまった」

ララサララはリルの顔を覗き込むと、その額にかかる髪を丁寧に整えた。かつて生気に溢れていたリルの顔が、今は土気色にやつれ、見るに堪えない。

「……お前に助けられた後、色々なことがあった」

わずかに開いた窓の隙間から、王宮を修理する槌音や、人足達の声が聞こえてくる。それが、詰め所の中の静寂をいっそう際立たせていた。

「話したいことがたくさんあるのだ……リル。私は、王としてやっていく決心をした。女王としての私はこれからだ……それなのに……」

微動だにしないリルの顔に、ララサララの涙が落ちた。

「……リル。私は、ちゃんと王となる。だから……もう、姫と呼ぶのは終わりだ……」

ララサララは涙を拭った。

「涙も……今日までだ。リル。最期の願いだ。姫だった私と、私の涙を連れていってくれ」

ララサララは立ち上がった。

「マリーが、私のために歌を作ってくれたんだ」

小さく深呼吸をして、胸を張る。

「自分で歌うのは……少し恥ずかしいけどな」
そして、歌い始めた。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳

春の香まいて野を駆ける

若き清しきその息吹

雨雲払う風の唇

宵闇散らす明の声

踏みし草原咲き誇る

紅き瑞しき立ち姿

厳しき誓いの王の冠

民草愛でる慈悲の掌

山原海と精霊の

満つる麗しき邦の長

ララサララの発する一音一音が、光となり、リルに降り注ぐ。
萌葱色のその光は、リルを優しく包み込んだ。

——姫様

声を聞いた気がして、ララサラはリルを見た。

しかし、やはりリルは動かなかった。それでも、ララサララの顔が、ぱっと輝く。

「心配するな、リル。ブリュース大隊長や、港湾候や、頼もしい者達がたくさんいる。だから、安心して見ていてくれ」

ララサラは勢いよく身を翻した。
ひるがえ

もう振り返らない——ララサラは心に決めた。

ララサラの言葉は、間違いなくリルに届いたから。

それは、確信だった。

ララサラが最後に見たリルの顔は——たしかに、やわらかく微笑んでいたのだから——

終わり、そして、始まり 3

それから一ヶ月後。

破壊された王宮の修理が終わった祝典が、王都ファル・バラオで盛大に開催された。

民達の前に現れたララサラ・バラオ女王は、美しい声で国歌を披露した。その歌声に合わせて王都を満たした萌葱色の〈行幸の御証〉は、人々の心を打った。

祝典では、旅の歌い手ルーリーが〈麗しの王国〉を、その息子マリーが〈麗しのララサラ〉を披露して喝采を浴びた。

祝典の最後、ララサラは民達の前に立った。王宮前の広場には、数千人の王都の民が集まっていた。王宮の魔法使い達は、ララサラの声を皆に届けるべく、各所で〈鸚鵡返し〉の魔法具を用意した。鳥の形をしたその魔法具は、王宮の露台で発せられたララサラの声を、離れた所で繰り返す。民達は、王の声をすぐに聞くことができるのだ。

「一月前の事件で、この国はまだ弱き国であることを露呈した」
ララサラは話し始めた。

「百二十年間、一度も他国の侵攻を受けたことがないという我々の矜持、それはまやかしだった。百年前、〈始まりの母〉ババカタラ王は、当時の隣国マーテル王国の侵攻に対して、アップ・ファル・サル王国への野心や逆心を押さえる魔法を使った。それは、百年もの間、周辺国の野心を押さえ、王国の民達にも影響を及ぼしてきたのだ。

伝説の守護魔法……それは、本当に存在していた。そして、それはもうない」

ララサラは広場を見渡した。咳一つ聞こえない。

「我々は、暖かい母の腕の中から巣立つときが来たのだ。

守護魔法がなくなってみれば、この王国は単なる小さな国だ。騎

士団や州軍は戦闘経験が少なく、王族や王宮の官吏も外交経験が少ない。その一つ一つを、我々はこれから積み上げていかねばならないのだ。

だから……皆で考えて欲しい。余の進む道は間違っていないか？

王宮は？ 騎士団は？ 各州は？ たしかに、王国を運営するのは余の仕事だ。しかし、余が国の頭だとしたら、民は血であり、骨であり、肉なのだ。どちらが欠けても、国としては完全ではない。

余は、ここに集まった皆や、この国中の皆と、足並みを揃えて進んでいけるような国を作りたい」

ララサラは、愛しい人々の顔を思い浮かべていた。マーリー、リル、ノース、アリー、ギニー、ルーリー、ミーネ。師や父王や母様、兄上までも。

「四ヶ月前、余は言った。余の望みは常闇である、と。何も見ず、聞かず、考えず、膝を抱え込んでしまえる心地よさは、これまでのこの王国の状態にも通じるものがある。闇をかき消す光は、眩しくときには痛みさえも伴う。しかし、その先には、新たな世界の広がりが見えてくるのだ。その光に目を慣らし、自分の足で進む方向を見定めてこそ、この国は強き国となることができるのだと思う。

今日は、新たな王国の門出だ。この先は楽な道ではない。しかし、未来へと続く明るい道だ。さあ、一緒に歩き出そうではないか！」

嵐のように沸き起こった拍手と歓声は、王宮前の広場から溢れ、王都全体に響き渡った。そしてそれは、いつまでも止むことはなかった。

終わり、そして、始まり 4

王宮の中庭は秋の装いを見せ始めていた。
色づき始めた葉を眺めながら、マーリーは口ずさんだ。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳

春の香まいて野を駆ける

若き清しきその息吹

「それは、余のことか？」

「違いますよ、ミーネさん」

マーリーが振り返ると、茶器を手にしたミーネが立っていた。ミーネは今、ララサララ付きの女官をしている。

「やっぱり、マーリーさんは騙せないわね。未だに、王宮内でも引つかかる人が多いのに」

「僕の前では、ララは〈余〉とは言わないですよ」

「はいはい」ミーネは笑いながら言った。「〈麗しのララサララ〉随分と流行っているみたいですわね」

祝典で歌って以降、〈麗しのララサララ〉は王国全土で流行っていた。マーリーはどこへ行っても、〈麗しのララサララ〉を歌うよう望まれた。

「まあ、ちょっと自信になったよ」

「あれは私も一緒に作った歌ではないか」

いつの間にか、中庭にララサララがいた。臙脂色のドレスを着て、髪を高く結い上げている。ララサララに気が付くと、ミーネは一礼して中庭を出て行った。

「やあ、ララ。久しぶり。……そうだね、君と一緒に作った歌だ」

「だから、歌うときはいつも私のことを思い出すのだぞ」

ララサララが言って、小さな沈黙が降りた。

秋の風が中庭を吹き抜けていく。

「やっぱり、行くんだな？」

「うん。もつともつと、色々な国を見て回りたいんだ」

マーリーとルーリーは、この一ヶ月、アップ・ファル・サル王国内を回っていたのだった。

「魔術師になるのか？」

「……それはわからない。一族のことも、母さんのことも、もつと時間をかけて考えたいんだ」

「そうか。でも、魔術師にならなくても、歌い手としてやっていくさ」

「ありがとう」

そしてマーリーは、懷から小さな袋を取り出した。

「これ、受け取ってくれるかな」

「なんだ？」

ララサララは袋を受け取ると、その場で開いた。中から出てきたのは、銀色に光る首飾りだった。

「これは……」

「例の首飾りと同じ細工なんだ。ガタナさんをお願いして作ってもらった」

かつてババカタラ王の首にかかっていた〈魔法返し〉の首飾り。

それは今、巡り巡ってルーリーの首にかかっている。それと同じものを、マーリーはガタナに頼んで作ってもらったのだった。その下げ飾りには、龍青玉の代わりに翡翠がはめ込まれている。もちろん、龍青玉を使えば魔法具として機能する。現在の魔法細工と随分様式の違うそれは、しかし、力は驚くほど大きい、とガタナは言った。

ララサララは下げ飾りの裏を見た。

〈草原を駆ける早春の息吹へ〉と刻んであった。

「ミーネが余計なことを言ったな？」

「……何のことかな？」 マーリーの視線が泳いだ。

ララサララは首飾りをかけると、胸の前で下げ飾りを握りしめた。

「マーリー」

「なに？」

「かつて盟友だった、ババカタラ・バラオとレーヌ・ファブナックは、結局結ばれなかったのだぞ」

ララサララが、悪戯っぽい瞳でマーリーを見つめていた。

「でも、僕らの道は、僕らが選んで歩く道だよね？　どうなるかなんてわからないよ」

「そうだな」ララサララは花のように笑った。「ありがとう、大切にする」

ララサララが小さな手を差し出した。

マーリーはそれを力強く握り返した。

「また会おう、マーリー」

「うん。きつとまた会いに来るよ、ララ」

王宮の中庭に降り注ぐ秋の日射しが、柔らかくふたりに降り注いでいた。

上空で、名も知らぬ鳥が、一声鳴いた。

エピローグ

アニシヤ連邦最西の国、ジャランダ王国。

城塞都市王都ジャルス・ホネの城門傍に、何やら人集り^{ひとだか}ができていた。

城門をくぐって王都に入るには、嚴重な手続きが必要だった。城門の外には、手続きを待つ人々が溢れている。そんな群衆の一部が、高い城門下の一面に集まっていた。

人々の輪の中心にいるのは、翡翠色の瞳を持ち、腰までの金髪が美しい三十代半ばと覺しき女性と、同じ髪の色をした十五〜六歳の少年。ふたりの面立ちは良く似ており親子と知れた。

少年が一步前に出ると、大きく息を吸った。

——新緑に映える銅の髪

陽光きらめく藍の瞳

春の香まいて野を駆ける

若き清しきその息吹

雨雲払う風の唇

宵闇散らす明の声

踏みし草原咲き誇る

紅き瑞しき立ち姿

厳しき誓いの王の冠

民草愛でる慈悲の掌

山原海と精霊の

満つる麗しき邦の長

少年が歌った歌を知っている者はいなかった。

しかし、砂漠が多いこの地方の人々は、爽やかな歌声と歌詞に知らず引き込まれていた。

歌い終えた少年は、深々とお辞儀をすると、観衆に向けていった。「ただいまの歌は〈麗しのララサララ〉でございます」

観衆がざわめいた。聞いたことがあるぞ、と誰かが言った。

「遙か大陸の東、小さな魔法の国アプ・ファル・サル王国の、〈早春の息吹〉と称される、若き女王ララサラ・バラオ。これからお目にかけますは、陰謀に巻き込まれ、それに敢然と立ち向かった女王の物語です。お代は見てのお帰りに」

母親が、〈うそつき面〉と〈風の弦〉を取り出すと、〈うそつき面〉をつけた。

少年はそれを確認し、高らかに言った。

「時は春。アプ・ファル・サル王国の華麗なる第一王女ララサラは、十五歳で突如王位に就くこととなりました」

母と息子が紡ぐララサラの物語は、蒼天へと響き渡り、そして、人々の心に刻まれていった。

《了》

エピローグ（後書き）

最後までおつきあいいただきありがとうございました。

外伝 『湯殿の約束』

一

「私が背中を洗ってやる」

泡だった手拭いを掲げて、ララサララが言った。

「姫様、それはなりません」

背中を隠すように身構えたリルが、わずかに及び腰で答えた。

「なんでだ？ 姫が背中を流してはいけない理由があるのか？」

「あります。姫様に背中を洗わせたとあっては、私が女官長やベール様に叱られます」

「ばれなければ問題あるまい」

「でも……姫様は喋っておしまいになるでしょう？」

「う……」

痛いところつかれたララサララは言葉に詰まり、結局強硬手段に出ることにした。身構えるリルに飛びかかると、手拭いで強引に背中をこする。

「や……姫様、やめて下さい。くすぐったいです！」

「こら、あばれるな」

「ひゃあ！」

リルの変な悲鳴と共に、豪快な水音が湯殿に響き渡った。もつれ合ったふたりが、足を滑らせて湯船に落ちたのだった。

「姫様、ご無事ですか？」

いち早く浮き上がったリルが声を上げる。

「……」

湯船から顔を出したララサララは、長い褐色の髪が顔にへばりつき、なんとも言えない表情をしている。

ぷつ、とリルが吹き出した。

「……ふふふ、あはははははは」

「ふふふふふ」

釣られてララサラも笑い始める。

湯殿の中に、ふたりの少女の笑い声がこだました。

二

ここは、アップ・ファル・サル王国のアップ・ファル・サル王宮。その最奥にある〈奥の宮〉の、王族専用の湯殿だ。

ララサラは王国の第一王女で十歳。

リルは王女付き女官で十三歳だった。

隣国デル・マタル王国からやってきたリルが、王宮の女官として働き始めて三年。ララサラ付きとなって一年が経っていた。

王女と女官といっても、まだ子供のふたりだ。立場を越えて仲が良く、湯浴みで一緒に湯船にはいることも、大人達は大目に見ていた。

もっとも、ララサラはあまり気にしていないが、リルはしっかりと立場をわきまえている。リルの父はデル・マタル王国の貴族で、彼女は貴族としての教育をしっかりと受けていた。

「あいかわらず、リルは頭がかたいな」

「姫様が気になさるなすぎなのです。やって良いことと、良くないことがありますよ」

「わかったわかった」

ふたりは湯船に浸かって向き合っていた。ララサラは湯浴み好きで、一度入ると優に半時（約一時間）は湯殿にいる。

「ときにリル、さっき話していた男はだれだ？」

「さっき？ どなたのことです？」

「朝餉のあと、何やら声をかけられていただろう？」

「ああ、騎士団の方です。今日初めて会った方です。名前は……ベ
ルルさん、とかいいました」

「なんのようだったのだ？」

「それは……その……」

リルの視線が泳いだ。ララサハラがほくそ笑む。

「言い寄られたのだな」

「ええ……まあ。でも、あの方は大人ですし、私はまだ十三です」

「そなた、以外に大人びた体型をしているからな」

「姫様！ はしたないことをいわないで下さい！」

リルは自分の胸を抱き、ララサハラを睨み付けた。

「本当のことだろ？ で、なんと答えたのだ？」

「何とも何も……お茶に誘われましたが、お断りしました」

「何だもったいない」

「もう！」

リルが控えめにお湯をララサハラにかけ、それを受けたララサ
ハラが、盛大にリルにお湯を浴びせた。

「わっ……姫様、やりましたね？」

「やる気か？ 受けて立つぞ！」

そうして、ふたりは大はしゃぎでお湯の掛け合いに興じ始めた。

三

「リルはどんな男が好みなのだ？」

「姫様はおませですね」

「質問に答えろ」

「……優しい方が良いです。側にいて、ほっとできるような方。姫
様はどうなのですか？」

「私か？」

「そうです。私にだけ言わせるのはずるいです」

ララサララはしばらく考えていたが、やがて言った。

「歌の上手いひとが良い」

「陛下のような方ですか？」

ララサララの父、アップ・ファル・サル王パマスカは、歌が上手いことで有名だった。

「うーん……ちょっと違うな。もっとこう……」

「もっとこう？」

「……上手く言えない」

「平原候閣下のところのジョカ様はいかがですか？」

「うわっ！ 冗談じゃない。考えただけで虫ずが走る」

「姫様、お言葉が下品です」

ララサララは頬を膨らませた。

「あんなのではない。そうだな……この国の者ではないほうがいい。歌の上手い素敵なひとが、私を迎えに来るのだ。私のための歌を作ってた。どうだ？」

身を乗り出すララサララに、リルは優しく微笑んだ。

「素敵ですね。……さあ、上がりましょうか」

リルは先に立って湯船を出ると、浴布を持ってララサララを招いた。

「さあ、姫様」

言われるままに湯船から上がり、リルに体を拭かせながら、ララサララが小さく言った。

「今の話……兄上たちにはないしょだぞ」

「はい」

「本当にないしょだぞ。きつと……からかわれる」

「はい」

リルが何も突っ込んでいないにも拘わらず、ララサララはなぜか頬を赤くしていた。

「本当に、本当にだぞ」

「わかっています。私が姫様との約束をやぶったことがありますか？」

リルは、別の浴布で自分の体も拭うと、ララサララを促して湯殿の出口へと向かった。

「姫様。湯殿でかわした女同士の約束は絶対です。だから姫様も、私の背中を洗おうとしたことは他言無用ですよ」
「わかった」

四

リルは約束を守った。

しかし、ララサララは守りきれず、後日、随分とリルに恨まれることとなったのだった。

《湯殿の約束 了》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0970f/>

ララサララ物語 ～女王と歌と常闇と～

2010年10月8日11時23分発行